

博士論文

日本語と韓国語のオノマトペに関する対照研究*

イウナ
李 殷娥**

名古屋大学大学院
国際開発研究科

名古屋大学図書



11349542

審査委員会

中條直樹(委員長)

中條直樹

成田克史

成田克史

飯田秀敏

飯田秀敏

研究科委員会合格決定

2001年3月7日

* A Contrastive Study on Japanese and Korean Onomatopoeia

** Eun-Ah LEE, Republic of Korea

2000 年度 博士学位論文

日本語と韓国語のオノマトペに関する対照研究

A Contrastive Study on Japanese and Korean Onomatopoeia

名古屋大学大学院 国際開発研究科
国際コミュニケーション専攻

氏 名： 李 殷娥
イ ウ ナ

指導教官：中條 直樹 教授
成田 克史 助教授
飯田 秀敏 教授

目 次

第1章 序	1
1.1 研究の目的	1
1.2 研究の範囲・方法	4
1.3 オノマトベ研究の歴史と現状	7
1.4 オノマトベの名称・定義・分類・特徴	12
1.5 論文の構成	21
第2章 日本語と韓国語のオノマトベ	24
2.1 語彙量	24
2.2 オノマトベの使用頻度	27
2.3 音韻的特徴	41
2.3.1 長さ	41
2.3.1.1 日本語の場合	41
2.3.1.2 韓国語の場合	46
2.3.2 音節構造	50
2.3.2.1 母音	51
2.3.2.1.1 日本語の場合	51
2.3.2.1.2 韓国語の場合	52
2.3.2.2 子音	53
2.3.2.2.1 日本語の場合	53
2.3.2.2.2 韓国語の場合	56
2.4 形態的特徴	57
2.4.1 反復形オノマトベ	57
2.4.2 拡張形オノマトベ	60
2.4.2.1 撥音「ん」	60
2.4.2.2 促音「っ」	62
2.4.2.3 長音	64
2.4.2.4 語末の「り」	66
2.4.3 韓国語の場合	70
2.5 統語機能	73
2.5.1 副詞的用法	80
2.5.2 用言的用法	86
2.5.2.1 日本語の用言オノマトベ	86

2.5.2.1.1 動詞	87
2.5.2.1.2 形容詞・形容動詞	97
2.5.2.2 韓国語の用言オノマトベ	100
2.5.2.2.1 動詞	100
2.5.2.2.1.1 하다型	102
2.5.2.2.1.2 거리다型	104
2.5.2.2.1.3 대다型	107
2.5.2.2.1.4 이다型	109
2.5.2.2.1.5 その他	110
2.5.2.2.2 形容詞	112
2.5.3 名詞的用法	118
2.5.3.1 日本語の場合	118
2.5.3.1.1 名詞	119
2.5.3.1.2 複合名詞	120
2.5.3.2 韓国語の場合	125
2.5.3.2.1 名詞	125
2.5.3.2.2 複合名詞	130
2.6 音声象徴	133
2.6.1 日本語の場合	134
2.6.2 韓国語の場合	142
2.7 オノマトベの意味	151
2.8 まとめ	156
第3章 オノマトベと反復表現	160
3.1 反復形オノマトベ	160
3.1.1 分類	160
3.1.1.1 日本語の場合	160
3.1.1.2 韓国語の場合	168
3.1.2 分布比率と使用頻度	176
3.1.3 意味	179
3.1.3.1 反復・継	179
3.1.3.2 複数	186
3.1.3.3 強調	188
3.1.3.4 類音反復形	190
3.2 一般表現の反復形	192
3.2.1 反復・継続	194

3.2.2 個別・分散・多様	198
3.2.3 複数	202
3.2.4 強調	204
3.3 反復形オノマトベと反復表現	213
3.4 並列構造	215
3.4.1 名詞の並列	215
3.4.2 連体修飾語の並列	224
3.4.3 副詞の並列	228
3.4.4 節の並列	230
3.4.5 慣用句的並列表現	235
3.5 並列構造と反復表現	243
3.6 漢文の影響	245
3.7 まとめ	254
第4章 オノマトベと体言型・用言型表現	257
4.1 体言型言語と用言型言語	257
4.2 英語を体言型言語とする根拠	261
4.2.1 同族目的語	262
4.2.2 虚語的動詞	270
4.2.3 'in a great hurry' タイプの前置詞句	282
4.2.4 'of importance' タイプの前置詞句	293
4.2.5 'a good pianist' タイプの名詞句	297
4.2.6 'have the fortune to do' タイプの表現	299
4.3 連体修飾と連用修飾	302
4.4 副詞型オノマトベと動詞型オノマトベ	315
4.5 言語の表現型とオノマトベ	331
4.6 まとめ	333
第5章 まとめと今後の課題	337
文献目録	343

第1章 序

1.1 研究の目的

日本語と韓国語にはオノマトベと呼ばれる語彙が極めて豊富に発達しているといわれる。おそらくどの言語にも、オノマトベ、とりわけその下位類である擬声語・擬音語は何らかの形で存在すると考えられる。しかし日韓両言語においては、語彙量の大きさにおいても、形態・用法の多様性においても、また使用頻度の高さにおいても、オノマトベは両言語の言語的特徴の1つに数え上げられるほどの発達を見せている。それはもはや単なる語彙カテゴリーであるというばかりでなく、1つの語彙体系と言ってもいいほどの存在となっている。

本論文の第1の目的は、日本語と韓国語のオノマトベを様々な角度から比較対照することにある。両者は単に高度に発達しているというだけではない。日韓両語にある程度通じた者ならば誰でも気づくことであろうが、両者は極めて高度な類似性を共有している。これまで、日本語研究においても韓国語研究においても、オノマトベは重要なテーマの1つであり、かなりの先行研究の蓄積がある。しかしながら、意外なことに本格的な日韓対照研究はなされていないのが実状である。日本のオノマトベ研究の中には対照言語学的アプローチを試みたものがないわけではない。しかしながら、比較の対象となる言語は主として英語であって、日本語と類似した韓国語のオノマトベとの本格的な対照研究は発表されていない。オノマトベを特集した研究論文集に日本語のオノマトベ研究と韓国語のオノマトベ研究が併載されることはあっても、日本語のオノマトベ研究の中で韓国語のオノマトベに言及されることはほとんどない。これは、単純に、日本の学界が韓国語に関して無知・無関心によるものと考えてるのは当を得ていないであろう。そうではなく、日本語のオノマトベの特質を示すためには、それと性格の異なるオノマトベ、例えば英語のオノマトベと対比させる

方が効果的であるというのが主たる理由であると考えられる。一方、韓国では日本のオノマトベ研究の歴史が長くある程度知られていることもあって、韓国語オノマトベの研究の中で日本語オノマトベへの言及がなされることがあるけれども、断片的な指摘にとどまっており、本格的に日韓両語のオノマトベを比較対照しようとするものではない。また、筆者自身の経験から判断して韓国語話者がある程度日本語に習熟したとき特に関心を持つようになる問題の1つがオノマトベであるから、日本語学科の卒業論文あるいは修士論文のレベルでは日韓両語のオノマトベの比較をテーマとしたものがかなりあると思われるけれども、その成果が学術誌に掲載された例は筆者の知る限りではないようである。

本研究において日韓両語のオノマトベを比較対照することにより両者の類似性を詳細に記述しようとするのは、従来そのような研究がなかったからという理由からだけではない。両体系の高度な類似性を認識して初めて意識される問題があり、その問題が日韓両語のオノマトベを性格づける上で極めて重要な意味を持っていると考えられるからである。それは、日韓両語のオノマトベはなぜ酷似した特徴を持っているのかという疑問である。そして、この疑問に対する答えを探るのが本論文の第2の目的である。日韓両語のオノマトベは様々な点において共通性・類似性を持っているが、中でも最も顕著で重要な共通の特徴は、形態面において反復形(疊語形)が極めて豊富であることと、機能面において副詞的な用法が中心的役割を果たしていることである。この2つの特徴に焦点を絞って、日韓両語のオノマトベがなぜ高度に類似した体系を発達させたのか、その理由を考察してみたい。

ある言語現象に関して、「なぜ」と問うことは必ずしも必要なことではない。場合によっては、無意味な問いかけでしかない場合もある。しかしながら、日韓両語のオノマトベに関しては、なぜ高度に発達したのか、なぜ似ているのかを問うことは、オノマトベへの理解を深める上で非常に重要であるように筆者

には思われる。従来の研究においては、このような問いかけがほとんどなされてこなかった。その理由は2つあると思われる。1つは、既に述べたように日韓両語のオノマトベに関する本格的な対照研究がなされていなかったためである。両体系を綿密に比較対照し両者の類似性を正確に認識してはじめて、なぜ似ているのかという疑問が生じるものである。類似性が意識されていないのに類似性に対する疑問が生じるはずはない。本格的な対照研究がなされてこなかったことについては、対照研究というものの性格に由来する原理的な理由があるように思われる。対照研究は異なる言語体系を比較対照することによりその異同を明らかにし、その背後に存在する一般性を探ることであると概略的に規定できよう。したがって、対照言語学研究の仕事には、類似点・共通点の分析・記述と相違点の分析・記述の2通りがある。そのどちらに重点が置かれるかは対照研究の目的に依存するのであるけれども、研究目的をどのように据えるかは比較対照の対象の性質に依るところが大きいように思われる。例えば、日本語と英語のように、明らかに異なっているということが意識される体系の比較においては、その背後に存在する共通性・類似性の追求に関心が寄せられやすい。これに対して、日本語と韓国語の場合のように基本的に類似した構造を持つ言語を比較対照する場合には、共通点は当然のこととして完全に背景に退いてしまい、専ら相違点だけに関心が向けられることになりやすい。これまでの日韓対照言語学研究の成果を見ても、両語間の共通性・類似性よりは相違点の分析・記述に対して圧倒的に多くの関心が寄せられている。オノマトベに関してもこのような傾向が支配的であり、日韓両言語の類似性が感じられていても、それを本格的に追求するほどの関心が起こらなかったのではないかと考えられるのである。

しかしながら、本格的な対照研究の成果を知らなくても、筆者のように日韓両語のオノマトベの類似性に強い印象を受けた者は少なくないと思われる。日

韓のオノマトベ研究者は両者の類似性に関してある程度知っているであろう。そのような印象や知識がなぜ本格的な対照研究へ、そしてさらには上に述べたような問いかけへと発展しなかったのか。それにはオノマトベに関する固定観念が作用していたのではないかと考えられる。つまり、オノマトベは日韓両言語の言語的特徴の1つに数え上げられるほど重要な語彙カテゴリーではあるけれども、一般表現とは切り離して論ずべき特殊な語彙であると暗黙のうちに規定されてしまっていたのではないか。特殊な語彙であるからその特殊性を分析、記述するだけで十分であるとみなされ、記述以上のレベルまで関心が向かなかったのではないかと考えられる。

しかしながら、このような固定観念を打ち破るところに、上に述べた疑問に対する解答を得る糸口があると思われる。よく知られているように、日本語と韓国語は文法構造や語彙構造が非常によく似た言語である。筆者は、この構造上の類似性にオノマトベの類似性を説明する鍵があり、ひいては両言語のオノマトベの存在理由に迫る糸口があると考え。つまり、オノマトベを単に特殊な語彙カテゴリーと見なしてしまうのではなく、両言語の一般表現形式の持つ特徴との関連で再考察し、オノマトベとはその特徴をある意味で昇華させた語彙類であるという観点から、日韓両言語のオノマトベの新しい性格付けができるのではないかと考える。本研究はその試みの一環である。

1.2 研究の範囲・方法

本研究は、ある意味においてオノマトベの歴史に係るものである。日韓両語のオノマトベがどのような理由によって現在の形に発達することになったかを推論しようとするからである。また、本研究は言語類型論的な視点とも無関係ではない。日韓両語のある種の典型的・構造的特徴とオノマトベの特徴とを対比させ、それらが互いに密接な関係にあることを論じようとするからである。

したがって、本研究の考察は歴史のおよび類型論的な検証を受けなければならないものである。しかしながら、本研究の考察は時間的にも空間的にも極めて限られた言語現象を対象としている。現代日本語と現代韓国語のオノマトベが主たる考察対象であり、その歴史的発達過程については考察の対象とはしない。また、対象とする言語は日本語と韓国語であり、その他には英語に言及することになるけれども、オノマトベおよびそれに関連する言語特徴を持つその他の言語については一切考察の対象外とする。したがって、本研究の考察は極めて限定されたものであるに過ぎない。このように対象を限定する主たる理由は時間的制約のためであるが、本研究は自己完結的なものではなく、日韓両語のオノマトベ研究の一環に過ぎないと位置づけているためでもある。対象・範囲を限定することによってまず問題点と論点を明確にするのが主眼である。

日韓両語のオノマトベの比較対照に当たっては、それぞれの言語のオノマトベに関して従来発表されてきた研究成果を付き合わせることになるが、先行研究は大抵が日本語あるいは韓国語のオノマトベに関して個別に行なわれたものであり、両体系の比較を目的としてなされたものがほとんどないため、単純な比較ができない場合がある。その場合には、適宜、筆者自身が行なった調査結果を比較の資料とする。

日韓両語のオノマトベの諸特徴および関連事象の考察は、できる限り豊富な用例を引用することにより実証的に行なうことにする。従来の研究では、紙数的な制約からであろうが具体例による例示が乏しいため、論点が明確でなかったり、特殊な事象と一般的な事象とが適切に区別されていないというようなことがよくある。本研究では、具体例を示すことによりこのような不備を補うことにする。

日韓両語のオノマトベおよび関連事象の用例は、次のような作品・著作から

採った。¹

日本語関係：

- 李御寧 『縮み』志向の日本人』1984年、講談社文庫〔『縮み志向』〕
- 五木寛之 『生きるヒント』1993年、文化出版局〔『生きる』〕
- 井上ひさし 『吉里吉里人』1985年、文芸春秋社〔『吉里吉里』〕
- 北杜夫 『ドクトルマンボウ航海記』1965年、中公文庫〔『航海記』〕
- 『ドクトルマンボウ青春記』1973年、中公文庫〔『青春記』〕
- 野上弥生子 『森』1996年、新潮文庫〔『森』〕
- 宮沢賢治 「風の又三郎」(角川文庫クラシックス『風の又三郎』)1996年、角川書店〔『風の又三郎』〕
- 「祭の晩」(角川文庫クラシックス『風の又三郎』)1996年、角川書店〔『祭の晩』〕
- 「なめとこ山の熊」(角川文庫クラシックス『風の又三郎』)1996年、角川書店〔『なめとこ山』〕
- 「土神ときつね」(角川文庫クラシックス『風の又三郎』)1996年、角川書店〔『土神』〕
- 「気のいい火山弾」(角川文庫クラシックス『風の又三郎』)1996年、角川書店〔『火山弾』〕
- 「化物丁場」(角川文庫クラシックス『風の又三郎』)1996年、角川書店〔『化物丁場』〕
- 「ガドルフの百合」(角川文庫クラシックス『風の又三郎』)1996年、角川書店〔『ガドルフ』〕
- 「銀河鉄道の夜」(角川文庫クラシックス『銀河鉄道の夜』)1996年、角川書店〔『銀河鉄道』〕
- 「よだかの星」(角川文庫クラシックス『銀河鉄道の夜』)1996年、角川書店〔『よだかの星』〕
- 「どんぐりと山猫」(角川文庫クラシックス『注文の多い料理店』)1996年、角川書店〔『どんぐりと山猫』〕

¹〔 〕内は引用する際の表記

——「雪渡り」(角川文庫クラシックス『セロ弾きのゴーシュ』) 1996年、角川書店〔『雪渡り』〕

——「虔十公園林」(日本の名作文庫『風の又三郎』) 1994年、ポプラ社〔『虔十公園林』〕

韓国語関係：

김유영(キム・ユヨン)訳『은하철도의 밤(銀河鉄道の夜)』1997年、푸른나무：ソウル

김정현(キム・ジョンヒョン)『아버지(父)』1996年、문이당：ソウル〔『父』〕

李御寧(イ・オリョン)『말(ことば)』1991年、文学世界社：ソウル〔『ことば』〕

지선옥(チ・ソノク)編『한국 전래 동화(韓国伝来童話)上・下』1996年、바른사：ソウル〔『童話』〕

권형술(クオン・ヒョンスル)『편지(手紙)』1997年、바다출판사：ソウル〔『手紙』〕

法頂師談・류시화(リュ・シファ)編『산에는 꽃이 피네(山には花が咲く)』1998年、동쪽나라：ソウル〔『山には花が』〕

김은숙(キム・ウンスク)他『대한민국 문학상 수상동화집 1(大韓民国文学賞受賞童話集1)』1992年、문공사：ソウル

また、英語との比較に関して用いられる英語の文例は、次のような辞典や学習参考書の用例を用いた。

佐藤喬(1997)『基礎からベスト英文読解』学研

竹林滋他編(1996)『ライトハウス英和辞典』研究社

1.3 オノマトペ研究の歴史と現状

大坪(1989:162-169)によれば、日本のオノマトペに関する関心は、1220年頃に僧慈円が著わした史書『愚管抄』の「付録」の記述にまで遡れるという。ここでは、オノマトペが物事を的確に描写でき「日本語の本体」であるということが述べられている。その後近代に至るまで継続的にオノマトペは特別な関心を惹く語彙であり、様々な文献に言及されてきているという。特に、ポルトガル

人宣教師ロドリゲスの『日本大文典』には90語の副詞的オノマトベが引用されており、音響や状態を表わす特殊な副詞であること、反復形が多いこと、「ト・ド」などの助詞を取るものが多いこと、「メク」を付けて動詞にできるものがあること、固有の感じを持たないことなど、オノマトベの特徴を鋭く指摘しているという。また、日本イエズス会が1603～4年に編纂した『日葡辞書』には副詞的オノマトベが309語収録されているとのことである。

しかし、オノマトベに関する言語学的研究が始まるのは昭和期に入ってからのものであり、オノマトベを日本語研究の重要なテーマとして確立するきっかけとなったのは、西洋言語学の理論に基づき音声・音韻構造の観点からオノマトベを考察した小林(1933)の研究であった。音声・音韻構造の観点からのアプローチに始まったオノマトベ研究は、その後様々な観点から考察がなされ、その特徴に対する理解が深められてきた。音韻構造・形態の面においては、石垣(1965)、稲葉(1972)、宮地(1978)などによって記述が詳細にされてきた。オノマトベの機能に関しては西尾(1980)などの研究があり、定義特徴である音声象徴に関しては西原(1965)、北条(1977)、佐々木(1983)などの研究がある。音声象徴に関しては心理学的観点からのアプローチもあり、波多野(1954)、佐久間(1930)、矢田部(1948)などがその主なものである。文体論的な観点からの研究もある。オノマトベに関する最初の単行本は小島(1972)が文学作品中に用いられたオノマトベをその文体的効果の点から論じたものである。特定の言語レベルにおけるオノマトベ研究としては、幼児語については安居(1986)、漫画については日向(1986)などがある。大坪(1989)はオノマトベに関する総合的な研究であり、言語学的考察から文体論的考察、通時的考察に至るまで様々な角度から考察をしている。歴史的研究も盛んに行なわれ、古典におけるオノマトベの使用状況が詳細に記述された。

最近の動向として注目されるのは、英語との比較により日本語のオノマトベ

を記述しようとする対照言語学的なアプローチが盛んに行なわれていることである。オノマトベに関する日英比較は、以前から日本語研究者あるいは英語研究者の関心を惹くテーマであり、渡辺(1980)、ジョーデン(1982)などの先行研究があるが、近年においてはオノマトベを専門的に研究対象とする研究グループ(関西外国語大学擬声語研究会)が生まれ、オノマトベをめぐる研究発表会などが開かれたり、さらにこのグループのメンバーによる『日英対照：擬声語(オノマトベ)辞典』が発行されるなど、研究成果が発表されている。

オノマトベに関する学術的研究と並行して、次のようなオノマトベのみを対象とする辞典も編纂、刊行されている。

- 浅野鶴子編 (1978) 『擬音語・擬態語辞典』 角川書店
 尾野秀一編著 (1984) 『日英擬音・擬態語活用辞典』 北星堂書店
 白石大二編 (1982) 『擬声語・擬態語慣用句辞典』 東京堂出版
 天沼寧編 (1974) 『擬音語・擬態語辞典』 東京堂出版
 三戸雄一・寛寿雄也編著 (1981) 『日英対照：擬声語(オノマトベ)辞典』 学書房出版
 松田徳一郎監修 (1985) 『英語擬音語辞典』 研究社
 アンドルー・チャン編 (1990) 『<和英>擬態語・擬音語分類用法辞典』 大修館書店
 阿刀田稔子・星野和子編 (1993) 『擬音語・擬態語使い方辞典』 創拓社

このように何点もオノマトベ辞典が刊行されるということは、日本語においてオノマトベがいかに注目されているかを如実に物語るものである。

一方、韓国においては、オノマトベが活発な議論の対象となったのは比較的最近のことであり、日本語の場合に比べて研究の歴史は浅い。韓国におけるオノマトベ研究の歴史については朴東根(パク・トンゲン)(1997:31-36) が詳細に述べているので、以下それに基づいて簡単に紹介することにする。

近代国語学の登場以後オノマトペに対する最初の言及は、안백산(アン・ペクサン)(1920)編『조선문학사(朝鮮文学史):역대문법대계(歴代文法大系)』の付篇である「조선어원론(朝鮮語源論)」の記述である。「寫聲語는 喜怒哀樂의 情이던지 짐승들의 聲이던지 其聲을 송내하야 言를 作한 者라(写声語は喜怒哀樂の情であれ獸の声であれその声をまねて言葉とするものなり：p.177、筆者訳)」とか「상징어는 무聲의 事物은 其形狀態度를 형불하게 상징하야 人聲으로 作한 者라(象徴語は無聲の事物はその形状態度を象徴し、声にしたものなり：178頁、筆者訳)」のような記述がある。「写声語」とは擬声語・擬音語の意味であり、「象徴語」は擬態語に相当するものと考えられるが、「울다」/ulda/(泣く、鳴く)、「불다」/pulda/(吹く)、「둥글다」/tonggŭlda/(丸い)のような語もオノマトペと見ている点の特異である。

韓国語オノマトペに関する本格的な言語学的研究は정인승(チョン・インスン)(1938)に始まる。この論文では「母音相対法則」と「子音加勢法則」、つまり、母音や子音の交替によって語感の違いが生じる現象に見られる規則性が記述された。母音や子音の交替による語感の変化というのは韓国語オノマトペの重要な特徴の1つであるため、その後多くの研究がこの問題に関して考察しているが、정인승(1938)の記述は現在に至るまで基本的に修正されないまま受け入れられている。その後80年代に至るまではオノマトペに対する関心が低く研究成果も少ないけれども、この時期においては二人の外国人による研究が注目される。Fabre(1967)は、種々の根拠からオノマトペを一般副詞と明確に区別し、その特異性を記述した。また、日本人研究者の青山は一連の論文により韓国語オノマトペを多角的に記述し、特に、青山(1974)では一般語から派生したと思われる擬態語があることを指摘し、オノマトペの発達過程の研究に新しい局面を開いた。この時期の研究にはその他に강헌규(カン・ホンギョ)(1967), 김종택(キム・チョンテク)(1968), 이원직(イ・ウォンジク)(1969)などがある。

1980年代で最も注目すべきことは、オノマトベに関する韓国最初の博士学位論文が Fundling(1985)によって発表されたことである。これは韓国語オノマトベの音韻構造を綿密に調査したものであり、その調査結果に基づき、これまで無批判的に受け入れられてきたオノマトベにおける音声象徴に対して統計的見地から否定的な見解を示した。また、蔡琬(チェ・ワン)(1987)は、オノマトベにおける母音調和が音変化の結果、崩壊していく過程を考察した。

1990年代に入ると、オノマトベは最も学会の関心を惹くテーマの1つとなり、蔡琬(チェ・ワン)、김홍범(キム・ホンボム)、朴東根(パク・トンゲン)などオノマトベを専門的研究対象とする研究者を中心に続々と研究成果が発表された。それらの研究を通じてオノマトベの音韻論的、形態論的な記述が精密化されるとともに、우인혜(ウ・イネ)(1990)、野間(1990)、徐尚揆(ソ・サンギョ)(1993)、蔡琬(チェ・ワン)(1993)、김홍범(キム・ホンボム)(1995)、朴東根(パク・トンゲン)(1996)などの研究により統語論的側面からの考察も加えられることになった。また、形態論の面でも新言語学理論を導入した記述が試みられた。例えば、自律分節音韻論の枠組みでオノマトベの形態構造記述を試みた이진성(イ・チンソン)(1992)、이영석(イ・ヨンソク)(1994,1995)、李文圭(イ・ムンギョ)(1996)などがある。そして、1995年と1996年の2年間にオノマトベへの関心の高まりを象徴するように、김홍범(キム・ホンボム)(1995)、金仁和(キム・インファ)(1995)、이영석(イ・ヨンソク)(1995)、金重燮(キム・チュンソフ)(1995)、李文圭(イ・ムンギョ)(1996)と相次いで5編の博士学位論文が発表された。

以上のような学術的研究と並行して、韓国語のオノマトベについても次のような専門の事典が編纂されている。

朝鮮語研究会編 (1971) 『조선말 의성의태어사전(朝鮮語擬声擬態語辞典)』 학우서방(学友書房)

연변언어연구소편 (延辺言語研究所編)(1982) 『조선말 의성의태어분류사전(朝

鮮語擬声擬態語分類辞典)』연변인민출판사(延辺人民出版社)
 박용수(パク・ヨンス) (1989)編 『우리말 갈래사전(韓国語分類辞典)』한길사 (改訂・
 増補し1994年に『새우리말 갈래사전(新韓国語分類辞典)』として刊行)
 青山秀夫編 (1991) 『朝鮮語象徴語辞典』大学書林

1.4 オノマトベの名称・定義・分類・特徴

本研究で「オノマトベ」と称する語彙は、研究者により様々な名称で呼ばれている。オノマトベ(onomatopoeia)は、元来、梅棹・金田一・阪倉編『日本語大辞典』にあるように「物音や声の感じを言語音でまねたことば」である擬音語あるいは擬声語を意味する用語である。しかし、日本の学界ではそれに広義の用法を発達させて擬態語(mimesis)も含む用語として一般的に使われている。伝統的には「擬声(語)・擬態語」あるいは「擬音(語)・擬態語」のような複合的・羅列的な名称が使われてきた。現在もこの表現が最も多く使われているようである。しかし、単一のカテゴリーを表わすのに羅列的表現では締まりがないという理由で、「オノマトベ」を広義に用いられるようになったのではないかと考えられる。また、英語のオノマトベとの比較が盛んに行なわれていることもその背景的要因になっているかもしれない。日本では名称に関してあまりこだわりのないようで、大坪(1989)などは「擬声語」ですべてをカバーしている。まれではあるが「象徴語」も用いられる。

一方、韓国では名称へのこだわりがかなりあり、オノマトベの定義、画定の問題と絡めてどのような名称で呼ぶべきかが綿密に議論されることが多い。² 日本語の用語と並行する「의성(어)의 태어(擬声(語)擬態語)」のような複合的表現も用いられるが、狭義の「擬声語」と狭義の「擬態語」とを合わせても対象とする語彙全体を表わせないという理由から、(音声)象徴という定義特徴に基づく

² 例えば、金仁和(1995)、김홍범(1995)、李文圭(1996)などを参照。

「상징어(象徴語)」あるいは「음성상징어(音声象徴語)」のような名称で語彙全体をカバーするのが主流である。また、「시늉말(まねことば)」や「흥내말(まねことば)」のような固有語表現を用いる研究者もある。狭義に解釈されるべきだという理由で「オノマトペ」はまったく用いられないけれども、野間(1990、1991)は日本の慣行に従い「オノマトペ」を用いている。その他、「감각어(感覚語)」という表現もあるが、感覚を表わす一般語との区別がはっきりしないという理由から一般的ではない。

以上のように様々な用語が用いられているが、本論文では日本の慣行に従い「オノマトペ」を用いることにする。

次に、オノマトペあるいはその下位区分である擬声語(擬音語)や擬態語が従来どのように定義されてきたか、主な定義を挙げる(下線は筆者)。

- ・天沼編(1974:7)『擬音語・擬態語辞典』

擬音語とは、人間の笑い声、泣き声、つばを吐いたり、ものを飲んだり、平手でたたいたりする時などに発する音、人間以外の生物の発する声や音、また、自然界に自然に発する音響や、無生物が、いわば自然に、あるいは、外力の作用を受けて発する音響を、音声で表現した言葉である。擬態語とは、われわれ人間を含む生物、無生物、自然界の事物の有様・現象・変化・動き・成長などの状態・様子を描写的・象徴的に音声で表現したものである。

- ・浅野編(1978:5-9)『擬音語・擬態語辞典』

擬音語：外界の音を写した言葉

擬態語：音をたてないものを、音によって象徴的に表す言葉

- ・尾野編著(1984:5)『日英擬音・擬態語活用辞典』

Onomatopoeia are words which imitate the sounds made by animate or inanimate objects, such as a person's laughter, an animal's cry, an object breaking or striking etc. (擬音語とは人間の笑い声、動物の叫び声、物の壊れたり、打ち当たったりした時などに出る音など生物や無生物の音響を写した言葉。擬声語：日本語で、くすくす笑い、鳩のくーくーという鳴き声などの人や動物の声を写した言葉である。：筆者訳)

Mimesis are words which express in descriptive and symbolic terms the states or conditions of both animate and inanimate objects, and of change, phenomena, movement, growth etc. in nature. (擬態語とは生物、無生物、自然の変化・現象・動き・成長などの状態・有様を描写的・象徴的に表現した言葉である。：筆者訳)

- ・ジョーデン(1984:114)

オノマトピアは、各種の文章体の技法、例えば直喩、隠喩、頭韻に含まれ、「物のよ

うすや運動を、それに関係した音を声に出してまねることで表現すること」

- ・大坪(1989:13)
「擬声語」とは、音声のもつ特殊な情感を利用して、端的に事物の状態を描写する言葉である。
- ・チャン(1990)
Gitai/giongo are essentially sound symbolism used to describe human emotions and psychological states, called *gijoo-go* psychomimes; phenomena and states of nature, human actions, called *gitai/giyoo-go* phenomimes; and onomatopoeia for imitating the voices of animate objects including human voices, called *gisei-go*, and the sounds of nature, called *gion-go*. (擬態・擬音語とは本質的に音表象により次のような事柄を表す語である：人間の感情や心理状態(擬情語)、自然現象や状態、人間の行為(擬態・擬容語)、人間の声を含む動物の声(擬声語)、自然の物音(擬音語)：筆者訳)
- ・野間(1990:24)
外界の音や動物の鳴き声などを言語音によって写した一連の単語を擬声語とし、音のしないものごとのようすをあたかも音のすることくに言語音によって描写する単語を擬態語とする。
- ・日本語教育学会編(1992:302)『日本語教育事典』
擬音語：生物の声や無生物の出す音を表す語
擬態語：動作・状態などを音で象徴的に表現する語
- ・李熙昇(イ・ヒスン)編(1983)『국어 대사전(国語大辞典)』
의성어：사물의 음성을 흉내낸 말.
(擬声語：事物の音声をまねたことば：筆者訳)
의태어：사물의 생긴 모양이나 태도를 흉내내어 만든 말.
(擬態語：事物の姿や態度をまねて造ったことば：筆者訳)
- ・青山(1977:28-29)
擬声語は語音でもって自然音を描写したものであって、これは描写される内容も描写する手段も共に音響の世界である。
擬態音は或る種の態度を自然音に相当する語音でもって類推的に描写したものである。
- ・金仁和(キム・インファ)(1995:5)
음성상징어는 의미에 해당하는 감각을 음(혹은 음운)으로 묘사, 상징하는 어휘로서 음운교체, 첩용, 접사에 의한 과생등의 형태적 특성을 가진다. (音声象徴語は意味に該当する感覚を音(あるいは音韻)で描写、象徴する語彙として音韻交替、疊語、接辞による派生などの形態的特性を持つ：筆者訳)
- ・김홍범(キム・ホンボム)(1995:2)
음성기호와 개념 사이에 얼마간의 필연적 관계를 가지는 상징어는, 무별성인 자연이나 동물의 소리와 유별성인 사람의 음성 자체가 가지는 청각적인 영상(개념)을 그대로 분절음소로 떠베끼는 소리흉내말과 어떤 상대나 움직임 등의 모양인 시각영상을 청각영상으로 바꾸어 분절음소로 떠베끼는 모양흉내말이 있다. 이 둘을 배김의 대상에서 보면 소리흉내말이나 모양흉내말이 되나 결과적인 언어기호 쪽에서 보면

음소상징어(음성상징어)이다. (音声記号と概念の間に何らかの必然的關係を持つ象徴語は、無別性である自然や動物の音と有別性である人間の音声自体がもつ聴覚的な映像(概念)をそのまま分節音素で写す音声まねことばとある状態や動きなどの様態である視覚形状を聴覚映像にかえて分節音素で写す様態まねことばがある。この二つを写しの対象からみると音声まねことばや様態まねことばになるが、結果的な言語記号の側でみると音素象徴語(音声象徴語)である：筆者訳)

・李文圭(イ・ムンギュ)(1996:17)

상징어는 음성상징과 형태상징 둘 다를 가지는 어휘.

(象徴語とは音声象徴と形態象徴をあわせて持つ語彙である：筆者訳)

・朴東根(パク・トンゲン)(1997:4)

흥내말은 자연계의 소리를 그와 유사한 음성으로 모방하여 관습화된 ‘소리흥내말’과 소리 이외의 모방이나 상태를 특정한 음운으로 모방했거나, 모방했다고 인식되는 ‘모양흥내말’을 두루 일컫는 국어의 특수한 낱말군이다. (まねことばは自然界の音をそれと類似した音声で模倣して慣習化された「音まねことば」と、音以外の模倣や状態を特定の音韻で模倣したり、模倣したと認識される「様態まねことば」を合わせて指す国語の特殊な語彙群である：筆者訳)

これらの定義には、下線を施して示したように、「まねる」、「写す」、「模倣する」、「描写する」、「描写・象徴する」、「音のもつ特殊な情感を利用して描写する」、「描写的・象徴的に表現する」、「音表象により表わす」、「象徴的に表現する」、「類推的に描写する」など様々な表現によって、オノマトペの指示主体である音声形式と被指示物である意味内容との関係が表わされているが、これらはすべてオノマトペの定義的・本質的特徴である「音声象徴(あるいは音表象)」を意図した表現である。音声象徴はハングル学会(1995:535)によれば「음성형식과 의미의 결합이 긴밀한 관계에 있어서, 그 둘의 관계가 필연적인 것으로 느껴지는 경우의 언어현상(音声形式と意味の結合が緊密な関係にあって、この2つの関係が必然的なものと感じられる場合の言語現象)」と定義される概念であるが、これはオノマトペと他の一般語彙とを区別するもっとも基本的で本質的な特徴である。

一般に、言語の音声形式と意味内容の関係は必然的(有縁的)なものではなく恣意的(無縁的)である。ある事物や概念をどのような音声形式で表わすかは、言語ごとに一種の約束事として慣習的に決められたものである。したがって、

同じ動物が例えば日本語では「イヌ」、韓国語では「개」/kɛ:/、英語では‘dog’というように、言語によってまったく別な音声形式で呼ばれているのである。音自体には何の意味もなく、それが社会的な約束事、慣習として特定の意味内容と結びついているのである。オノマトペはこのような言語記号の恣意性(無縁性)に対する例外であり、音と意味の間に何らかの必然的な関係がある、あるいはあると感じられている語彙である。つまり、一般語彙とは違って、音自体が何らかの意味を持つ語彙である。このように音声形式が必然的(有縁的)に意味内容と結びつく現象が音声象徴(sound symbolism)である。

オノマトペが音声象徴の特徴を持つ語彙であるといっても、擬声・擬音語と擬態語とでは、音と意味との結びつきの必然性(有縁性)の程度には大きな違いがある。擬声・擬音語は人や動物の出す声や、自然現象や事物の音を「写した」もの、「まねた」ものであるから、音と意味との結びつきは直接的である。このような関係を李文圭(イ・ムンギュ)(1996:7)は「本質的必然性」と呼んだ。ただし、直接的な写し、模倣であるといっても、声や音の聴覚印象を声帯模写的にそっくりそのまま写すのではなく、言語音によって写すものであるから、各言語の音韻体系という「ふるい」にかけられたものである。したがって、例えば雄鶏の鳴き声が日本語では「コケコッコー」、韓国語では「꼬끼오」/kkokkio/、英語では‘cock-a-doodle-doo’のように、互いに似てはいるけれども異なった形式で言語化されているのである。

一方、擬態語の場合の音と意味との関係は擬声・擬音語に比べるとはるかに必然性が乏しい。擬態語は、人の動作や物の様態など本来音を持たない事象を言語音で表現するからである。上に挙げたオノマトペの定義のうち、野間(1990)の定義のように、「音のしないものごとのようすをあたかも音のするごとくに言語音によって描写する単語」なのである。したがって、特定の概念をどのような音声形式で表わすかについてはかなりの恣意性があり、その点では一般語

彙の場合と大差はない。しかしながら、擬態語が一般語彙と異なる点は、外部からつまり外国人の立場で見ると完全に恣意的な記号であるように見えるけれども、内部からつまり母語話者の立場で見るといかにもその意味に相応しいと感じられる音感を持っているということである。その音感は母音や子音の交替あるいは形態的变化などにより、顕著な規則性をもって変化するという側面も備えている。李文圭(1996:7)はこの種の音と意味との結びつきを「慣習的必然性」と呼んだ。日本語や韓国語の個別言語の中で慣習的に定められたものであるためである。

オノマトペは本質的必然性あるいは慣習的必然性に基づく音声象徴という特質を持つ語彙であるということになるが、このような規定だけではオノマトペと一般語彙との境界を画定することはできない。何故なら、一般語彙の中にも音声象徴の特徴を持つと思われる語があるからである。韓国語については、徐尚揆(ソ・サンギョ)(1991)、金仁和(キム・インファ)(1995)、李文圭(イ・ムンギョ)(1996)、김홍범(キム・ホンボム)(1995)、朴東根(パク・トンゲン)(1997)などにより、与えられた表現をどのような基準によってオノマトペであると判断するかについて綿密な議論が行なわれている。そのうち最もよく整理されていると思われる李文圭(1996:11)の判断基準を取り上げてみよう。彼は次の6つの特徴を判断基準としている。

- ① 특정한 음운자질이 동일한 기본 의미를 가진 어휘 간의 어감 차이를 초래한다. (特定の音韻素性が同一の基本的意味をもつ語彙間の語感の差をもたらす: 筆者訳(以下同じ))
- ② 형태확장이 일어날 수 있다. (形態拡張が起こりうる。)
- ③ 첩용형으로 쓰인다. (疊語として使われる。)
- ④ -거리다, -대다, -이다, -하다, -업(/압)다 등의 접사와 결합하여 용언으로 파생된다. (-거리다, -대다, -이다, -하다, -업(/압)다などの接辞と結語して用言を派生する。)

- ⑤ 부사어로 쓰인다. (副詞として使われる。)
 ⑥ 다른 문장 성분과의 공기 제약이 심하다. (他の文章成分との共起制約が厳しい。)

①は音韻的基準であるが、上に述べた音声象徴の特徴のことである。②、③、④は形態的基準であり、⑤と⑥は統語的基準である。日本語のオノマトベについてはこれに類するような議論はなされていないようであるけれども、若干の修正を加えればそのまま日本語にも適用できるであろう。形態的特徴のうち最も重要なのは③である。日韓両語のオノマトベの形態的特徴として最も目立つのは畳語形(反復形)であり、拡張形はそれに比較すればはるかにマイナーな特徴である。統語的特徴では⑤が最も重要である。④に示されているように用言形は派生的に造られる。⑥の特徴も副詞的用法に付随するものである。

このような基準によりオノマトベと一般語彙との境界を画定しようというのであるけれども、これらの基準をすべて満たす表現だけをオノマトベとしたのではあまりにも狭く限定され、明らかにオノマトベと考えられるものの多くが排除されてしまう。例えば、拡張形を持たないオノマトベは多いし、反復形を持たないものも少なくない。上の基準のうちどれだけのものを満たせばオノマトベと判断されるかについては明確な基準がない。オノマトベか一般語彙かという二者択一的な画定のしかたではなく、むしろ、両者の境界は曖昧な部分があると見なし、どの程度オノマトベであるかという視点から与えられた語を特徴づける方が实际的であろう。例えば、田守・ローレンス(1999:200)は与えられた語が次のような特徴をどれだけ持っているかを調べることにより、その語のオノマトベ度(mimeticity: ある語が話者によって直接的な模倣として認識される程度)あるいは語彙性(lexicality: どれほど完全に語として機能しているかという程度)の度合いを判断することを提案している。

- ① 音を表す。
- ② 「と」を義務的に伴う。
- ③ 引用的に用いることができる。
- ④ 文外で独立して用いることができる。
- ⑤ 「XというY」構造に用いることができる。
- ⑥ 具体的な描写力がある。
- ⑦ 漫画にラベルとして起こる。
- ⑧ 「と」の代わりに「て」を伴うことができる。

オノマトペの完全な定義はなされておらず、したがってオノマトペと一般語彙とを明確に画定することはできない。しかしながら、本論文の目的にとってはオノマトペの定義がはっきりしていないことは大して問題ではない。本論文では日韓両語のオノマトペの最も顕著な特徴であると考えられる反復形の多用と副詞的用法を考察の対象とするからである。また、オノマトペと一般語彙との境界が明確でないことは、本論文の目的に沿うものである。なぜなら、本論文は、オノマトペの特徴を一般語彙の特徴と関連付けて考察しようとするものであるからである。

最後に、日韓両語のオノマトペの分類に関して簡単に述べておく。日本では、金田一(1978)の次のような分類が一般的である。

擬音語：外界の音を写した言葉

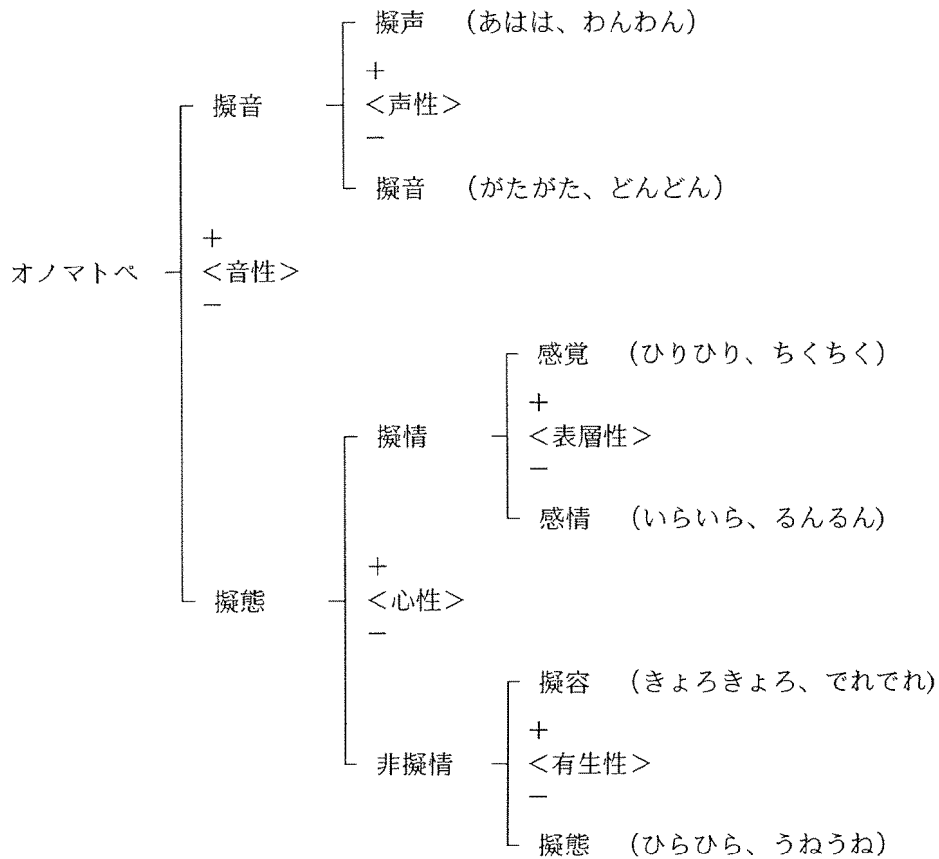
擬声語：人の声や動物の鳴き声を写した言葉

擬態語：音をたてないものを、音によって象徴的に表す言葉

擬容語：生物の状態を表すもの

擬情語：人間の心の状態を表すようなもの

寛・田守(1993:iv)はさらに分類を細分化しかつ体系的に記述している。〈音性〉、〈声性〉、〈心性〉、〈表層性〉、〈有生性〉という素性に基づいて次のようにオノマトペを階層的に分類する。



一方、韓国語のオノマトペに関しては、下位範疇としての의성어(擬声語)と의태어(擬態語)とする許雄(ホ・ウン)(1985)らの二分法が伝統的な分類であるが、이원직(イ・ウォンジク)(1969)のように의성어(擬声語)、의용어(擬容語)、의정어(擬情語)に分類する三分法の立場もある。より詳しい分類としては、한상옥(ハン・サンオク)(1967)が二分法をさらに細分化して次のように分類している。

의성상징어(擬声象徵語)

의향어(擬響語) [自然界の音響]

의음어(擬音語) [動物の音声]

의성어(擬声語) [人間の音声]

의태상징어(擬態象徴語)

의동어(擬動語) [自然界や動物の動作]

의태어(擬態語) [自然界、動物、人間の状態]

また、この他に、以上の分類のようにオノマトペを象徴の対象によって分類するのではなく聴覚、視覚、触覚、味覚、嗅覚、心覚のように感覚別に分類する立場もあるが一般的ではない。³

日本と韓国とではオノマトペの分類の仕方に違いが見られるようであるけれども、これは日韓両語のオノマトペの性質が異なるためではなく、単に分類の観点が異なるだけのことであるに過ぎない。どのような分類を採用しても日韓両語のオノマトペには同程度に有効に適用できると考えられる。さらに、オノマトペの下位分類もまた、本論文の論点には直接的に関係するものではない。

1.5 論文の構成

本論文は全5章から構成される。序章に続き、第2章では日本語と韓国語のオノマトペを、語彙量、使用頻度、音声構造、形態、統語機能、意味などの面から総合的に比較対照し、両者の類似性を明らかにする。

第3章においては、日韓両語のオノマトペの形態面において最も顕著な特徴である反復形に関して、両語のオノマトペを綿密に比較する。さらに、日韓両語において、反復形はオノマトペだけではなく一般表現の中にも多用されている事実に着目し、オノマトペにおける反復形の多用との関係を考察する。

第4章は、日韓両語のもう1つの重要な特徴である副詞的用法に焦点を合わせて、その背景的要因を考察する。日本語や韓国語が用言型の表現、つまり用言を中心として用言修飾により意味内容を精密化・複雑化する表現を好む言語

³ 例えば、유창돈(ユ・チャンドン) (1975)、강현규(カン・ホンギョ) (1968)などを参照

であるのに対して、英語などは体言型の表現、つまり体言を中心として体言修飾により意味内容を精密化・複雑化する表現を好む言語であるという、言語における表現型の志向性が異なるという観点から、日韓両語のオノマトペにおける副詞的用法の優位性を論証する。

第5章においては、本論文の考察をまとめ、その妥当性を高めるために今後検討すべき課題を指摘する。

なお、本論文で取り上げる韓国語の例については、本文中で触れる場合に限ってハングル表記にローマ字表記を付けることにした。ローマ字表記は1984年1月に大韓民国文教部(現教育部)が制定した『국어의 로마 자 표기법(国語のローマ字表記法)』に一部修正を加えて行なう。母音及び子音のハングル/ローマ字対応関係と音価の説明は次の通りである。

《母音》

	ハングル	ローマ字	
	ㅏ	a	日本語の「ア」と同じ。
	ㅑ	ô	唇を丸めない「オ」。
	ㅓ	o	唇を強く丸める「オ」。
	ㅕ	u	唇を強く丸める「ウ」。
	ㅡ	û	唇を横に引いた「ウ」。
	ㅣ	i	日本語の「イ」と同じ。
	ㅝ	æ	やや広い口の「エ」。
	ㅜ	e	やや狭い口の「エ」。
	ㅠ	œ	唇を強く丸めた「エ」。
	ㅟ	ya	日本語の「ヤ」と同じ。
	ㅙ	yô	唇を丸めない「ヨ」。
	ㅛ	yo	唇を強く丸める「ヨ」。
	ㅠ	yu	唇を強く丸める「ユ」。
	ㅞ	yæ	やや広い口の「イエ」。
	ㅟ	ye	やや狭い口の「イエ」。
	ㅠ	ûi	唇を横に引いた「ウイ」。

《子音》

	ハングル	ローマ字	
	ㄱ	k/g	やさしく発音するカ行頭音。平音。有声音間で有声化。
	ㄲ	kk	喉の緊張を伴うカ行頭音。濃音。
	ㅋ	k'	強い息を伴うカ行頭音。激音。
	ㄷ	t/d	やさしく発音するタ行頭音。平音。有声音間で有声化。
	ㄸ	tt	喉の緊張を伴うタ行頭音。濃音。
	ㄹ	t'	強い息を伴うタ行頭音。激音。
	ㅂ	p/b	やさしく発音するパ行頭音。平音。有声音間で有声化。
	ㅃ	pp	喉の緊張を伴うパ行頭音。濃音。
	ㅍ	p'	強い息を伴うパ行頭音。激音。
	ㅈ	ch/j	やさしく発音するチャ行頭音。平音。有声音間で有声化。
	ㅉ	tch	喉の緊張を伴うチャ行頭音。濃音。
	ㅊ	ch'	強い息を伴うチャ行頭音。激音。
	ㅅ	s/sh	サ行頭音。平音。[i/y]の前で口蓋化。
	ㅆ	ss	喉の緊張を伴うサ行頭音。濃音。
	ㅎ	h	弱いハ行頭音。
	ㅁ	m	マ行頭音。
	ㄴ	n	ナ行頭音。
	ㅇ	ng	鼻濁音。
	ㄹ	r/l	ラ行頭音。母音の前で [r]

第2章 日本語と韓国語のオノマトペ

日本語と韓国語はともに豊かなオノマトペの体系を発達させていると言われる。これまでにそれぞれの体系に関して、個別的には詳細な研究がなされてきているけれども、意外なことに両者を本格的に比較対照させた研究はほとんどないのが実状である。本研究の主眼である第3章および第4章の考察への準備として、本章では、日韓両語のオノマトペの体系が単に豊富であるというばかりでなく、語彙量、使用頻度、音声構造、形態、統語機能、象徴機能、意味などそのあらゆる面において相互に高度の類似性を持っていることを論じる。比較は基本的には日韓両語のオノマトペに関する先行研究の成果を突き合わせるにより行なうが、比較すべき適当な調査資料がない場合には筆者自身が行なった調査の結果を用いる。また、できるだけ多くの実際の用例に基づいて実証的に考察することにする。

2.1 語彙量

オノマトペの豊富さを最も端的に表す指標は、オノマトペ語彙の大きさ、つまりオノマトペという語彙範疇に属する語数の多さであろう。日本語も韓国語も非常に大きな規模のオノマトペ語彙を持っている。しかし、両語がそれぞれどれだけのオノマトペを持っているかを数え上げることは難しい。いずれの言語においても、オノマトペは固定化された語彙ではなく、臨時語¹として次々と新たに作り出されているし流行り廃りの大きい流動的な開かれた語彙であるためである。しかしながら、辞典類の見出し語となっているオノマトペの個数を調べることにより、日韓両語のオノマトペが豊富であることを示す一応の目

¹ 臨時語(Nonce-word)とは、一般に認められている語形・意味・機能とは異なって、その場限りで臨時的に用いられる語のことである。

安は得られるであろう。

日本語の場合について、玉村(1989:4)は、「日本語の辞書で6万語前後の見出し語をもつものなら、最低500語ぐらいの音象徴語を載せているのが普通である」という。6万前後の見出し語を持つ辞書というと実用辞典クラスのものである。また、「特別にオノマトペだけを集めた辞書となると、1000語を越える程度である」としている。天沼編(1974)『擬音語・擬態語辞典』には1565語が見出し語となっており、『日本語教育事典』の中の「擬音語・擬態語一覧」には約1600語が収録されている。阿刀田・星野著(1993)『擬音語・擬態語使い方辞典』では738語²、浅野編(1978)『擬音語・擬態語辞典』では806語とやや少ないが、これらを平均すると玉村が指摘している程度になる。

一方、韓国語のオノマトペの個数は、日本語よりもさらに多い。許卿姫(ホ・キョンヒ)(1989:58)によると、実用辞典クラスでは、安田・孫編(1988)『エッセンス韓日辞典』に2348語のオノマトペが見出し語になっているという。また、朴基完(パク・キワン)(1984)はハングル学会編(1973)『새 한글 사전(新ハングル辞典)』から1950語を拾い出している。大辞典クラスでは、朴東根(パク・トンゴン)(1997:66)が『우리말 큰사전(韓国語大辞典)』に3627語のオノマトペが収録されている³と報告しており、また、野間(1990:26)は、박용수(パク・ヨンス)編(1989)『우리말 갈래사전(韓国語分類辞典)』⁴には3863語が集められているという。オノマトペだけを対象とした特殊辞典になると数はさらに多くなる。Fundling(1985)によれば、朝鮮語研究会編(1971)『조선말 의성의태어사전(朝鮮語擬声擬態語辞典)』には3780語が収められており、また、菅野(1986)は、延辺言語研究所編(1982)『조선말 의성의태어 분류사전(朝鮮語擬声擬態語分

² この数字は見出し語の個数であり、阿刀田・星野(1993)年に収録されているオノマトペの総数は1638個である。

³ うち、擬態語は2540語、擬声語は708語、擬声擬態語は379語であるという。

類辞典』には8286語⁵が数えられると述べている。さらに、青山編著(1990)『朝鮮語象徴語辞典』には約8800語が収録されている。

辞典により収録語数が異なるのは、一つには、何をオノマトペとするかという点に関して編者の考えが異なるためである。オノマトペと一般語彙との境界が明確ではなく、中間的な性格のものが数多く存在する。それらをオノマトペに含めるかどうかによって個数は変化する。大規模なオノマトペ辞典にはそうしたものが積極的に収録されるため個数がかかなり多くなる。また、単一の形式が複数の意味・用法を持つ場合、それを多義語として1語と数えるか、あるいは同音異義語として数えるかによっても個数が異なる。その極端な例が延辺言語研究所編(1982)『조선말 의성의태어 분류사전(朝鮮語擬声擬態語分類辞典)』で、この辞典は意味別に分類されているので、他の辞典やオノマトペ辞典が同一の語として扱っているものが、複数の箇所に重複して収録されている場合が多い。さらに、日韓両語のオノマトペには母音や子音の交替による変異形(交替形)が数多く存在する。そうした交替形をどの程度収録するかによってもオノマトペの個数は異なる。大きな辞典であればあるほど交替形を網羅的に収録するため個数が多くなる。

上に示したように辞典の見出し語の数で比較すると、日本語のオノマトペに比べて韓国語のオノマトペの方が個数が断然多い。それは主としてこの第3番目の理由によると思われる。詳しくは§2.3.2に述べるが、日本語も韓国語もオノマトペには交替形が多いけれども、韓国語の方がはるかに多様である。それは、日本語よりも韓国語の方が子音および母音の数が多く、また、音節構造が異なり、韓国語の方が音節のタイプもはるかに多様であるためである。その上、韓国語の辞書編纂者はそうした交替形を実際の使用頻度には関係なくある

⁴ 改訂・増補し1994年に『새우리말 갈래사전(新韓国語分類辞典)』として刊行された。

程度機械的に収録しようという傾向があるのに対して、日本語の辞書編纂者は交替形のうち使用頻度の高いもの(といっても編纂者の主観によるところが大きいようであるが)を代表形として収録しようという傾向があるようである。そのような理由で日韓のオノマトペの語彙量に大きな開きがあるように見えるのではないかと思われる。青山秀夫(1972, 1977)では交替形の組を1語群と数え、擬声語は394語群、擬態語が802語群あるとしている。筆者の知る限り日本語について同様の調査はないようであるが、日本語のオノマトペを語群の観点から整理してみれば、韓国語の場合と大差はないのではないかと予測される。

2.2 オノマトペの使用頻度

日本語や韓国語ではオノマトペが豊富であると言われる、その第2の指標はオノマトペの使用頻度である。実際、両言語の特徴としてオノマトペが多用されることに言及されることが多い。⁵ところが、オノマトペの使用頻度について、そのような印象を裏付けるような綿密な調査は、日本語においても韓国語においても、これまでなされていないのが実状である。

数少ない調査の1つとして、野間(1991:84ff)は日韓両語の文学作品におけるオノマトペの使用頻度について次のような調査結果を報告している。調査資料がいくつかの文からなり(A欄)、そのうちのいくつかの文にオノマトペが用いられているか(B欄)で使用頻度の目安とした調査である。まず韓国語の資料については次の表(1)の通りである。

⁵ うち、擬声語は2129語、擬態語は6157語であるという。

⁶ 例えば、グロータース・柴田(1967:16)は次のように述べている。

ローマの街頭でしゃべっているイタリア人の身ぶりに気がつくほどの人は、東京の国電の中でしゃべっている人のことばに擬声語または擬態語が次から次へと飛び出すのにびっくりするだろう。つまり、(外国語の身振り)=(日本語の擬声語・擬態語)なのである。

(1)

作 品	A	B	頻 度
李光洙 『無情』 第1回 (1917)	77	8	10.4%
金東仁 『감자 (芋)』 (1925)	199	17	8.5%
朴英熙 『사냥개 (獵犬)』 (1925)	193	22	11.4%
玄鎮健 『故郷』 (1926)	145	23	15.9%
洪命燾 『林巨正傳』 (1928)	100	14	14.0%
李北鳴 『암모니아 탱크(アンモニアタンク)』 (1932)	89	19	21.3%
金東里 『절레꽃(野茨)』 (1934)	99	13	13.1%
金裕貞 『동백꽃(椿の花)』 (1936)	159	42	26.4%
李孝石 『모밀꽃 필 무렵(蕎麦の花咲く頃)』 (1936)	255	37	14.5%
李泰俊 『沙漠의花園(砂漠の花園)』 (1937)	47	5	10.6%
黃順元 『학(鶴)』 (1953)	142	13	9.2%
李浩哲 『나상(裸像)』 (1956)	295	101	34.2%
崔仁勲 『九月의 달리아(九月のダリア)』 (1960)	86	25	29.1%
崔仁浩 『他人의 房(他人の部屋)』 (1971)	359	55	15.3%
朴婉諸 『겨울 나들이(冬の外出)』 (1975)	304	48	15.8%
金承鈺 『위험한 나이(危険な歳)』 (1986)	76	12	15.8%
金周榮 『어머니를 위하여(母さんのために)』 (1986)	67	8	11.9%

このうち最も使用頻度の高い李浩哲の『나상(裸像)』では、‘……’のよ
うな沈黙文も1文として数えられているので、その個数18文を除外すれば、
オノマトペを含む文の割合は36.5%に及ぶという。同作品を単語数で見ると、
総2319語のうち192語のオノマトペが使われており、約12語に1語がオノマト
ペであるという。

一方、日本語の文学作品に関する調査結果は次頁の表(2)の通りである。

以上2組の調査結果は、日本語に比べて韓国語の方がオノマトペの使用頻度
が高いことを論ずるためのものであるらしい。確かに、この調査結果だけに基
づいて考察する限りでは、そのように言えるかもしれない。しかしながら、野
間自身も言っているように、オノマトペの使用頻度は作家個人の文体差もあり、
それに何よりも調査資料のボリュームが限られているため、断定的な結論を引
き出すのは早計であろう。しかも、このデータからは、日本語あるいは韓国語
のオノマトペが果たして多用されているのかどうかについては何の推論もでき
ない。それはオノマトペ語彙と非オノマトペ語彙との使用頻度比較がないから
である。

(2)	作 品	A	B	頻 度
	夏目漱石『一夜』(1905)	282	30	10.6%
	森鷗外『電車の窓』(1910)	152	20	13.2%
	志賀直哉『出来事』(1913)	155	23	14.8%
	内田百閒『冥途』(1921)	85	21	24.7%
	芥川龍之介『藪の中』(1922)	273	12	4.4%
	里見『椿』(1923)	92	19	20.7%
	横光利一『幸福の財布』(1923)	33	2	6.1%
	葉山嘉樹『セメント樽の中の手紙』(1925)	86	6	7.0%
	井伏鱒二『鯉』(1926)	88	1	1.1%
	梶井基次郎『蒼穹』(1928)	58	5	8.6%
	太宰治『満願』(1938)	41	8	19.6%
	石川淳『張栢端』(1941)	152	25	16.4%
	島尾敏雄『摩天楼』(1946)	159	21	13.2%
	安部公房『赤い藪』(1949)	95	5	5.3%
	埴谷雄高『虚空』(1950)	100	13	13.0%
	野間宏『二つの花』(1956)	60	3	5.0%
	井上光晴『地の群れ』(1963)	222	32	14.4%

日韓両語に関して、語彙の使用頻度調査がそれぞれ国立国語研究所と文部省(現教育部)によって行われているが、それによるとオノマトペの使用頻度はかなり低いという結果が出ている。日本語については、玉村(1989:9)が国立国語研究所(1984)の『日本語教育のための基本語彙調査』⁷で得点25以上のものをリストにした「第一次集計資料-2千語」からオノマトペを拾い出すと、次のようになるという。⁸

(3)	ちようど (40)	ゆっくり (37)	きつと (35)
	はつきり (34)	もつと (33)	ずつと (32)
	ちよつと (31)	びっくり (30)	はつきり (30)
	ようやく (29)	やつと (29)	すつかり (29)
	ちようど (29)	きちんと (28)	しつかり (28)
	ほんやり (28)	ちゃんと (27)	ちつとも (26)
	がっかり (25)	にここに (25)	

これを見ると、上位2000語のうちオノマトペはわずか20語に過ぎず、しかも

⁷ 国立国語研究所報告 78、秀英出版

⁸ 括弧内の数字は得点を表す。「ちようど」と「はつきり」がそれぞれ2度現れるが、得点40の「ちようど」は「まるで」の意味、29の「ちようど」は度合いを表す、34の「はつきり」は「確かだ」の意味、30の「はつきり」は視覚的な意味というように、意味によって区別されている。

かなり得点順位の低いところに位置している。さらに、「ちょうど」、「きっと」、「もっと」、「ちょっと」、「ようやく」などは、起源的にはともかく現代語の感覚としては、オノマトペとしてよりは一般語として意識される語である。したがって、日本語の語彙全体から見れば、オノマトペの使用頻度はそれほど高いとは言えない。

一方、韓国語については、野間(1991:87)が韓国文教部(現教育部)の行なった語彙使用頻度調査の結果から、次の7語を挙げている。

(4) 꼭 /kkok/	(必ず、きっと)	368位
얼른 /llûn/	(さっさと)	593位
반드시 /pandûshi/	(必ず)	595位
따뜻하다 /ttattût'ada/	(暖かい)	735位
깨끗하다 /kkækkût'ada/	(清潔だ)	1002位
튼튼하다 /t'ûnt'ûnhada/	(丈夫だ)	1214位
넉넉하다 /nôngnôk'ada/	(ゆとりがある)	1499位

これらの例は、程度の差はあるが、純然たるオノマトペというよりは一般語的性格が感じられるものである。意外と思われるほど数も少ないし頻度順位も低い。したがって、韓国語の場合にも、語彙全体から見たオノマトペの使用頻度はそれほど高くないと判断せざるを得ない。

以上のデータから判断されるように、語彙全体から見ればオノマトペの使用頻度はそれほど高くない。それにもかかわらず、日韓両語においてオノマトペがよく用いられると感じられるのは何故であろうか。一つには、前節に述べたように、両語のオノマトペの個数が多いという理由が考えられる。野間(1991:87)の言葉を借りれば、「個々の単語として高頻度で用いられているのではなく、一つのまとまった大きな語層として多用されている」(太字原著者)のである。また、後に述べるように、日韓両語のオノマトペが反復形を多用するなど形態的な特徴を持っていることも、実際の使用頻度以上に多用を印象づけ

る理由になっているのかもしれない。さらに、英語などと比較してみる場合、様態副詞を中心とする副詞的用法が基本的用法になっていることも、理由の1つである。英語など西洋語では様態副詞は形容詞からの派生副詞が基本であり、オノマトペ的な本来副詞は極めてまれであるからである。以上のような理由に加えて、いま一つ重要な理由がある。それは、実際、オノマトペが多用される場合があるということである。

オノマトペは、声や音、感情や動作の様態などを、直接的、具体的、感覚的に生き生きと描写する、描写力がその生命である。そのような生き生きとした描写力が要求される言語レベルではオノマトペが多用され、逆に、感覚的な描写力よりも知的な表現力や抽象的な概念が要求される言語レベルでは、オノマトペの使用は抑えられる。童話や広告文、日常的な話し言葉は前者の言語レベルの例であり、学術論文や法律文、演説などは後者の言語レベルの例である。日本語についてはこのような言語レベルの違いに応じたオノマトペの使用頻度の変異に関していくつかの調査結果が報告されている。

大坪(1989:182)は、童話資料として宮沢賢治の『風の又三郎』、『注文の多い料理店』、『どんぐりと山猫』など11篇の作品および坪田譲治の『新篇坪田譲治童話集』(「正太樹をめぐる」,「枝にかかった金輪」,「マタメガネ」など33篇)、一般小説として志賀直哉の『暗夜行路』、谷崎潤一郎の『痴人の愛』、宮本百合子『伸子』、林芙美子の『放浪記』を選び、オノマトペの使用頻度を比較した。頻度の算定方法は、それぞれの作品全体の字数を、そこに用いられたオノマトペの異なり語数で割るというもので、数値が小さいほど頻度が高いことになる。結果は次頁の表(5)の通りである。

これによれば、オノマトペを多用することで知られている宮沢賢治は他のどの作家よりもオノマトペの使用頻度が高く、最も頻度の低い志賀直哉の5倍近くにもなっている。ところが、同じ童話作家でも、坪田譲治の場合は谷崎潤一

(5)

作 者	オノマトペ数	1語当り平均字数
宮 沢 賢 治	381	426
坪 田 謙 治	295	700
志 賀 直 哉	186	2012
谷 崎 潤 一 郎	287	728
宮 本 百 合 子	261	1333
林 芙 美 子	274	693

郎や林芙美子と同程度である。大坪は、童話でも小説でも作家によってオノマトペの使用頻度には開きがあるとしているが、このように童話と小説との違いが顕著に出なかったのは、延べ語数ではなく異なり語数でオノマトペの頻度を算定したためではないかと思われる。童話では同じオノマトペが何度も使われる傾向があるように感じられるから、異なり語数ではなく延べ語数に基づいて使用頻度を計算したら、童話作品と小説との開きはより顕著になったのではないかと推測される。

スコウラップ(1993)は、小規模な資料を対象とする調査であるけれども、様々な言語レベルのテキストにおける日本語のオノマトペの頻度を包括的に比較している。まず、書き言葉としては、児童文学、中高生向けの小説、一般向けの小説、学術論文、新聞、漫画を取り上げている。調査方法は、3000字分のテキストを対象としてそこに使われているオノマトペの個数を数え、1000字当たり何個のオノマトペが現れるかを計算し、それをオノマトペの使用頻度の指標にするというものである。その結果、児童文学、中高生向けの小説、一般向けの小説については次頁の表(6)のような結果が得られた。それぞれのレベル毎に3種のテキスト(合計9000字分)を選んで調査しているが、ここには平均化した数値のみを掲げる。

これを見ると、児童文学におけるオノマトペの使用頻度は抜きん出て高く、一般的な小説の10倍以上に及ぶ。フィクションという同じジャンルの書き物でも、読者年齢が若いものほどオノマトペの使用頻度が高いという直感的印象

(6) テキストの種類	オノマトペの個数	使用頻度 (個/1000字当り)
児童文学	114	13.11
中高生向けの小説	本文	26
	対話	4
	合計	30
一般的な小説	本文	17
	対話	8
	合計	25

を端的に示している。また、興味深いことは、中高生向けの小説、一般的な小説のいずれにおいても、対話文よりも本文(地の文)におけるオノマトペの使用頻度の方が顕著に高いという点である。一般的な小説では約2倍、中学生向けの小説では実に約6倍も本文の頻度が高い。児童文学に関しては対話文と本文とを区別して結果を出してはいないけれども、同様の傾向があるのではないかとと思われる。

学術論文に関しては、『ニッポニカ百科辞典』の「牛」に関する記事、マルクス主義の歴史に関する本、昭和時代の歴史書の3点をのテキストとしてそれぞれ3000字分を対象に調査したところ、オノマトペは1例も使われていなかったという。

新聞に関しては、まず、『毎日新聞』1日分(約150,000字)を対象として調査したところ、49個のオノマトペが使われていたという。これを1000字当りに換算すると0.33個となり、頻度はそれほど高くない。しかしながら、これは新聞全体についての平均であり、記事の種類によって頻度は大きく異なる。広告は紙面の3分の1以下であるにもかかわらず、49個のオノマトペのうち半数を超える25個が広告に現れていたという。3分の1以下というのはおそらく紙面の面積比であると思われるから、字数比で考えると広告文におけるオノマトペの使用頻度は新聞紙面全体に比べてはるかに高い数値になるものと予測さ

れる。⁹

新聞記事のうちオノマトペがよく使われると言われるスポーツ記事について、スコウラップは同じ日のスポーツ紙3紙の相撲記事と野球記事を対象に調査している。その結果は次の通りである。

(7)	テキストの種類	文字数	オノマトペの個数	使用頻度 (個/1000字当り)
	相撲記事	5355	19	3.55
	野球記事	5853	6	1.03
	合計	11208	25	2.23

これを見ると、新聞記事の中でもスポーツ記事は、一般小説並みあるいはそれ以上の頻度でオノマトペを用いていることがわかる。

また、よくオノマトペが頻繁に用いられるとされる見出しについては、スポーツ紙3紙では総計66頁に13個、5.1頁につき1個の割合で用いられており、一般紙3紙では94頁に5個、18.8頁につき1個の割合であったとしている。頻度の高いスポーツ紙のうち『日刊スポーツ』では見出しは約3000字分あるが、そこに4個のオノマトペが用いられているから、1000字当りの個数は1.33個ということになる。これは、一般的な小説並みの頻度であり、特に高いというわけではない。新聞の見出しにオノマトペが多いという印象は、用いられた例が印象的であるために生じる錯覚ではないかと、スコウラップは推測している。

漫画については、吹き出しの台詞部分と独立部分に分けて調査しているが、前者に関しては、1000字当り1.44個で小説全体(1000字当り1.39個)とほぼ同じ頻度であるのに対して、独立部分ではその10倍にも及ぶ頻度でオノマトペ

⁹ スコウラップは広告の総字数を出していないため1000字当りの個数を計算することができない。

が用いられていると言う。¹⁰

話し言葉については、雑誌『言語生活』に載せられた自然な会話の録音を文字転写したもの(約66,700字分)を資料として調査した結果、資料全体に見出されたオノマトベは140個で、1000字当りに換算すると2.09個のオノマトベが用いられていると言う。これは、先に示した一般的な小説の本文よりも高く、中高生向けの小説の本文よりもやや低い数値である。このことから、話し言葉においてはオノマトベの使用頻度は比較的高いと述べている。また、スコウラップには、話し言葉の形式度とオノマトベの使用頻度の関係についても簡単な調査結果が報告されている。それによれば、くだけた話し言葉やや改まった話し言葉では、オノマトベが同程度に高い頻度で用いられるのに対して、非常に改まった話し言葉では、オノマトベはほとんど用いられないことがわかるとしている。スコウラップは、以上のような調査結果に基づき、オノマトベが多用される談話の特性として次の4点を挙げている。

(8) INFORMALITY (インフォーマルな談話であること)

OSTENTATIOUSNESS (読者あるいは聞き手の注意を引くような談話であること)

CONDENSATION (意味が簡潔に凝縮された談話であること)

CONCRETENESS (具体性を有する談話であること)

韓国語のオノマトベの使用頻度に関しては、筆者の知る限り、スコウラップ(1993)に匹敵するような包括的な調査研究は発表されていない。しかし、日本語の場合とほとんど同じように言語レベルによってオノマトベの使用頻度が異

¹⁰ 大坪(1989:481)にも、漫画におけるオノマトベの使用頻度に関する調査結果が報告されている。彼は、少年向け漫画2編を対象として、台詞部分、独立分の別なく漫画全体に用いられている自立語の個数とオノマトベの個数を数え上げた。その結果、1編においては自立語372語、オノマトベ35語で、自立語9.3語に対して1語の割合で用いられており、他の1編においては、自立語574語、オノマトベ173語で、実に自立語3.8語に対して1語の割合でオノマトベが用いられていると言う。頻度の算定方法が異なるので単純な比較はできないが、おそらく、スコウラップ(1993)の調査結果に匹敵する頻度であると思われる。

なることはよく知られており、断片的にはあるけれどもそれを示すための調査も行なわれている。

徐尚揆(ソ・サンギョ)(1993:73)は、小説23編、放送手記2編、¹¹ 放送台本・シナリオ4編を対象としてオノマトペの使用頻度を調べている。頻度の算定方法は、調査対象資料の文の数とオノマトペの用例数を調べ、前者に対する後者の比を百分率で示すというものである。つまり、平均して何%の文にオノマトペが含まれるかを示したものである。その結果は次の通りである。

(9)	資料の種類	文の数	オノマトペ用例数	頻度
	小説	21403	3734	17.45%
	放送手記	7433	1473	19.79%
	台本・シナリオ	7581	519	6.91%

また、朴東根(パク・トングン)(1997:15)は、1990年以降の短編小説、手記、放送台本・シナリオ、対話、新聞などを資料としてオノマトペの使用実態を調査している。このうち小説、手記、放送台本・シナリオに関しては使用頻度を計算せず、単に頻度は徐尚揆(1993)の調査結果と大きく異なることはないであろうとだけ述べている。徐が触れていない対話資料と新聞資料については、同じ方法で頻度を算定している。

(10)	資料の種類	文の数	オノマトペ用例数	頻度
	対話	1681	25	1.48%
	新聞	761	58	7.62%

これらの結果を見ると、最も顕著な点是对話におけるオノマトペの使用頻度が非常に低いということである。小説に比べて10分の1以下の頻度でしかない。台本・シナリオにおいても、オノマトペは対話よりも地の文に多く用いら

¹¹ 放送手記とは視聴者が放送局に投書した文章のことである。

れると述べているから、対話部分に限った頻度は6.91%よりも低くなるであろう。このような対話における頻度の低さは、日本語のオノマトペについてのスコウラップ(1993)の調査結果が、一般的な小説の本文の頻度よりも話し言葉における頻度の方が高いことを示しており、したがって、話し言葉におけるオノマトペの使用頻度は比較的高いと述べていることと好対照を見せている。韓国語の対話におけるオノマトペの使用頻度が低いという調査結果に基づき、朴東根(パク・トンゲン)(1997:20)は次のように推測している。

これは、オノマトペが口語よりは文語の性格を持っていることを示している。一般談話においてオノマトペの使用頻度が低いのは、オノマトペの意味的特性は状況に対する描写性が強いということであるが、一般談話の現場では言葉以外に多様な情報が直接提供されるので、特別にオノマトペを使う必要がないためであると思われる。(筆者訳)

しかしながら、筆者の直感的印象では、話し言葉におけるオノマトペの使用頻度において日本語と韓国語でこのような大きな違いがあるようには思われない。また、オノマトペが口語より文語の性格を持っているという朴の主張には、直感的に釈然としないものを感じる。上の調査結果は、日韓両語のオノマトペの分布の違いを反映しているというよりは、調査方法の不備に起因すると考えるのが妥当ではないかと思われるのである。つまり、朴は2種類計50分の対話記録を対象として頻度調査をしているのであるが、その対話がどのような内容のものであるか、くだけた対話であるのか改まった対話であるのかについては何も明らかにしていない。話し言葉の場合、スコウラップの言うように形式度の違いによりオノマトペの頻度が異なることは、韓国語においても同様であろうと思われる。この点を加味して調査すれば、日韓両語の間で上の結果ほどの大きな違いは出ないのではないかと思われるのである。

日本語においても韓国語においても、小説や台本の場合、対話部分よりも地

の文にオノマトペが多く使われるという結果が出ている。このことから、対話におけるオノマトペの頻度が低いとする朴の観察の方が正しいのであって、話し言葉が小説の本文よりもオノマトペの頻度が高いとするスコウラップの調査結果の方が矛盾を含んでいるのではないかと反論があるかもしれない。しかしながら、小説や台本などの対話部分と、日常の実際の対話とを同じものだと考えることには問題がある。前者はあくまでも創作であり、実際の対話がもつ特徴のあるものは失われている可能性は充分にある。

その他、韓国語のオノマトペの使用状況について、金仁和(キム・インファ)(1994:132)が簡単な調査結果を報告している。小学校および中学校の教科書に使用されている語彙のうち0.6%がオノマトペであり、戯曲を資料とした調査ではオノマトペが1.3頁当たり1回の割合で使われており、また、放送談話資料(対談とドラマ)の調査では1分に0.23回、つまり4.3分当たり1回の割合でオノマトペが用いられていると言う。この結果から、金仁和はオノマトペの使用頻度が高いと述べているのであるが、この結果だけで頻度の高低を論ずるのは無理があると思われる。さらに、頻度の算定方法が異なるので、言語レベル間の比較もできない。

オノマトペがよく用いられるとされる童話については、韓国では調査報告がないようであるので、筆者が朴東根(1997)(パク・トンゲン)と同じ方法で調査を行った。資料としたのは김은숙(キム・ウンスク)他(1992)『대한민국 문학상 수상 동화집 1(大韓民国文学賞受賞童話集1)』で8人の作家の創作童話14編を収めたものである。対話部分と地文とに分けて、文章数に対するオノマトペ用例数の百分率で頻度を表わすことにした。その結果を作家別に示すと次頁の表(11)の通りである。

これを見ると、対話と地文とではオノマトペの使用頻度にかなり顕著な差があり、日本語の小説や韓国語の台本・シナリオについて観察されているところ

(11)

作家	対 話			地 文		
	文	オノマトペ	頻度(%)	文	オノマトペ	頻度(%)
①	237	11	4.64	126	36	28.57
②	150	9	6.00	184	74	40.22
③	106	13	12.26	249	53	21.29
④	136	3	2.21	307	108	35.18
⑤	49	4	8.16	313	19	6.07
⑥	130	9	6.92	222	53	23.87
⑦	123	6	4.88	105	24	22.86
⑧	508	16	3.15	618	120	19.42
計	1439	71	4.93	2124	487	22.93

と一致する。地文における使用頻度は、最低は作家⑤の6.07%から最高は作家②の40.22%まで作家によってかなり開きがあるけれども、平均すると22.93%で、一般的な小説について徐尚揆(ソ・サンギュ)(1993)が調査した結果とほとんど同じレベルである。¹² スコウラップが、日本の児童文学におけるオノマトペの使用頻度は一般的な小説に比べて圧倒的に高いという調査結果を出していることと全く異なる結果である。しかしながら、これには2つの理由が考えられる。1つはオノマトペの範囲の問題である。筆者の調査では、オノマトペであるのか一般語であるのか曖昧な用例はオノマトペに含めなかったが、そのような例が徐尚揆(1993)ではオノマトペとして数えられているかもしれない。いま1つの理由は、筆者が調査した資料は創作童話であり、しかも、文学賞受賞作品を集めたものであるから、必ずしも読者は低年齢層というわけではなく、かなり幅があると思われる。したがって、一般的な小説並みにオノマトペの使用が抑えられていると考えられる。

そこで、明らかに児童向けの典型的な童話と思われる作品を資料に調査することにした。資料としたのは、지선옥(チ・ソク)編(1996)『한국 전래 동화(韓国伝来童話)上』に収められている童話のうち最初の10編である。調査結果は

¹² 徐尚揆(1993)と朴東根(1997)では対話と地文の区別をしていない。筆者の資料についてもこの区別を

次の通りであった。

(12) 作品	対 話			地 文		
	文	オノマトペ	頻度(%)	文	オノマトペ	頻度(%)
①	47	2	4.26	31	10	32.26
②	44	5	11.36	33	17	51.52
③	32	3	9.38	37	13	35.14
④	3	0	0.00	28	17	60.71
⑤	38	3	7.89	70	19	27.14
⑥	34	3	8.82	44	19	43.18
⑦	24	2	8.33	54	11	20.37
⑧	18	6	33.33	33	15	45.45
⑨	8	1	12.50	40	10	25.00
⑩	27	1	3.70	27	4	14.81
計	275	26	9.45	397	135	34.01

これを見ると、韓国語においてもやはり、童話におけるオノマトペの使用頻度は、一般小説の場合よりもかなり高いと言えるようである。

漫画のオノマトペについては、韓国では調査がなされていないようである。ただ、朴東根(パク・トンゴン)(1997:15脚注)が次のように述べている。

オノマトペが最も積極的に使用される分野は「詩」と「漫画」である。しかし、これらにおいて使用されるオノマトペは非形式的な場合が多く、一般的なオノマトペの用法を反映しているとは考えにくい。もちろん、このような用法をオノマトペの1つの特徴として把握することができるけれども、この研究の目的には合わないので資料収集の対象から除外した。(筆者訳)

比較すべき調査はないけれども、漫画のオノマトペについても日韓の間で大きな違いはないように思われる。オノマトペの大部分は、台詞や説明部分よりも独立部分で用いられているし、また、その多くは臨時語的なものである。

以上の議論をまとめると、日本語においても韓国語においてもオノマトペの

しないで頻度を計算すると 15.66%となりむしろ一般的な小説の頻度よりも低い。

使用頻度に関しては本格的な調査研究がなされておらず、日韓両語の比較対照を目的としてなされた調査研究は事実上ないに等しい。使用頻度の算定の仕方にも研究者毎に異なっており、調査結果を比較し有意な結論を出すのは難しいのが実状である。多少なりとも確信の持てる結論を出すには、同じ基準、同じ方法で日韓両語におけるオノマトペの頻度調査を本格的に行なう必要がある。しかしながら、日韓いずれの言語においても、オノマトペがそれぞれの言語を特徴づける要素の1つと見なされるほど印象的に用いられていること、言語レベルの違いに応じてオノマトペの使用頻度に違いがあること、そして、その使用頻度の変異に日韓の間でかなり共通した傾向があることは明らかなようである。

2.3 音韻的特徴

オノマトペの音韻的特徴については、日韓両語とも詳細な先行研究がある。本節では、それらの研究成果に基づいて、長さ(音節数・拍数)、音節構造、反復形、拡張形など様々な観点から両語のオノマトペの音韻的特徴を比較対照する。

2.3.1 長さ

韓国語の発話のリズムは音節を単位としているのに対して、日本語のリズムは音節ではなく拍(モラ)を単位としている。オノマトペは口調、リズムと密接にかかわるので、オノマトペの長さを記述するときそれぞれの言語のリズム単位を用いるのが妥当であろう。

2.3.1.1 日本語の場合

日本語のオノマトペを長さ(拍数)の観点から分類すると、1拍のものから大

体8拍ぐらいのものまでに分けることができる。次の表(13)はそれをさらに特徴的なパターンに分けて示したものである。パターンについては§2.4で述べることにする。

(13)	長さ	パターン	例	
	1	非 反 復	ふ、つ	
	2	非 反 復	○ー	ふー、つー、すー、かー、ぼー
○ッ			かつ、ぎゅっ、さっ、ぞっ、ぼっ、	
○ン			わん、ちん、どん、しゃん、つん	
		○□	すい、おい、ほい、びた	
		反 復	○○	たた、ちち、つつ
	3	非 反 復	○ーッ	かーっ、きゅーっ、ごーっ、さーっ
			○ーン	こーん、ちーん、ばーん、びーん
			○□ッ	がりっ、けるっ、さらっ、だらっ
			○□リ	けろり、さらり、だらり、ちらり
			○□ン	がたん、きよたん、すてん、だらん
			○ッ□	すっく、どっか、はっし
			○ン□	さんぶ、むんず、やんや
			部分反復	○○ン
			○○ッ	どどっ、すすっ、ぐぐっ
			反 復	○○○
	4	非 反 復	○ッ□リ	ばったり、がっくり、くつきり
			○ッ□ン	ごっどん、すっどん、ぱっちん
			○ン□リ	あんぐり、うんざり、こんがり
			○□ーッ	じろーっ、すらーっ、にやーっ
			○□ーン	がらーん、すとーん、どたーん
			その他	ぶつくさ、ばちくり、のほほん、そそくさ
		反 復	○ッ○ッ	たったっ、ちっちっ、びっびっ
			○ン○ン	どんどん、ほんほん、ぐんぐん
			その他	がらがら、いらいら、すいすい
			類音反復	○□△□
	5	部分反復	○□○□ッ	がらがらっ、ふらふらっ、ぼろぼろっ
		非 反 復		ずでんどう、こてんばん、ざんぷりこ
	6	反 復	3拍×2	ぶらりぶらり、ぐでんぐでん、のっしのっし
			2拍×3	すたすたすた、とことことこ、かんかんかん
		類音反復	○□△☆□△	どたんばたん、のらりくらり、しどろもどろ
			○ん□ん△ん	どんちんかん、びんぼんぼん
		部分反復		いけしゃーしゃー、
		非 反 復		あっけらかん、こけこっこう、どんびしゃり
	7			のんべんだらり、しゅっしゅっほっほ
	8	反 復	4拍×2	かたことかたこと
			2拍×4	べらべらべらべら
		非 反 復		ずんぐりむっくり

長さ別のオノマトペの分布については、大坪(1989:39)が、天沼寧編(1974)

『擬音語・擬態語辞典』¹³に見出し語として掲げられているオノマトペ1532語および彼自身が現代小説から収集したオノマトペ1760語を対象として計算したところ、次のような分布状況であったと報告している。¹⁴

(14)

長さ	『擬音語・擬態語辞典』		「現代小説」	
	個数	比率	個数	比率
1			8	0.45%
2	107	6.98%	169	9.60%
3	491	32.04%	457	25.97%
4	747	48.75%	787	44.72%
5	58	3.79%	46	2.61%
6	109	7.11%	212	12.05%
7	2	0.13%	12	0.68%
8	18	1.17%	62	3.52%
9			2	0.11%
10			2	0.11%
11				
12			3	0.17%

これによれば、頻度の高い順に並べると、『擬音語・擬態語辞典』と「現代小説」のいずれにおいても4拍>3拍>6拍>2拍の順になっている。どちらの資料においてもこれら4種の長さのもので全体の90%以上を占めており、他の長さのものは非常に少ない。

次頁の表(15)は、浅野編(1978)『擬音語・擬態語辞典』(以下《浅野》)、阿刀田・星野著(1993)『擬音語・擬態語使い方辞典』(以下《阿刀田・星野》)、天沼編(1974)『擬音語・擬態語辞典』(以下《天沼》)の3種の辞典に見出し語として収録されているオノマトペを、筆者が表(13)のパターン区分に従って整理した

¹³ 天沼編『擬音語・擬態語辞典』は1970年代前半の『朝日』、『サンケイ』、『東京』、『日本経済』、『毎日』、『読売』の各新聞及び単行本や雑誌・週刊誌を資料としたものである。

¹⁴ 「現代小説」は1947年1月から1954年7月までの雑誌『中央公論』、『改造』、『文芸春秋』に載った小説571篇を資料としたものである。

ものである。¹⁵

(15)	長さ	タイプ	《浅野》			《阿刀田・星野》			《天沼》		
	1		0			0			0		
	2	単純	○ッ	29	49 (6.0%)	27	51 (6.9%)	37	107 (6.8%)	107	107 (6.8%)
			○ン	12		12		30			
			○ー	3		8		25			
			その他	5		4		15			
		反復	○○	0			0				
	3	単純	○ーッ	11	133 (17.0%)	10	121 (17.0%)	37	487 (31.9%)	487	499 (31.9%)
			○ーン	9		10		31			
			○□ン	26		26		87			
			○□ッ	63		56		186			
			○□リ	16		10		126			
			○ッ□	7		7		12			
			その他	1		2		8			
		部分反復		4			4				
		反復	○○○	0			0				
		4	単純	○ン□リ	22	113 (73.0%)	25	108 (72.8%)	25	243 (48.9%)	243
	○ッ□リ			75	71		104				
	○ッ□ン			1	1		14				
	○□ーン			2	1		30				
	○□ーッ			3	1		40				
	その他			10	9		30				
	反復		2拍×2	456			409				
			1拍×4	0			1				
	類音反復			18			17				
	部分反復			1			1				
	5	単純	1 (0.12%)			1 (0.14%)			63 (4.03%)		
	6	単純	3 (3.2%)			0 (3.0%)			6 (7.1%)		
		反復	3拍×2	20	20	19	19	86	92		
			2拍×3	0	0	0	6	6			
		類音反復		2			2				
	部分反復		1			1					
	7	単純	0 (0%)			0 (0%)			2 (0.13%)		
	8	単純	0 (0.6%)			0 (0.3%)			1 (1.2%)		
		反復	4拍×2	4	4	1	1	13	15		
			2拍×4	0	0	0	1	1			
			その他	0	0	0	1	1			
	類音反復		1			1					
	計		806			737			1565		

これによると、最も多いのが4拍語で2番目が3拍語であるということは(14)の結果と同じであるけれども、《浅野》と《阿刀田・星野》では2拍語の方が6拍語よりも多くなっている点が(14)とは異なる。これは、収録語数が異なる

¹⁵ 天沼の数値が表(14)のものと異なっているのは、大坪が自己のオノマトペの定義基準に従っていくつかのものを除外しているためである。

るためである。《天沼》の分析結果からわかるように、6拍語のほとんどは3拍語の反復形である。大坪が「現代小説」から採集した資料についても同様である。《浅野》や《阿刀田・星野》のように見出し語数の少ない辞典では「3拍×2」のタイプの反復形が除外された結果、相対的に6拍語の比率が低くなっていると考えられる。また、これら見出し語数の少ない辞典では4拍語の比率が70%を越えるほど高くなっている。その大部分が「2拍×2」のタイプの反復形であることから、この種の反復形が日本語オノマトペの中核的部分を占めていると判断される。

1拍のオノマトペは、どのオノマトペ辞典にも見出し語とされていないけれども、¹⁶ 大坪(1989)は「現代小説」から次の8個が収集されたという。¹⁷

(16) きゅ、くわ、ぎ、ぎよ、す、ち、つ、ふ

ただし、このうち「つ(と)」と「ふ(と)」の2例を除いては、オノマトペとしての定着度はあまり高くないと思われる。

また、9拍以上の長さのものは、天沼編(1974)『擬音語・擬態語辞典』には1例もないが、大坪(1989)は「現代小説」から次のようなものを拾っている。¹⁸

(17) 9拍：コーンコーンコーン

10拍：クックルウクックルウ、リリリリリリリリリ

12拍：ウオンウオンウオンウオン、ガッタンゴーガッタンゴー、
パチパチパチパチパチパチ

いずれも単純な反復形であり、1語と見なせるかどうか疑わしいものが多いよ

¹⁶ ただし、阿刀田・星野著『擬音語・擬態語使い方辞典』では見出し語にはしていないが「ふ(と)」が収録されている。

¹⁷ 巻末の語彙表参照

¹⁸ 巻末の語彙表参照

うである。

2.3.1.2 韓国語の場合

韓国語のオノマトペも、長さ1～8音節のものに分類できる。次頁の表(18)は、さらに特徴的なパターンに区分したものである。¹⁹

(18)

長さ	パターン		例
1		○ (-ㄱ)	탁(ごつんと), 쑈(ぎゅっと)
		○ (-ㅇ)	쿵(どしんと), 땡(じいんと)
		○ (-ㅅ)	츄(ちつ)
		○ (-ㅂ)	푸(ふうと)
2	非 反 復	○○ (-ㄱ-ㄱ)	푹쑹(ばさっと)
		○○ (-ㄹ-ㄱ)	찰각(がちゃんと)
		○○ (-ㅂ-ㄱ)	와락(ぐいと)
		○○ (-ㅁ-ㄱ)	잠빡(ちらっと)
		○○ (-ㄴ-ㄱ)	잔뜩(すっかり)
		○○ (-ㅅ-ㄱ)	덥석(さっと)
		○○ (-ㅇ-ㅇ)	푹덩(どぶんと)
		○○ (-ㄹ-ㅇ)	출렁(ざぶん)
		○○ (-ㅁ-ㅇ)	덤뽕(どぶん)
		○○ (-ㅂ-ㅇ)	야옹(ニャー)
		○○ (-ㅂ-ㄹ)	피쭈(ホーホケキョ)
		○○ (-ㄹ-ㄹ)	힐끔(ちらっと)
		○○ (-ㄹ-ㄴ)	발끈(かっと)
		○○ (-ㅂ-ㄴ)	사뿐(ひらりと)
		○○ (-ㅇ-ㅅ)	방긋(にっこりと)
		○○ (-ㄴ-ㅅ)	언뜻(ちらっと)
	○○ (-ㄹ-ㅅ)	힐끗(ちらっと)	
	○○ (-ㅂ-ㅅ)	사뽏(そっと)	
	○○ (-ㅁ-ㅂ)	음매(モーモー)	
	母音交替	○○	쑈쑈(ぎいこぎいこ)
	反 復	○○ (-ㄱ)	쨍쨍(ちゅうちゅう)
		○○ (-ㄹ)	덜덜(ふるふる)
		○○ (-ㅇ)	툭툭(どんどん)
○○ (-ㅅ)		짹짹(活鼓を打つようす)	
○○ (-ㅁ)		ㄱㄱ(活鼓を打つようす)	
○○ (-ㅂ)		히히(ひひっと)	
3	非 反 復	○○△	뽕그랑(りんりんと)
	部 分 反 復	○○○	히히덕(ひひっと)
		○○○	부시시(おもむるに)
	反 復	○○○	따따따(だだだっ)

¹⁹ パタンの区分については野間(1990:31-37)を参考にした。

[表(18)のつづき]

長さ		パターン	例
4	非反復	○□△☆	물끄러미(じっと)
	反復	2音節×2	굽실굽실(べこべこ)
	不完全反復	○□△□	울긁불긁(色とりどり)
	部分反復	○□△△	빙그르르(くるりと)
5	非反復	○□△☆◇	우지끈뚝딱(ほぎん)
	部分反復	○□△☆☆	우르릉광광(ごろごろ)
6	反復	3音節×2	꿈지락꿈지락(ぐずぐず)
		2音節×3	깜빡깜빡깜빡(きらきらきら)
	不完全反復	○□△☆□△	곤드레만드레(べろんべろん)
8	反復	4音節×2	헐레벌떡헐레벌떡(あえぎあえぎ)
		その他	칙칙폭폭칙칙폭폭(しゅっしゅっぼっぼっしゅっしゅっぼっぼっ)

長さ別の比率については、許卿姫(ホ・キョンヒ)(1989:62)が安田・孫編『エッセンス韓日辞典』に収録されている2348語を調べた結果、次の通りであると報告している。

(19)

長さ	語数	比率
1	99	4.2%
2	526	22.4%
3	230	9.8%
4	1240	52.8%
5	14	0.6%
6	216	9.2%
7		
8	5	0.2%
その他	24	1.0%

韓国語の場合も日本語と同様、4音節が52%でほぼ半数を越えており最も比率が高い。しかし、分布比率は4音節>2音節>3音節>6音節の順になっており、(14)に示した日本語の場合の順位、4拍>3拍>6拍>2拍とはかなり異なる。(14)と(19)の相違点をまとめると次の通りである。

- ① 日本語では長さ1単位のオノマトベがほとんどないのに対して、韓国語

には1単位のものがかかなりある。[(日)0% : (韓)4.2%]²⁰

- ② 日本語では2単位のオノマトペが韓国語に比べてはるかに少ない。
[(日)7.0% : (韓)22.4%]
- ③ 日本語では3単位のオノマトペが韓国語に比べてはるかに多い。
[(日)32.0% : (韓)9.8%]

このような相違は、長さの単位が日本語では拍であるのに対して韓国語では音節であることと日韓の音節構造の違いに起因するものである。日本語は開音節言語であるために音節の多様性に乏しく、オノマトペに限らず一般語彙においても「目」、「手」、「木」などの1拍語は非常に数が少ない。一方、韓国語は閉音節言語で音節末音が可能であるため異なる音節の数が多く、「나」/na/ (私)、「속」/sok/ (中)、「밖」/pak/ (外)、「삭」/sak/ (賃金)、「산」/san/ (山)、「길」/kil/ (道)、「닭」/tak/ (鶏)、「감」/kam/ (柿)、「입」/ip/ (口)、「값」/kap/ (値)、「옷」/ot/ (服)、「방」/pang/ (部屋)、「낮」/nat/ (昼)、「꽃」/kkot/ (花)、「밭」/pat/ (畑)、「숲」/sup/ (林) などのように1音節語が非常に多い。これがオノマトペにも反映されて韓国語には1音節のオノマトペが日本語に比べてはるかに多いのである。②に示した2単位のオノマトペの比率の違いもやはり両語の音節構造に起因している。「かつ(と)」、「つん(と)」、「ぎゃー(と)」のような日本語の2拍オノマトペは、聴覚印象的には韓国語の2音節オノマトペではなく1音節のものに対応すると考えられる。これに対して、韓国語の2音節オノマトペはほとんどのものが閉音節から成るものでり、²¹ その聴覚印象は日本語の2拍オノマトペではなく、3拍あるいは4拍のものに対応すると考えられる。言わば、長さの観点から見ると日本語のオノマトペの基本は2拍であり、韓国語では1音節である。したがって、日本語の2拍オノマトペには反復形式のものがほとんどないのに対して、韓国語の

²⁰ (19)の資料が辞典から取ったものであるため、日本語の数値は、(14)の数値のうち『擬音語・擬態語辞典』の方を取った。

²¹ 表(20)を参照。

2音節オノマトペには1音節オノマトペの反復形がかなりある。²² このような理由で2単位の長さのオノマトペの比率が日韓両語の間で大きく異なるのである。③に示したように3単位のオノマトペでは日本語の比率が韓国語に比べて高い理由は、①、②の場合とは異なる。日韓両語のオノマトペの音韻構造の面で最大の特徴とされるのは反復形式が多いということである。したがって、韓国語では1音節オノマトペの反復形としての2音節オノマトペが多く、また2音節オノマトペの反復形として4音節のものが多い。日本語で4拍オノマトペが多いのも同じ理由である。韓国語で3音節オノマトペが少ないのは、反復形式がほとんどなく、単純形であるためである。²³ これは日本語でも同様のはずであるが、日本語には特殊事情がある。(15)に示したように日本語には「○□ン」、「○□ッ」、「○□リ」のような発音、促音、「リ」を含む特徴的なパターンがあり、これが3音節オノマトペの比率を高くしているのである。

次頁の表(20)は、김홍범(キム・ホンボム)(1995)のオノマトペのリストを資料として(18)のパターン区分に従い筆者が各パターンの分布状況を調査したものである。

この調査結果は(19)のものとはほぼ一致している。比率には若干の違いがあるけれども、順位の点では4音節>2音節>3音節>6音節の順で(19)の場合とまったく同じである。

²² 表(20)を参照。

²³ 表(18)に挙げたように「叫叫叫」/tta-tta-tta/(だだだ)のような1音節要素を3回反復する形式もあるけれども数が少ない。また、ここで反復形式と言っているのは「完全反復形」のことであるが、「스르르」/súrúrú/(すすと)のような「部分反復形」の3音節オノマトペもある。しかし、やはり数は少ない。反復形の分類については§2.4.1を参照。

(20)	長さ	様式	ボタン	個数(比率)		長さ	様式	ボタン	個数(比率)				
	1			○(-ㄱ)	74	156 (3.3%)	非反復	○○(-ㄴ-ㄱ)	11				
			○(-ㅇ)	57	○○(-ㄴ-ㅇ)			22					
			○(-ㄱ)	0	○○(-ㄴ-ㅇ)			28					
			○(-ㅇ)	2	○○(-ㅇ-ㄱ)			28					
			○(-ㅇ)	3	○○(-ㄴ-ㄱ)			74					
			○(-ㄴ)	0	○○(-ㄴ-ㄴ)			1					
			○(-ㄴ)	20	○○(-ㄴ-ㄴ)			2					
2	非反復		○○(-ㄱ-ㄱ)	26	1637 (35.0%)	2	非反復	○○(-ㄴ-ㄱ)	1				
			○○(-ㄱ-ㅇ)	14				○○(-ㄴ-ㄴ)	7				
			○○(-ㄱ-ㄴ)	13				○○(-ㄴ-ㄴ)	1				
			○○(-ㅇ-ㄱ)	180				○○(-ㄴ-ㄴ)	1				
			○○(-ㄴ-ㄱ)	144				○○(-ㄴ-ㄴ)	1				
			○○(-ㄴ-ㅇ)	53				○○(-ㄴ-ㄴ)	1				
			○○(-ㄴ-ㄴ)	49				○○(-ㄴ-ㄴ)	1				
			○○(-ㄴ-ㄴ)	19				○○(-ㄴ-ㄴ)	1				
			○○(-ㄴ-ㅇ)	4				○○(-ㄴ-ㄴ)	1				
			○○(-ㄴ-ㄴ)	5				○○(-ㄴ-ㄴ)	1				
			○○(-ㄴ-ㄴ)	1		○○(-ㄴ-ㄴ)	1						
			○○(-ㅇ-ㄱ)	9		○○(-ㄴ-ㄴ)	1						
			○○(-ㅇ-ㅇ)	35		○○(-ㄴ-ㄴ)	1						
			○○(-ㅇ-ㅇ)	56		○○(-ㄴ-ㄴ)	1						
			○○(-ㅇ-ㅇ)	5		○○(-ㄴ-ㄴ)	1						
			○○(-ㅇ-ㅇ)	103		○○(-ㄴ-ㄴ)	1						
			○○(-ㄴ-ㅇ)	12		○○(-ㄴ-ㄴ)	1						
			○○(-ㄴ-ㄴ)	1		○○(-ㄴ-ㄴ)	1						
			○○(-ㄴ-ㅇ)	27		○○(-ㄴ-ㄴ)	1						
			○○(-ㄴ-ㄱ)	3		○○(-ㄴ-ㄴ)	1						
			○○(-ㄴ-ㅇ)	51		○○(-ㄴ-ㄴ)	1						
			○○(-ㄴ-ㅇ)	140		○○(-ㄴ-ㄴ)	1						
			○○(-ㄴ-ㄴ)	33		○○(-ㄴ-ㄴ)	1						
			○○(-ㄴ-ㄴ)	31		○○(-ㄴ-ㄴ)	1						
			○○(-ㄴ-ㄴ)	43		○○(-ㄴ-ㄴ)	1						
			○○(-ㄴ-ㄴ)	69		○○(-ㄴ-ㄴ)	1						
			○○(-ㄴ-ㄴ)	49		○○(-ㄴ-ㄴ)	1						
		3				○○(-ㄴ-ㄴ)	394	460 (9.8%)	非反復	○○(-ㄴ-ㄴ)	4		
						○○(-ㄴ-ㄴ)	61			部分反復	○○○		1
						○○(-ㄴ-ㄴ)	1			反復	○○○		1
		4	非反復			○○(-ㄴ-ㄴ)	10	2003 (42.8%)	非反復	○○(-ㄴ-ㄴ)	10		
						○○(-ㄴ-ㄴ)	1832			反復	○○○		6
	○○(-ㄴ-ㄴ)			115	類音反復	○○○	6						
	○○(-ㄴ-ㄴ)			40	部分反復	○○○	6						
5	非反復		○○(-ㄴ-ㄴ)	4	10	非反復	○○(-ㄴ-ㄴ)	4					
			○○(-ㄴ-ㄴ)	6			部分反復	○○○		6			
6	反復		○○(-ㄴ-ㄴ)	401	411 (8.8%)	反復	○○(-ㄴ-ㄴ)	0					
			○○(-ㄴ-ㄴ)	0			類音反復	○○○		10			
			○○(-ㄴ-ㄴ)	10			類音反復	○○○		10			
8	反復		○○(-ㄴ-ㄴ)	2	2	反復	○○(-ㄴ-ㄴ)	2					
			○○(-ㄴ-ㄴ)	0			その他	○○○		0			

2.3.2 音節構造

日本語と韓国語は、統語構造は酷似しているけれども音韻構造においてはかなり異なる。日本語は、促音など特殊な音韻を末尾に持つ音節を除いては音節が母音で終わり音節末子音を持たない開音節型の言語であるのに対して、韓国語は音節末子音(パッチム、終声)を用いる閉音節型の言語である。音節を構成する母音や子音の体系も異なる。日本語が5母音体系であるのに対して、韓国語は8母音体系である。日本語の阻害音には有声(濁音)・無声(清音)の対立があるのに対して、韓国語には有声・無声の対立はなく、代りに平音・濃音・激

音という3項対立がある。²⁴

このような音節構造の違いが日韓両語のオノマトペの音韻的特徴の違いに反映されていることはすでに§2.3.1に指摘した。しかし、音節を構成する母音や子音の分布状況を見ると、オノマトペを音韻的に特徴づける上で日韓両語に共通の傾向が観察される。

2.3.2.1 母音

本節では、母音の出現頻度の観点から日韓両語のオノマトペがどのように特徴づけられているかを考察する。

2.3.2.1.1 日本語の場合

大坪(1989:74)は(14)と同じ資料に基づいてオノマトペにおける母音の分布を調査し、その結果は次のようであったと報告している。

(21)	『擬音語・擬態語辞典』			「現代小説」		
	母音	個数	比率	母音	個数	比率
1	/a/	1259	28.1%	/a/	1534	27.3%
2	/i/	1081	24.1%	/i/	1341	23.8%
3	/o/	1010	22.5%	/o/	1322	23.5%
4	/u/	945	21.1%	/u/	1125	20.1%
5	/e/	189	4.2%	/e/	300	5.3%
	計	4484			5622	

/i/と/o/の順位が入れ替わっている以外は、どちらの資料でも母音の比率の順位は変わらない。/i/、/o/、/u/の差はわずかである。

一般語における母音の分布と比較するために、筆者が一般語について簡単な調査を行なった。調査対象としたテキストは外山滋比古著(1975)『日本語の感覚』(テキスト1)と五木寛之著(1993)『生きるヒント』(テキスト2)である。

²⁴ 濃音は喉の緊張を伴なって調音される無帯気音、激音は強い氣息を伴なう帯気音、平音はそのいずれ

前者は「ダ・ DEAL体」で、後者は「デス・マス体」で書かれている。それぞれから、約10,000音分の文章を抽出し固有語と漢字語に分けて分析した。オノマトペと西洋語系の外来語は除外した。その結果は、次の通りである。

(22) 母音	固有語				漢字語			
	テキスト1		テキスト2		テキスト1		テキスト2	
	個数	比率	個数	比率	個数	比率	個数	比率
a	1312	30.2%	1720	29.4%	187	17.0%	319	21.0%
i	865	19.9%	1158	19.8%	290	26.4%	412	27.1%
u	517	11.9%	712	12.2%	195	17.7%	223	14.7%
e	538	12.4%	725	12.4%	167	15.2%	203	13.4%
o	1111	25.6%	1526	26.1%	261	23.7%	362	23.8%
計	4343		5841		1100		1519	

(21)と(22)を比べ合わせると、オノマトペと一般語との母音の分布状況に関して次のようなことが言えると思われる。

- ① 固有語と同様、オノマトペでは/a/と/o/の頻度が高い。
- ② /i/の頻度は漢字語で最も高く、オノマトペでは固有語と同様中程度の頻度である。
- ③ オノマトペでは、固有語や漢字語に比べて/e/の頻度が極端に低い。

このうち、③の/e/の頻度が低くまた特殊な語感を伴うことは、日本語のオノマトペの特徴としてよく知られている事実である。詳しくは§2.6.1に述べる。

2.3.2.1.2 韓国語の場合

オノマトペを構成する音の分布に関しては Fundling (1985)が綿密な調査を行なっている。野間(1990:28)は、その調査結果からオノマトペの特徴を明らかにするために、一般語に関して自分が行なった簡単な調査²⁵の結果を対比させている。母音に関する両調査の結果を対照表にすると次の通りである。

の特徴も持たない無帯気音である。

²⁵ ただし、調査の具体的方法については述べていない。

(23)

順位	Fundling		野間	
	母音	比率	母音	比率
1	ㅏ /a/	19.89%	ㅏ /a/	25.4%
2	ㅡ /û/	18.51%	ㅡ /û/	17.6%
3	ㅓ /ô/	18.48%	ㅣ /i/	12.5%
4	ㅜ /u/	15.01%	ㅓ /ô/	11.8%
5	ㅣ /i/	10.89%	ㅓ /o/	8.8%
6	ㅓ /o/	8.17%	ㅜ /u/	5.9%
7	ㅚ /æ/	3.65%	ㅚ /æ/	2.6%
8	ㅙ /e/	1.59%		
9	ㅘ /wa/	1.33%		

両資料を対照させることにより、オノマトペにおける母音の分布に関して野間は次のように考察している。

- ① 一般語同様、「ㅏ」/a/、「ㅡ」/û/、「ㅓ」/ô/が多く、「ㅚ」/e/と「ㅙ」/æ/が少ない。
- ② 一般語に比して、擬声擬態語では「ㅣ」/i/の頻度が相対的に低い。

野間(1990:27)は、①のように韓国語でもオノマトペには「ㅚ」/e/や「ㅙ」/æ/が少ないことは「日本語でもエ段の母音を持つ擬声擬態語が少ないことに照らして興味深い」としている。しかし、上に見たように、日本語では一般語に比べて明らかにオノマトペで/e/の出現頻度が少ないのに対して、韓国語では一般語でも同様に「ㅚ」/e/や「ㅙ」/æ/が少ない。したがって、①をオノマトペの音韻的特徴と見なすことは妥当でないと考えられる。

2.3.2.2 子音

本節では、子音の出現頻度の観点から日韓両語のオノマトペがどのように特徴づけられているかを考察する。

2.3.2.2.1 日本語の場合

大坪(1989:82)によれば、(14)および(21)と同じ資料に関して子音の分布を調査した結果は次の通りであったとしている。

(24)

子音	「現代小説」		『擬音語・擬態語辞典』	
	個数	小計	個数	小計
k	765	2369 (43.8%)	657	1890 (43.3%)
s	378		307	
t	646		461	
h	182		136	
p	398		331	
g	387	1197 (22.1%)	336	943 (21.6%)
z	238		163	
d	200		144	
b	372		300	
ky	19	299 (5.5%)	21	265 (6.1%)
sy	91		81	
ty	146		116	
hy	30		25	
py	13		22	
gy	30	72 (1.3%)	14	62 (1.4%)
dy	32		37	
by	10		11	
n	117	1448 (26.8%)	92	1174 (26.9%)
m	173		99	
y	86		66	
r	1005		856	
w	67		61	
ny	14	14 (0.3%)	35	35 (0.8%)
my	0		0	
ry	0		0	
kw	4	10 (0.2%)	0	0 (0.0%)
gw	6		0	
総計		5409		4369

これを一般語の場合と比較するために(22)と同じ資料により調査をしたところ、次のような結果であった。

(25)

子音	固有語				漢字語			
	テキスト1		テキスト2		テキスト1		テキスト2	
	個数	小計	個数	小計	個数	小計	個数	小計
k	523	1658 (43.8%)	669	2072 (41.7%)	231	531 (55.0%)	279	673 (50.9%)
s	448		447		107		133	
t	604		842		134		162	
h	83		114		53		91	
p	0		0		6		8	
g	164	486 (12.8%)	229	677 (13.6%)	54	194 (20.1%)	96	277 (21.0%)
z	37		59		68		59	
d	253		315		27		73	
b	32		74		45		49	
ky	0	17 (0.4%)	0	7 (0.1%)	17	64 (6.6%)	14	110 (8.3%)
sy	14		3		31		69	
ty	3		4		12		17	
hy	0		0		4		10	
py	0		0		0		0	

[表(25)のつづき]

子音	固有語				漢字語			
	テキスト1		テキスト2		テキスト1		テキスト2	
	個数	小計	個数	小計	個数	小計	個数	小計
gy	0	6	0	2	1	21	1	33
dy	6	(0.2%)	2	(0.0%)	19	(2.2%)	31	(2.5%)
by	0		0		1		1	
n	625	1607	835	2206	49	140	60	223
m	339	(42.5%)	374	(44.4%)	35	(14.5%)	51	(16.9%)
y	91		87		25		44	
r	385		659		30		46	
w	167		251		1		22	
ny	0	0	0	0	0	16	0	5
my	0	(0.0%)	0	(0.0%)	1	(1.7%)	0	(0.4%)
ry	0		0		15		5	
kw	0	0	0	0	0	0	0	0
gw	0	(0.0%)	0	(0.0%)	0	(0.0%)	0	(0.0%)
総計		3785		4964		966		1321

以上2つの調査結果の比較により、オノマトペにおける子音分布に関して次のような特徴が抽出できる。

- ① 無声阻害音/k, s, t, h, p/はオノマトペでも一般語でも比率が高いけれども、/p/はオノマトペには頻繁に現れるのに対して、一般固有語にはまったく現れず、漢字語でも比率が極めて低い。
- ② 有声阻害音/g, z, d, b/は、一般固有語に比べて出現比率が相対的に高い。
- ③ 拗音類は一般固有語ではほとんど現れないのに対して、オノマトペでは漢字語に準ずる程度に用いられる。
- ④ 鳴音類では、鼻音/n, m/の比率が一般固有語に比べて低いけれども、流音/r/の比率はきわめて高い。

なお、大坪(1989:82)は(14)、(21)、(24)と同じ資料に基づき促音、撥音、長音の分布についても次のように分析している。

(26)

	『擬音語・擬態語辞典』		『現代小説』	
	個数	比率	個数	比率
促音	612	47.3%	567	40.6%
撥音	415	32.1%	562	40.2%
長音	266	20.6%	269	19.2%
計	1293		1398	

これを一般語と比較するため筆者が(22)および(25)と同じ資料で調査したところ、次のような結果を得た。

(27)	固有語				漢字語			
	テキスト1		テキスト2		テキスト1		テキスト2	
	個数	比率	個数	比率	個数	比率	個数	比率
促音	71	29.6%	114	39.0%	34	7.7%	44	6.9%
撥音	75	31.3%	50	17.1%	231	52.1%	321	50.6%
長音	94	39.2%	128	43.8%	178	40.2%	270	42.5%
計	240		292		443		635	

(26)と(27)との比較により、オノマトペでは促音と撥音が固有語よりも比率が高く、長音は相対的に比率が低いことがわかる。撥音は漢字語でも多く用いられているが、促音の比率は極端に低い。したがって、促音が多く用いられることがオノマトペの最も顕著な特徴ということになる。

2.3.2.2.2 韓国語の場合

韓国語のオノマトペにおける子音の分布状況については、野間(1990:29)が(23)の母音の場合と同じ要領で、Fundling(1985)がオノマトペについて行なった調査結果と野間自身が一般語について行なった調査結果とを比較している。

(28)	順位	Fundling				野間			
		音節頭		音節末		音節頭		音節末	
		子音	比率	子音	比率	子音	比率	子音	比率
1	ㄹ /r/	11.31%	ゼロ	34.87%	ゼロ	27.9%	ゼロ	48.2%	
2	ㄱ /k/	10.91%	ㄱ /k/	19.65%	ㄱ /k/	13.6%	ㄴ /n/	16.9%	
3	ㄷ /t/	10.68%	ㄹ /l/	18.67%	ㅅ /s/	9.9%	ㄹ /l/	12.1%	
4	ゼロ	8.79%	ㅇ /ng/	13.89%	ㄷ /t/	8.8%	ㄱ /k/	4.8%	
5	ㅅ /ch/	8.73%	ㄴ /n/	5.01%	ㄴ /n/	8.5%	ㅅㅅ /ss/	3.7%	
6	ㅅ /s/	7.05%	ㅁ /m/	3.95%	ㄹ /r/	7.0%	ㅅ /s/	2.9%	
7	ㅃ /p/	6.62%	ㄷ /t/	3.23%	ㅅ /ch/	5.9%	ㅇ /ng/	2.6%	
8	ㅃㅃ /kk/	5.78%		0.75%	ㅎ /h/	5.5%	ㅁ /m/	1.8%	
9	ㅌ /tt/	3.99%			ㅃ /p/	4.8%			
10	ㅌㅌ /tch/	3.89%			ㅁ /m/	3.3%			

この2つの調査結果の比較から、野間(1990:29)は、オノマトペの音節頭子

音の特徴として、次のようなことが言えるとしている。

- ① 一般語に比べ頭子音ゼロの音節が少ない。
- ② 一般語に比べ「ㄹ」/r,l/が多い。
- ③ 一般語に比べ「ㄴ」/n/, 「ㅅ」/s,sh/, 「ㅎ」/h/が少ない。
- ④ 一般語に比べ濃音が多い。
- ⑤ 一般語同様子音では、「ㄱ」/k,g/が最も多い。

このうち、②と③は上述の日本語のオノマトペと共通する特徴である。

また、野間(1990:30)は、音節末子音については次のような特徴を抽出している。

- ① 一般語に比べ「ㄱ」/k/, 「ㅇ」/ng/が非常に多い。
- ② 一般語に比べ「ㄴ」/n/や「ㄷ」(ㄴ) /l/が少ない。
- ③ 調音点が後ろの音ほど多い。

日本語には音節末子音がないので、比較することはできない。

2.4 形態的特徴

§2.3.1の表(13)と表(18)に示したように、日韓両語のオノマトペには形態的に特徴づけられるパターンを持つものが多い。これらのパターンを、反復形と非反復形とに分けて検討する。

2.4.1 反復形オノマトペ

日韓両語のオノマトペの最も顕著な形態的特徴は、何といたっても反復形式(置語形式)が多用されることである。第1章で述べたように、反復形式は両言語のオノマトペの重要な特徴の1つに数えられている。この反復形式は本論文の主要な論点の1つであるので、これに関する詳細な議論は第3章で行なうこととし、ここでは反復形オノマトペを簡単に分類するにとどめる。

まず、日本語の反復形オノマトペからみることにする。²⁶

- (29) a) 赤毛の子どもは一向にこわがるふうもなくやっぱりちゃんとすわって、じつと黒板を見ています。『風の又三郎』
- b) …まっさきにどふんと淵にとびこみました。『風の又三郎』
- c) …いきなりきものをぬぐとすぐどふんどふんと水に飛びこんで…『風の又三郎』
- d) なにしろこの地は第二次大戦中各国のスパイがウヨウヨたむろしていたところなのである。『航海記』
- e) 何かいやなことがあって、むしゃくしゃした気分を抑えるためにショッピングをする人がいます。『生きる』
- f) 洛陽の紙舂を高からしめる、という佐藤の言いまわしがまたも気に入って古橋はうふふと笑った。『吉里吉里』
- g) そのとき、ずずんという鈍い地響きがし、窓ガラスがびりびりと鳴った。『吉里吉里』

(29a)の「ちゃん」と「じつ」および(29b)の「ぐるっ」は、いずれも非反復形(あるいは単一形)のオノマトペの例である。(29a)の「ちゃん」と「じつ」は繰り返して反復形として用いることができないのに対して、(29b)の「ぐるっ」は(29c)の「ぐるぐる」のように反復形としても使うことができる。このように単一形オノマトペには反復が可能なものと反復不能なものがある。では、反復形オノマトペはすべて「ぐるぐる」のように反復という派生過程を経て造られるかというところではない。(29d)の「がやがや」は必ず反復形で用いられ、対応する単一形を持たない反復形オノマトペである。つまり、反復形オノマトペには「ぐるぐる」のような派生的反復形と「がやがや」のような本来的反復形とがある。また、「ぐるぐる」や「がやがや」が完全に同じ音を繰り返す完全反復形であるのに対して、(29e)の「むしゃくしゃ」は音を一部変えて反復している。つまり前半部「むしゃ」と後半部「くしゃ」の最初の拍が異なる形である。このように前半部と後

²⁶ 本章で引用する用例中の下線はすべて筆者によるものである。

半部で最初の拍が交替するタイプの反復形を類音反復形(あるいは不完全反復形)と呼ぶ。さらに、反復形のもう1つの変種として、(29f)の「うふふ」や(29g)の「ずずん」のように音の一部を繰り返す部分反復形がある。

一方、韓国語の反復形オノマトペも日本語の場合とほとんど同じように分類される。²⁷

- (30) a) 벌써 불그스레한 얼굴로 남 박사가 버럭 고함을 내질렀다. (すでに赤い顔で南博士がわっと声を張り上げた。)『父』
- b) 그것에 대한 두려움보다 우선 문득 느껴지는 죽음의 그림자가 싫었다. (それに対する恐れよりもまずふと感じる死の影が嫌だった。)『父』
- c) 우연히 지나치는 보석상마다에서 정수는 그 진주반지와 목걸이를 아내에게 선사하고픈 욕망을 문득문득 느끼곤 했었다. (偶然宝石屋を通り過ぎる度にチョンスはその真珠の指輪やネックレスを妻に送りたい欲望をふと感じたりした。)『父』
- d) 이렇게 생각하고 부랴부랴 산을 내려왔습니다. (こう思い大急ぎで山を下りて来ました。)『童話』
- e) 그리고는 어묵 국물로 매운 입 속을 달래가며 돼지고기 안주접시를 허겁지겁 비워갔다. (そしておでんのスープで辛い口の中を冷やしながらつまみの豚肉の皿をがつがつと平らげていった。)『父』
- f) 방문이 스르르 열리면서 커다란 구렁이 한 마리가 혀를 날름거리며 들어왔습니다. (ドアがすすつと開くと大きいアオダイショウが一匹舌をべろべろしながら入ってきました。)『童話』

(30a)の「버럭」/pôrôk/(かっ)は反復不能な単一形オノマトペの例である。つまり、「*버럭버럭」のように反復して用いることはできない。一方、(30b)の「문득」/mundûk/(ふと)も単一形式であるが、これは(30c)の「문득문득」/mundûk-mundûk/のように反復形でも用いることができる。(30d)の「부랴부랴」/purya-burya/(大急ぎで、あたふた)は単一形式では決して用いられない本来の反復形式である。(30e)の「허겁지겁」/hôgôp-chiggôp/(がつがつ)は類音反復形の例であり、(30f)の「스르르」/sûrûrû/(すすつと)は部分反復形の例である。

²⁷ 本章の韓国語用例の日本語訳はすべて筆者によるものである。

2.4.2 拡張形オノマトペ

日本語の非反復形のオノマトペに見られるパターンは、①撥音「ん」を含むもの、②促音「っ」を含むもの、③長音を含むもの、④語末に「り」を持つものに大別できる。²⁸

2.4.2.1 撥音「ん」

撥音「ん」を含むパターンの例としては次のようなものがある。

- (31) a) ふん、と佐藤は鼻の先で笑った。『吉里吉里』
 これは街で二百円ばかりで買ったもので、ボンと威勢よく音こそするものの、むろんインチキな品である。『航海記』
 みんなはしんとなっていました。『風の又三郎』
 実力は機動隊よりぐんと上なのに日陰者なので世にもてはやされない…『吉里吉里』
 解説委員は背筋をびんと伸ばした。『吉里吉里』
 三郎もきのういわれた所へちゃんと立っています。『風の又三郎』
- b) ずしん。テレビのスピーカーが割れてしまうかと思うようなすさまじい音がした。『吉里吉里』
どたんと音をたてて、トラキチ東郷の足許に崩れるように仆(たお)れた者がある。『吉里吉里』
 …さいかちの木の下からどぼんと水へはいつてみんなの方へ泳ぎだしました。『風の又三郎』
 佐藤はばちんと指を鳴らした。『吉里吉里』
 これには私もギャフンとなったが…『航海記』
 通された二階のうす暗いがらんとした和室には、白衣に黒い袴の人が坐っていた。『森』
 みんなは集まってきて昨日のとおりきちんとならびました。『風の又三郎』
- c) …いきなりザンブと大波がきたと思ったら、もう私は頭のテッペンからどこからどこまでズブ濡れになっていた。『航海記』

(31a)の「ふん」や「ボン」などは1拍の要素²⁹に撥音「ん」が付いた例であり、

²⁸ 表(13)を参照。

²⁹ ここでいう「要素」とは単純にオノマトペを構成する要素という意味であり、それ自体がオノマトペとして機能するとか、オノマトペ語基であるとかの意味ではない。

(31b)の「ずしん」や「どたん」などは2拍の要素に付いた例である。これらが語末に「ん」を持つ形式であるのに対して、(31c)の「ざんぷ」は語中に「ん」が挿入されている例である。語中に「ん」を持つものは少なく、「ざんぷ」の他に「むんず」や「やんや」がある程度で、いずれも古風なオノマトペである。

撥音「ん」は、拡張という派生過程によって添加される場合と、オノマトペ語基の本質的部分である場合とがある。例えば、(31b)の第4例の「ばちん」には「ばちばち」、「ばちっ」、「ばちり」などの交替形がある。したがって、これらの形はオノマトペ語基【ばち】にそれぞれ撥音「ん」の添加、反復、促音「っ」の添加、「り」の添加などの過程が働いて派生されたものと考えられる。つまり、「ばちん」の「ん」は本来的な要素ではなく派生的に添加された要素である。一方、(31b)の第5例の「ぎゃふん」にはオノマトペ語基【*ぎゃふ】を設定する根拠となるような交替形がない。したがって「ん」は「ぎゃふん」の本質的部分と考えるほかない。³⁰ 一般的に、1拍要素に付く「ん」は本来的な要素である場合が多く、2拍要素に付く「ん」は派生的に添加されていると見なすべきものが多い。

田守・スコウラップ(1999:28)は、撥音「ん」の添加は大半が擬音語に起こるとしている。しかしながら、(31a)の「しん」、「ぐん」、「びん」、「ちゃん」や(31b)の「ギャフン」、「がらん」、「きちん」のように擬態語にも撥音「ん」を持つものが多い。他の例を挙げると次のようなものがある。

(32) a)	かん	がん	こん	ごん	じゃ	とん	どん
	ばん	ばん	ひゅん	びゅん	びゅん	ほん	ほん
	かたん	がたん	かちゃん	がちゃん	くすん	ことん	ごとん
	ごほん	ざぶん	すぼん	ちゃぼん	ちゃりん	ちりん	どかん
	どしん	どすん	どたん	どぶん	どほん	ばしやん	ばたん

³⁰ 「ぎゃふん」に交替形がまったくないというわけではない。「ぎゃっふん」、「ぎゃふーん」、「ぎゃっふーん」のような形が可能である。しかし、これらの形式は語基【ぎゃふん】からの派生形であることを示唆するだけであって、語基【*ぎゃふ】設定の根拠とはならない。

ばたん ばりん ぱりん びしゃん びたん ぶつん ぼちゃん
 ぼちゃん ぼとん

b) じん ずん ちよん つん でん びよん びん
 がくん きよとん くるん ぐるん こくん ごろん しゃん
 しゅん しょぼん ずきん だらん ちくん ちよこん つるん
 ときん とろん どろん びくん ひよこん びよこん ぶらん
 べろん

(32a)は擬音語であり(32b)は擬態語である。擬音語の方が多いようではあるけれども、撥音が特に擬音語に集中しているようには思われない。

2.4.2.2 促音「っ」

促音「っ」を含むオノマトペの例としては次のようなものがある。

- (33) a) 古橋は自分でもかっと頭に血ののぼるのがわかった。『吉里吉里』
 そのうしろから三郎がまるで色のなくなった唇をきっと結んでこっちへ出てきました。『風の又三郎』
 そのときみんなはぎよっとしました。『風の又三郎』
 煙草を吸おうとするとぐっと吐気がやってくる。『航海記』
 東郷老人は古橋をしばらくじっと見つめていた。『吉里吉里』
 亮二は思わず、つっと木戸口を入れてしまいました。『祭の晩』
 文学の花がばっと咲いてやがてそれがしっかりと結実する、その時節がやってきたのだよ。『吉里吉里』
 ときにはピュッと水を噴射してすばやく逃げる。『航海記』
 佐藤はむっとした顔になって外へ出た。『吉里吉里』
- b) すると俄かに監督が戸をガタッとあけて走って入って来ました。『化物丁場』
 その大学士らしい人が、眼鏡をきらっとさせて、こっちを見て話しかけました。『銀河鉄道』
 古橋はまたもやけろっと忘れてくれるにきまっている。『吉里吉里』
 律動的に弧を画(えが)いて数頭ずつスパッと空中にとびあがる。『航海記』
 青年はぞくっとしてからだをふるうようにしました。『銀河鉄道』
 鉄道工夫の人はちらっと私を見てすぐ笑いました。『化物丁場』
 …インディアンはびたっと立ちどまってすばやく弓を空にひきました。『銀河鉄道』
 いきなり又三郎はひらっとそらへ飛びあがりました。『風の又三郎』

- …目の前の原稿用紙を上から十枚ばかり**びりっ**と筆を取る。『吉里吉里』
 土神は何とも云えずさびしくてそれにむしゃくしゃして仕方ないので**ふらっ**と自分の祠(ほこら)を出ました。『土神』
 …短冊型に切った紙が**べたっ**と貼っつけてある。『吉里吉里』
- c) …にわかになその男が、眼を**ぱちぱちっ**として、それから急いで向うを向いて木戸口の方に出ました。『祭の晩』
 空が旗のように**ぱたぱた**光って翻り、火花が**パチパチパチッ**と燃えました。『風の又三郎』
 喋べる言葉に**びりびりっ**と毒がある。『吉里吉里』
 …彼はそれだけで目が廻ってしまったらしく**ふらふらっ**と揺れて気を失った。『吉里吉里』
 …からだを**ぶるぶるっ**として毛をたてて水をふるい落とし…『なめとこ山』
 土神は**むらむらっ**と怒りました。『土神』
 鳥は**びっくり**して**よろよろっ**と落ちそうになり…『土神』
- d) 馬屋のうしろの方で何か戸が**ばたっ**と倒れ、馬は**ぶるるっ**と鼻を鳴らしました。『風の又三郎』
 先生はちらっと運動場じゅうを見まわしてから、「ではならんで。」と云いながら**ブルルッ**と笛を吹きました。『風の又三郎』
- e) …狐はもう土神に挨拶もしないで**さっさ**と戻りはじめました。『土神』
 …すさまじい勢いで万年筆を掴み、**はった**と前を睨む。『吉里吉里』
 …二階の奥まったテーブルに**どっか**と坐り…『航海記』
- f) あっちの隅には顕微鏡こっちにはロンドンタイムス、大理石のシイザアがころがったりまるっきり**ごったごた**です。『土神』

(33a)の「**かっ**」、「**きっ**」、「**ぎよっ**」などは1拍の要素に、(33b)の「**ガタッ**」、「**きらっ**」、「**けろっ**」などは2拍の要素に促音「**っ**」が付いた例である。撥音の場合と同様に、促音も1拍要素に付く場合はオノマトペ語基の本来的部分であることが多く、2拍要素に付く場合は拡張過程により添加された派生的要素である場合が多い。(33c)の「**ぱちぱちっ**」、「**びりびりっ**」などや(33d)の「**ぶるるっ**」、「**ブルルッ**」などは、それぞれ、完全反復形と部分反復形に促音が添加された例である。(33e)の「**さっさ**」、「**はった**」、「**どっか**」は語中に促音を持つ例であるが、語中の撥音に比べると例の数も多く特に古風なものというわけでもない。他に「**かっか**」、「**せっせ**」、「**とっと**」、「**はっし**」などがある。(33f)の「**ごったご**

た」は完全反復形オノマトペ「ごたごた」の前半部に促音が挿入された形式である。これは強調形と考えられるが、このような強調形はすべての反復形オノマトペに可能なわけではなく、結果副詞として機能するものに限られる。他に類例を挙げると次のようなものがある。³¹

- | | | | |
|------------|---------|---------|-------|
| (34) かっちかち | きっちきち | くっちやくちや | くったくた |
| こっちこち | ごっちやごちや | すっかすか | ずったずた |
| ねっちなねちや | びっかびか | びっちびち | ぺっこぺこ |
| へっとへと | べっとべと | ほっかほか | よったよた |
| わっくわく | | | |

語中の促音には他に「あっさり」、「ぼったり」、「ひっそり」のタイプがあるが、これは「り」の添加の項で述べることにする。

2.4.2.3 長音

長音を含むタイプの例としては次のようなものがある。³²

- (35) a) 古橋はぐうぐうと鼾をかいてカメラの前で眠ってしまい…『吉里吉里』
 青く光っていたそらさえ俄かにガランとまっ暗な穴になってその底では赤い焰がどうどう音を立てて燃えると思ったのです。『土神』
 みんなは早くも登りながら息をはあはあしました。『風の又三郎』
 波の音にまじってパイパイという可憐な声が聞えてくる。『航海記』
 …夜ヒュウヒュウという正体のわからぬ妖しき音がしたそうである。『航海記』
 …私は行李とトランク二個をフウフウ言いながら舟に運びこんだ。『航海記』
 たばこばたけからもうもうとあがる湯気の向うで、その家はしいんとして誰も居たようではありませんでした。『風の又三郎』
 マスコミがわあわあぎやあぎやあ騒ぐはずだ。『吉里吉里』
- b) 札は右の人さし指で己れの顔をさしくルクルと輪を描き次に指をパーと開いてみせた。『吉里吉里』

³¹ 促音「っ」は無声障害音の前にはか生じないという分布上の制限があるため、結果副詞として機能するものであっても「つるつる」、「ふらふら」、「くにくにくにや」、「ぎざぎざ」などは、この種の強調形は持たないのが普通である。

³² 日本語における長音の表記はさまざまである。例えば、「しーん」は「しいん」、「しいん」とも表記される。説明においては長音符号の「ー」を用いるが、用例では原典のまま引用した。

そこから淵沢川がいきなり三百尺ぐらいの滝になって、ひのきやいたやのしげみの中をごうと落ちてくる。『なめとこ山』

…遠くで川がざあと流れる音ばかり、俄(にわか)に気味が悪くなることもありました。『化物丁場』

みんなは柳の枝や萱の穂で、しうと云いながら馬を軽く打ちました。『風の又三郎』

そのとき風がどうと吹いてきて教室のガラス戸はみんながたがた鳴り…『風の又三郎』

一郎は風が胸の底までしみ込んだように思って、はあと強く息を吐きました。『風の又三郎』

ジョバンニが胸いっぱい新しい力が湧くようにふうと息をしながら云いました。『風の又三郎』

するとまもなく、ぼおというようなひどい音がして…『風の又三郎』

- c) ザアッとスコールがきて、アツと思ったときはもう回避できなかったですよ。『航海記』

ときどきポオツとかなり大きな青白い光が波間に浮かぶが…『航海記』

そのとき店でラーメンを啜っていた数人の女客がぎゃーと叫んで総立ちになった。『吉里吉里』

上野からずーと先生の隣りに坐っていた子連れの子でしょう。『吉里吉里』

…古橋はここを先途とテレビカメラに向ってにいっと愛想笑いをした。『吉里吉里』

佐藤はふうと脹れて視線をテレビの画面へ戻した。『吉里吉里』

すると夜中になって、そう、二時過ぎですな、ゴーッと云うような音が、夢の中で遠くに聞えたんです。『化物丁場』

そのとき耕助はまた頭からつめたいしずくをざあとかぶりしました。『風の又三郎』

ある死火山のすそ野のかしわの木のかげに、「ベゴ」というあだ名の大きな黒い石が永いことじいと座っていました。『火山弾』

そのときすうと霧がはれかかりました。『銀河鉄道』

ずうと向うの窪みで、一郎の兄さんの声がしました。『風の又三郎』

風が山の方で、ごうと鳴っております。『祭の晩』

…潜りをあけましたら風がつめたい雨の粒と一緒にどうと入って来ました。『風の又三郎』

空はたいへん暗く重くなり、まわりがほうと霞んできました。『風の又三郎』

- d) …しまいには港に着いてエンジンがとまりあたりがシーンとしてしまおうとかえって寝つかれなくなった。『航海記』

豚の頭に拳固ぐらいの石をごーんとぶつけてごらん…『吉里吉里』

…頭の芯がじいんと痺れている。『吉里吉里』

裁判所はどこかにでーんと鎮座しているものなのだ。『吉里吉里』

みんなはしいんとなってしまう。『風の又三郎』

天の川の一とこに大きなまっくらな孔がどおんとあいているのです。『銀河鉄道』

「さあ落とすぞ、一二三。」と云いながら、その白い石をどぶ一んと淵へ落としました。『風の又三郎』

長音は撥音や促音とは分布が異なる。(35a)の「ぐうぐう」、「どうどう」、「はあはあ」のように完全反復形に生じる例は非常に多く自然であるけれども、(35b)の「パー」、「ごう」、「ざあ」のように1拍要素が単純に長音化されている例はまれで多少臨時語的な性格が強い。非反復形では(35c)の「ザアッ」、「ポオッ」などや(35d)の「シーン」、「こーん」などのように、促音「っ」あるいは撥音「ん」を含むオノマトペにおいて、促音や撥音の前で長音化を生じるのが普通である。この他に、用例は見つからなかったが、次のように「り」で終わる語の語中や完全反復形の語頭の音節が長音化する場合もある。

- (36) a) じわーり　するーり　そろーり　とろーり　どろーり
 ふかーり　ふーらり　ふーわり　ゆーらり
 b) がーりがり　のーびのび　ぼーろぼろ

「かー」(カラスの鳴き声)、「がー」(アヒルなどの鳴き声)、「びーちく」、「こけこっこー」など若干のオノマトペの場合を除けば、長音はオノマトペ語基の本来的要素ではなく、拡張過程として添加されるものである。

2.4.2.4 語末の「り」

最後に、語末が「り」で終わるタイプであるが、これには2モーラのオノマトペ語基に「り」だけがついたもの(○□り型)と、語中に促音あるいは撥音を伴うもの(○ッ□り型、○ン□り型)とがある。

- (37) a) そしてこれは五年分ぐらいの笑い溜めをしなければならぬらしいぞと覚悟を決めたが、すぐにぎくりとなって笑うのをやめた。『吉里吉里』
 が、そのとき、壇上の東郷老人がくすりと笑った。『吉里吉里』

そこを掴(つか)まえてグビリとやると、ちょっとした船乗り気分である。『航海記』

言いかけたとき、ヘリコプターがぐらりと大きく揺れた。『吉里吉里』

周囲をぐるりと山と川と沼とで囲まれ…『吉里吉里』

…最悪の場合でも港に着けばケロリと快癒する。『航海記』

小型ながら手に持てばずしりと重く総体黄金造り。『吉里吉里』

船首にもずらりと見張りが立ち…『航海記』

…その名を耳にただけでもゾクリと身の毛のよだちそうな…『吉里吉里』

…両足を大きくひろげ両手を左右にだらりと垂らして眠っている。『吉里吉里』

古橋は横目でちらりとテレビ受像機を見た。『吉里吉里』

いきなり両手を樹からはなして、どたりと落ちてきたのだ。『なめとこ山』

…実にうらめしそうな目つきでばちりと目ばたきをする。『航海記』

…馬が首をのばして舌をべろりと出すときあっと顔いろを変えて…『風の又三郎』

b) …釣りあげたサメの口にうっかり足を踏みいれてしまい…『航海記』

…またあるいはがっくりと首を前に垂れていぎたなく眠り呆けている。『吉里吉里』

そしてあの姉弟はもうつかれてめいめいぐったり席によりかかって睡っていました。『銀河鉄道』

…それから音をたてないように、こっそりこっそりもどりはじめた。『なめとこ山』

彼の額は汗でぐっしょりと濡れていた。『吉里吉里』

一時はジュースしか飲めず、この通りげっそり痩せてしまった。『航海記』

浅く水を張った黒い田圃に、若葉色の苗がしっかりと根づいていた。『吉里吉里』

店の次の間に大きな唐金の火鉢を出して、主人がどっかり座っていた。『なめとこ山』

そして馬がすぐ目の前にのっそりと立っていたのです。『風の又三郎』

少年は大きくはっきりと頷いた。『吉里吉里』

息がつづかなくなるとぱったり倒れたところは三つ森山の麓でした。『土神』

反射鏡をつけて覗くと、奥も奥、一番奥の鼓膜のところにぴったりはりついている。『航海記』

…などと思いながら頁をめくっていると、ひょっこり一万円札が三枚も出てきたりする。『吉里吉里』

…船室に冷房がこないで額にべっとり汗が出、むし暑くて眠れなかった。『航海記』

すると佐太郎はにわかになんか元気になって、むっくり起き上がりました。『風の又三郎』

c) …おばさんは看板を眺めてしばらくうっとりしていた。『吉里吉里』

嘉助はがっかりして、黒い道をまた戻りはじめました。『風の又三郎』

そういう車輛には通路にまでぎっしりと大きなカバンをかかえた連中が立っている。『航海記』

けれども俄(にわ)かにカムパネルラのお父さんがきっぱりいいました。『銀河鉄道』

もうこの時はみんなすっかり気落ちしました。『化物丁場』

ここで少年警官は芝居気たっぷりに声を荒立てて…『吉里吉里』

ハンブルクじゃあちっとも姿が見えぬから、てっきり逃げたと思った。『航海記』

そのでっぷりした係長は、契約という言葉をかめしく何遍も使用した。『航海記』

電話口の向こうで、さすがにビククリしたような声が叫んだ。『航海記』

日曜なので、あれほど各国人のたむろしていた棧橋前の広場までがひっそりしている。『航海記』

タツノオトシゴは身をそらしてゆっくりと浮いてゆき、ゆっくりと沈んでゆく。『航海記』

- d) …少し笑ったようになったままぐんにやりと土神の手の上に首を垂れていたのです。『土神』

五郎はじつに申し訳けないと思って足の痛いのも忘れてしょんぼり肩をすぼめて立ったのです。『風の又三郎』

汽車がフランス国内を走っているときはこの先生はまことにチンマリと静まりかえていた。『航海記』

…元旦一日は漂泊したままのんびりした刻(とき)をすごした。『航海記』

半ばぼんやりした表情で、窓から首をだしてホームを見つめている。『航海記』

- e) ただあんぐりと口を開け、近づいてくるバスとイサム阿部とをかわりばんこに見ているだけだった。『吉里吉里』

しまいには見るだけでうんざりしたが、それでも箸をつければ結構うまい。『航海記』

(37a)の「ぎくり」、「くすり」、「グビリ」などのような○□り型のオノマトペは、すべて2拍のオノマトペ語基に「り」が派生的に添加されたものであると考えられる。それぞれ次のような交替形を持つからである。

- (38) ぎくり ⇔ ぎくっ、ぎくん
 くすり ⇔ くすくす、くすっ
 ぐびり ⇔ ぐびぐび、ぐびっ
 ぐらり ⇔ ぐらぐら、ぐらっ、ぐらん
 ぐるり ⇔ ぐるぐる、ぐるっ、ぐるん
 けろり ⇔ けろっ

ずしり ⇔ ずしっ、ずしん
 ずらり ⇔ ずらずら、ずらっ
 そくり ⇔ そくそく、そくっ、そくん
 だらり ⇔ だらだら、だらっ、だらん
 ちらり ⇔ ちらちら、ちらっ
 どたり ⇔ どたどた、どたっ、どたん
 ばちり ⇔ ばちばち、ばちっ、ばちん
 べろり ⇔ べろべろ、べろっ、べろん

○ッ□り型のうち(37b)の「うっかり」、「がっかり」、「ぐったり」などのようなものは、次のような交替形を持つため、促音「っ」も「り」も共に派生的に添加されたものであると考えられる。

(39) うっかり ⇔ うかうか、うかっ
 がっかり ⇔ がくっ、がくん
 ぐったり ⇔ ぐたぐた、ぐたっ、ぐたん
 こっそり ⇔ こそこそ、こそっ
 ぐっしょり ⇔ ぐしょぐしょ、ぐしょっ
 げっそり ⇔ げそっ
 しっかり ⇔ しか、しっか
 どっかり ⇔ どかっ
 のっそり ⇔ のそのそ、のそっ
 はっきり ⇔ はきはき
 ばったり ⇔ ばたばた、ばたっ、ばたん
 びったり ⇔ びたびた、びたっ
 ひよっこり ⇔ ひよこひよこ、ひよこっ、ひよこん
 べっとり ⇔ べとべと、べとっ
 むっくり ⇔ むくむく、むくっ

しかしながら、(37c)の「うっとり」、「がっかり」などにはそのような交替形がないので、促音も「り」も共に本来の要素であると見なされる。³³ 本来の○ッ□り型のオノマトペには他に次のようなものがある。

³³ (37c)の例のうち「うっとり」、「ビックリ」、「ひっそり」にはそれぞれ「うとうと」、「ビクビク」、「ひそひそ」のような交替形があるように思われるけれども、これらは程度の差はあるが互いに意味が異なり交替形とは認めがたいため(37b)の類には分類しなかった。

- (40) あっさり おっとり かつきり がっぶり くつきり ぐっすり
 さっぱり しっくり じっくり そっくり ちゃっかり とっぶり
 どっぶり のっぺり ぼっくり みっちり ゆったり

○ン□り型も派生的なものと同来的なものに分けられる。(37d)の「ぐんにやり」、「しょんぼり」などの例には次のような交替形がある。したがって、これらのオノマトペでは語中の撥音も語末の「り」も共に派生的に添加されたものと考えられる。

- (41) ぐんにやり ⇔ ぐにゃぐにゃ、ぐにゃっ
 しょんぼり ⇔ しょぼん
 ちんまり ⇔ ちまちま
 のんびり ⇔ のびのび
 ぼんやり ⇔ ぼやぼや、ぼやっ

一方、(37e)の「あんぐり」と「うんざり」はそのような交替形を持たないため、撥音も語末の「り」も共に本来の要素である。このような本来の○ン□り型のオノマトペには他に次のようなものがある。³⁴

- (42) げんなり こんがり こんもり しんみり ずんぐり
 すんなり どんより にんまり ほんのり まんじり

2.4.3 韓国語の場合

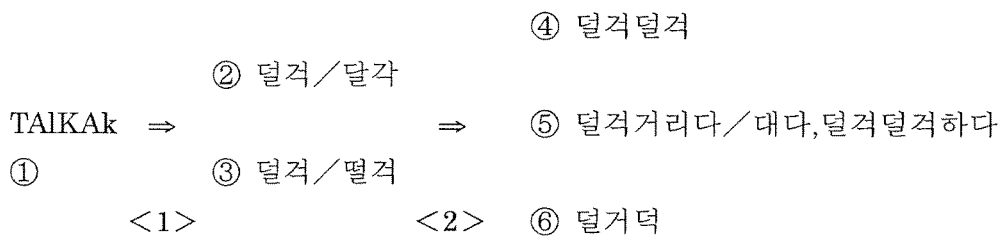
韓国語のオノマトペにおいては、反復形を除いて日本語の場合のように明確なパターンと見なせるような特徴的な形式は存在しないと考える方が妥当なようである。表(18)で韓国語のオノマトペの「パターン区分」をしたが、1音節語と単一形2音節語の区分は音節末子音が何であるかによって区分したものに過ぎず、

³⁴ 「しんみり」と「ほんのり」に対してはそれぞれ意味的に似ていると思われる「しみじみ」と「ほのほの」があるけれども、これらはオノマトペにはみられない連濁を生じていることや動詞との共起制約が異なることから、「しんみり」と「ほんのり」の交替形とは見なさないことにした。

上に見た日本語のパタンとは性格を異にするものである。しかしながら、パタンという観点からではなくオノマトペの交替形を関連付ける派生過程という観点から考えると、韓国語にも日本語の場合と同様、反復以外の派生過程がある。

李文圭(イ・ムンギョ)(1996:23)は韓国語のオノマトペが生成される過程を次のように整理した。

(43)



<1>…母音と子音の交替によって象徴語の語感が分化する過程

② 母音交替によって語感の異なる象徴語が形成される過程

③ 子音交替によって語感の異なる象徴語が形成される過程

<2>…象徴語の単純形を入力とする過程

④ 象徴語全体が反復され畳用形が形成される過程

⑤ 象徴用言が派生される過程

⑥ 「形態拡張」によって新しい象徴語が作られる過程

(43)は①の「固い物がぶつかり合う音」を意味するオノマトペ語基【TAlKak】から様々な交替形や派生形が生成される過程を図示したものである。②によって語基の母音/A/が「ㄷ」/d/と「ㄷ」/a/とに分化して語幹の異なる2つの交替形「덜거」/tôlgôk/「がたっ、ごとっ」と「달각」/talgak/「かたっ、ことっ」ができる。過程③は、語基の子音/T/と/K/をそれぞれ平音の「ㄷ」/t/、「ㄷ」/tt/と濃音の「ㄱ」/k/、「ㄱ」/kk/とに分化させることにより、新たに交替形「떨거」/ttôlgôk/「がたっ、ごとっ」と「떨각」/ttalgak/「かたっ、ことっ」を生成する。②と③により生成された単純交替形がそれぞれ過程④、⑤、⑥の入力となって、派生形が作られる。

④は単純形を反復することにより完全反復形「덜걱덜걱」/tôlgôk-tôlgôk/「がたがた、ごとごと」、「달각달각」/talgak-talgak/「かたかた、ことこと」などを派生する過程である。⑤は「거리다」、「대다」、「하다」などの動詞派性語尾の添加により「덜걱거리다」/tôlgôk-kôrida/「がたがたする」、「덜걱대다」/tôlgôk-tæda/「がたがたする」、「덜걱덜걱하다」/tôlgôk-tôlgôk-hada/「がたがたする」などの動詞を作る過程である。最後の⑥がここで問題にしている拡張過程で、「덜걱」/tôlgôk/に「-더-」/-tô-/を挿入することにより「덜걱덕」/tôlgôdôk/「がたっ、ごとっ」を派生する。派生過程には要素の挿入の他に要素を添加する場合もある。また、李文圭は部分反復形の生成も拡張過程の1種であると見なしている。

形態拡張という派生過程について李文圭(1996:99-100)は次のような場合を取り上げている。³⁵

- (44) a) 가르르 /kkarûrû/ > 가르르르 /kkarûrû-rû/ (きゃっきゃっ)
 꼬르르 /kkorûrû/ > 꼬르르르 /kkorûrû-rû/ ((腹が)ぐうぐう)
- b) 둥 /tung/ > 두둥 /tu-du-ng/ ((太鼓・琴の音)どん)
 따릉 /ttarûng/ > 따르릉 /ttarû-rû-ng/ (りんりん)
- c) 와당탕 /wadangt'ang/ > 와다당탕 /wada-da-ngt'ang/ (がたん)
 와장창 /wajangch'ang/ > 와자장창 /waja-ja-ngch'ang/ (がちゃん)
- d) 가랑 /karang/ > 가르랑 /ka-rû-rang/ (からんからん)
 드렁 /tûrông/ > 드르렁 /tû-rû-rông/ (ぐうぐう)
- e) 꼴깍 /kkolkkak/ > 꼴까닥 /kkolkka-da-k/ (ごくり)
 덜컹 /tôlk'ôk/ > 덜커덕 /tôlk'ô-dô-k/ (がたん)
- f) 간들 /kandûl/ > 간드락 /kandûl-ak/ (ゆらゆら)
 간들 /kandûl/ > 간드랑 /kandûl-ang/ (ゆらゆら)
 주물 /chumul/ > 주무럭 /chumul-ôk/ (もみもみ)
 쭈글 /tchukûl/ > 쭈그렁 /tchugûl-ông/ (しわくちゃ)
- g) 꾸불 /kkubul/ > 꾸불텅 /kkubul-t'ông/ (くねくね)
 미끈 /mikkûn/ > 미끈덕 /mikkûn-tôk/ (つるつる)

³⁵ 説明の都合上、例の分類・配列を変更した。

떠듬 /ttôdûm/	> 떠듬적 /ttôdûm-jôk/ (手探りするさま)
어물 /ômul/	> 어물적 /ômul-tchôk/ (もたもた)
h) 꼬깃 /kkogit/	> 꼬기작 /kkogi-jak/ (しわくちゃ)
꾸붓 /kkubut/	> 꾸부정 /kkubu-jông/ (ぐんにやり)
배틀 /pæt'ûl/	> 배트작 /pæt'û-jak/ (よろよろ)
흐늘 /hûnûl/	> 흐느적 /hûnû-jûk/ (ゆらゆら)

(44a)は部分反復形式の例で、語末の1音節「르」/rû/が反復されている。(44b)と(44c)も部分反復の例であるが、語頭あるいは語中に反復が生じる場合である。(44d)と(44e)は語中に音が挿入される場合である。(44f)以下は語末に音が添加される場合であるが、(44b)では音の脱落も同時に生じている。

2.5 統語機能

次の用例が示すように、オノマトペは文中において様々な機能を果たす。

- (45) a) 言いかけたとき、ヘリコプターがぐらりと大きく揺れた。『吉里吉里』
 出港間際まで戻ってこなかったが、もちろんちやんと許可は得ておいたのである。『航海記』
 テストの間、古橋はたらたらと汗を流すだけでなにひとつまじなことを言うことができなかった。『吉里吉里』
 それでも肉片はピクピク動いているし、心臓はひとりで長いことモコモコと脈打っている。『航海記』
 …手術台はぶるぶる震え、ドアはひっきりなしにカタカタ鳴っている。『航海記』
 日がカンカン照りつける下で平気で眠っている。『航海記』
 遂に彼女は決心したらしくツカツカとやってきて、ここに坐ってもよいかと訊いた。『航海記』
 煙草を吸おうとするとぐっと吐気がやってくる。『航海記』
 …四方の風景を映したシャボン玉がくるくると回ってパツと散ると…『航海記』
 そうして、向こうに着いたらスタコラ逃げちまうんだ。『航海記』
 三郎がだまって、やっぱりきつと口を結んでうなずきました。『風の又三郎』
 …早くも三郎はどてをぐるっとまわって、どンドン正門を入れて来ると、「お早よう。」とはつきりいいました。『風の又三郎』
 土神はいかにも嬉しそうににやにやにやにや笑って寝そべったままそれを見ていましたが間もなく木樵がすっかり逆上(のぼ)せて疲れてばたつと水の中に倒れてしまいますと、ゆっくりと立ち上がりました。『土神』
 黒い海上を暗い船がゆったりと上下しながらなかなか堂々と進んでいる。『航海

記』

- b) 先生の鋭い質問の矢、という佐藤の表現が気に入って古橋は思わずにやりとした。『吉里吉里』

古橋はむっとして、「一ノ関」とだけ答えた。『吉里吉里』

薄まっているので大したことはないが、それでも目がチクチクする。『航海記』

嘉助はがっかりして、黒い道をまた戻りはじめました。『風の又三郎』

二時すぎごろ、ウトウトしていた私は、けたたましい物音で目が覚めた。『航海記』

しまいには見るだけでうんざりしたが、それでも箸をつければ結構うまい。『航海記』

忽ち彼はずんぐりした体軀をゆすぶって笑いだす。『航海記』

翌日新宿をぶらつき、はじめてノンビリした気分になり、映画を見たりパチンコをやったりした。『航海記』

日曜なので、あれほど各国人のたむろしていた棧橋前の広場までがひっそりしている。『航海記』

さっきまで小雨がばらついていたのが嘘のようないい日和になっていた。『吉里吉里』

女の顔はムリとしても、せめて酒びんの幻影でもちらつかぬものかと思ったのだが、完全に徒労に終わった。『航海記』

結局は手足を一握動かすにもおどつき、ひとこと喋べるのにもびくついてしまうのである。『吉里吉里』

…急に風がでてきて船はピッチングを開始し、船体がみしみしきしるような航海が二日ほどつづいた。『航海記』

- c) 彼はなかなかの好人物でね…『吉里吉里』

あまりといえばあまりきんきらきんのこの成金ぶりに古橋は驚き呆れて声も出ない。『吉里吉里』

従ってこんなものは早く溶かしてしまっ、もっと巨大な小便小僧を鑄造し、ガチガチの婦人教師を颯(ひんしゆく)させた方がどれほどマシかわからない。『航海記』

寒くなればごわごわの作業ズボンにトックリ首のセーターである。『航海記』

ネクタイはよれよれで服は垢じみ…『航海記』

すると受話器の向うから、きびきびした声でこう名乗るのが聞えてきた。『吉里吉里』

ここまでくる汽車は埃だらけの上にガタガタでかなり参ったという。『航海記』

今でさえ俺はもうカンカンだぞ。『航海記』

- d) …ピオラ女王とやらは縞のアッパッパみたいなものを着こんだオカミさんである。『航海記』

その画面の外でNHKのアナウンサーがおろおろ声で騒ぎたてている。『吉里吉里』

このぶんではいざ実物を見るときにはボンボン蒸気くらいに縮小してしまいそ

うである。『航海記』

- e) 蓋を親指で押し上げれば『パシャ』、点火すれば『シュパ』、蓋を閉じれば『パチ』といちいち音が極(き)まるのだ。『吉里吉里』

「アハハハハ。アハハハハハ。」稜(かど)のある石は、みんな一度に笑いました。『火山弾』

どたんと音をたてて、トラキチ東郷の足許に崩れるように仆(たお)れた者がある。『吉里吉里』

洛陽の紙価を高からしめる、という佐藤の言いまわしがまたも気に入って古橋はうふふと笑った。『吉里吉里』

そのとき、ずずんという鈍い地響きがし、窓ガラスがびりびりと鳴った。『吉里吉里』

ふん、と佐藤は鼻の先で笑った。『吉里吉里』

ザアッとスコールがきて、アツと思ったときはもう回避できなかったですよ。『航海記』

遠くの方の林はまるで海が荒れているように、ごんごんと鳴ったり、ざつと聞こえたりするのです。『風の又三郎』

- f) それで歌いっふりのいい文士の先生はもう朝まで帰さないっていう仕掛けになっておましてね。エヘ。『吉里吉里』

それから秋、悪戯(わるさ)をして、栗を十個ばかり煙突へ投げ込んだことがある。パン、パン、パバン、凄(こわ)い音がした。『吉里吉里』

ずしん。テレビのスピーカーが割れてしまうかと思うようなすさまじい音がした。『吉里吉里』

ばさり。そのとき、隣で寝ていた生徒の顔から化学の参考書が……古橋の顔の横に落ちた。『吉里吉里』

…ところがそうなってもエンジンの奴ゴトゴトゴト一向にとまらないんだね。『航海記』

アハハハハハ、ランプはあかしのうちだい。『風の又三郎』

気がついてみると、さっきから、ごとごとごとと、ジョバンニの乗っている小さな列車が走りつづけていたのです。『銀河鉄道』

お空。お空。お空のちちは、／つめたい雨の ザアザザ、／かしのしずく トンテントン、／まっしろきりのポッシェン。／お空。お空。お空のひかり
／おてんとさまは、カンカンカン、／月のあかりは、ツンツンツン、／ほしのひかりの、ピッカリコ。『火山弾』

(45a)の「ぐらりと」、「ちゃんと」、「たらたらと」、「ピクピク」などは副詞として用いられている例であり、これがオノマトペの最も基本的な用法である。(45b)と(45c)は、それぞれ、「-する」、「-つく」、「-めく」、「-だ」などの適切な派生接尾辞を付けることによって動詞および形容動詞として用いられてい

る例である。オノマトペはまた、(45d)のように単独であるいは他の要素と結びついて名詞として機能することもある。³⁶ 以上が品詞別に見た日本語のオノマトペの用法である。文中における機能の観点から見ると、(45e)のようにオノマトペが引用形として用いられる場合がある。この用法は擬声語・擬音語に限られる。引用されたオノマトペは、最初の2例のように引用符の中に入れて表記されることもあるが、多くの場合、(45e)の残りの例のように引用符なしでただ引用の助詞「と」だけを伴って表記される。その場合、表記上は副詞的用法と区別がつかないけれども、これらは引用符を用いて表わすこともできるという理由で引用的用法と見なすことにする。例えば、第3例の「どたん」と音をたてて」と第4例の「古橋はうふふと笑った」は、それぞれ、「どたん」と音をたてて」や「古橋は「うふふ」と笑った」のように表記することも可能である。最後に、(45f)は、オノマトペが間投詞のように言わば独立的に用いられている例である。引用形として機能しているか独立成分として機能しているかはっきりと区別しがたい場合もある。

韓国語のオノマトペの用法も日本語の場合とほぼ同様に分類される。

- (46) a) 남 박사의 눈빛이 안타까움으로 바르르 떨렸다. (ナム博士の目が気の毒さでわなわなと震えた。)『父』
 비가 부슬부슬 내리는데 전혀 앞이 안 보였다. (雨がしとしと降るのに全く前が見えなかった。)『山に花が』
 생각이 떠오른다고 해서 불쑥 말해 버리면 안에서 여무는 것이 없다. (思居着いたからといってすぐ口に出してしまうと内で実るものがない。)『山に花が』
 그렇기 때문에 마음에 없는 일도 저지르게 되고 불쑥불쑥 어떤 충동에 우리가 휘말리게 되는 것이다. (そのために心にもないことをしてかすことにもなり、ついついある衝動に我々が巻き込まれることになるのである。)『山に花が』
홀끗 돌아본 신부가 빙그레 웃었다. (ちらっと振り向いた神父がにつこりと笑った。)『父』
 지금쯤 고기가 많이 달린 모양인데 슬슬 잡아당겨볼까? (今頃魚がたくさんかか

³⁶ (45d)の最初の用例の「アッパッパ」は女性が夏に着るゆったりした服を表わす言葉であるが、名詞としてしか用いられない。ゆったりした感じを表わすためにオノマトペ的に「アッパッパ」という名がつけられたと思われる。

ったようだが, そろそろ引っ張って見ようか。)『童話』

아이들이 서당에서 우르르 몰려 나왔습니다. (子供達が寺小屋からわあと出て来ました。)『童話』

단지 내가 해준 거라곤 가뭄에 물 좀 주었고 김 좀 매주었을 뿐인데 이렇게 많은 열매가 주렁주렁 매달린 것이다. (ただ私がしてやったことはといえば日照りにちよっと水をやり草を取ってやっただけなのに, こんなにたくさんの実がふさふさと実ったのである。)『山に花が』

- b) 큰아들은 너무도 놀라 가슴이 두근두근해서 말에게로 다가가 보았습니다. (長男はあまりにも驚いて胸がどきどきして馬に近づいて行って見ました。)『童話』

정수는 웬지 가슴 철렁했고 주위의 눈치까지 살폈다. (チョンスはなぜかどきとして周りの視線まで気にした。)『父』

정수가 비틀거리는 걸음으로 과일가게를 향해 앞장섰다. (チョンスがふらつく足取りで果物屋に向かって歩き出した。)『父』

정수는 다시 노래를 홍얼거리며 휘청거리는 발길을 내딛기 시작했다. (チョンスは再び歌をふんふんと鼻歌を歌いながらふらつく足取りで歩き始めた。)『父』

남 박사가 말없이 고개를 끄덕었다. (ナム博士が何にも言わず頷いた。)『父』

다시 멍하니 시선을 돌리던 그의 눈빛이 반짝었다. (再びぼんやり視線を巡らせた彼の目がきらりと光った。)『父』

“조금 전 우리 영감이 어떤 놈의 총에 맞아 죽어가는데 얼른 감자를 캐가지고 가 영감에게 먹여야 하네.” 몹시 허둥대었습니다. (「少し前私の夫があるやつ銃に撃たれて死んでいくので早くジャガイモを掘って持って行って夫に食べさせなければならぬ。」と非常に慌てました。)『童話』

- c) 남 박사는 이제 한 사람을 영원히 보내기 위한 본격적인 준비가 시작되는구나 하는 생각이 들었다. 허탈하고 답답했다. (ナム博士は今一人を永遠に送るための本格的な準備が始まるんだと思った。虚しくて息苦しかった。)『父』

차라리 그렇기라도 했으면 얼마나 땃땃할까. (いっそそうであれば, どんなに深いだらうか。)『父』

그녀와 다시 한번 이 푹푹한 아침을 싱그럽게 채색하고 싶었다. (彼女ともう一度この清々しい朝を色付けたかった。)『父』

…따스한 품속에서 훈훈한 사람의 냄새를 맡으며 환한 아침 한번 맛을 수 없는 서글픈 인생이 가여워서인가. (…暖かい胸の中でほかほかとした人間の匂いを嗅ぎながら明るい朝を一度迎えられない悲しい人生が不憫だからなのか。)『父』

- d) 찰칵 찰칵 하는 깜박이 소리가 엔진 소리에 섞여 들려오기 시작했다. (カチャカチャという非常灯の音がエンジンの音に混じって聞こえ始めた。)『手紙』

사내는 어색한 비유를 하고서도 아무렇지 않게 기분 좋은 너털웃음을 터뜨렸다. (男はまずい比喩をしてから何でもなかったようにうれしそうな高笑いをこぼした。)『父』

성권의 차가 커브길을 앞에 두고 깜박이등을 밝히는 것을 보며 환유는 집으로 뛰어 들어갔다. (ソンゴンの車がカーブの前で非常灯をつけるのをみてファニユは家に急いで入った。)『手紙』

제가 그 깜짝쇼의 주인공이라면 얼마나 신나겠습니까? (私がそのびっくりショーの主人公であればどんなに楽しいことでしょう。)『手紙』

e) ‘깨깅깨깅’ 강아지가 소스라치게 놀라며 달아나자 바보는 쓴살같이 강아지 뒤를 쫓아갔습니다. (『キャンキャン』小犬がびくっとして逃げると、バカは矢のように小犬の後を追いかけていきました。)『童話』

바위는 데굴데굴 굴러내려가 산 밑에 있는 어느 집을 ‘짱’ 하고 들이 받으니 그 집의 한귀통이가 ‘와르르’ 무너졌습니다. (岩はごろごろ転んで行き山の下にある、ある家に「どん」とぶつかりその家の片隅が「がらがら」と崩れました。)『童話』

머느리도 일어나서 손을 움직이는 바람에 ‘둥둥둥둥’ 하는 북소리가 났습니다. (嫁も起き上がって手を動かしたせいで「どんどんどんどん」という太鼓の音がしました。)『童話』

“딱!” 하고 큰 소리가 나자 부자는 ‘이제 도깨비들이 도망을 치겠지.’ 하고 마당을 엿보고 있었습니다. (『ぼきっ』と大きい音がすると、金持ちは「もう鬼達が逃げるだろう。」と庭をうかがっていました。)『童話』

정중하게 머리를 조아리고 상주에게 절을 하다가 그만 방귀를 ‘뽕’ 끼고 말았습니다. (丁寧に頭を下げて喪主に挨拶をする途中オナラを「ぷう」としてしまいました。)『童話』

아기는 아앙아앙 하고 계속 울어댔습니다. (赤ちゃんはあんあんと泣き続けました。)『童話』

어호호 하는 호랑이의 울음 소리가 들려왔습니다. (ウオーという虎の鳴き声が聞こえて来ました。)『童話』

그때 하늘에서 요란한 천둥과 번개가 우르릉 황 하고 쳤습니다. (その時空でけたたましい雷鳴がごろごろと鳴りました。)『童話』

방금까지도 사람이었던 것이 갑자기 호랑이로 변하면서, ‘우호호, 우호’ 하고 신음 소리를 내며 쓰러졌습니다. (さっきまで人間だったのが突然虎に変わって「ウオーウオー」とうめき声を上げて倒れました。)『童話』

황, 하는 지원의 방문 닫는 소리와 함께 영신의 입에서도 차가운 비난이 터져나왔다. (どんというチウオンの部屋のドアを閉める音とともにヨンシンの口からも冷たい非難がほとばしり出た。)『父』

가을이 되자 제비들은 ‘지지배배 지지배배’ 하면서 다투어 강남으로 날아갑니다. (秋になるとツバメは「ピーチクパーチク」と鳴きながら先を争って飛んで行きました。)『童話』

그 문도 ‘뻐거덕’ 하고 힘없이 열렸습니다. (そのドアも「きいっ」と力なく開きました。)『童話』

f) 그렇게는 얼마나 사는 거야? 한...50년? 후후후... (そうやればどれくらい生きるのか? 約... 50年? ふふふ...) 『父』

핑, 그녀의 눈가에 눈물이 고였다. (じんと、彼女の目に涙が溜まった。) 『父』

챌, 그럼 밥통 몽땅 드러내고 링거로만 버텨야겠구먼. (ちえっ、じゃ、胃袋全部取り出して点滴だけで耐えなければならないな。) 『父』

휘청, 영신이 흔들렸다. (ふらっと、ヨンシンが揺れた。) 『父』

히히히, 뜻대로 잘 되어가는구나. (ヒヒヒ、思い通りになるな。) 『童話』

쉬! 아가야 뚝 그쳐라. (しーっ、坊や、泣くな。) 『童話』

홍, 그건 거짓이야. (ふん、それはうそだ。) 『父』

문을 탁 닫고 들어가면서, “참 못난 놈이 얹치도 좋지. 아하하하, 저놈 꿀 줘봐라.” (ドアをぱたんと閉めて入りながら、「本当に悪い奴がずうずうしい。ははは、ざまあ

見ろ。』)『童話』

(46a)の「부슬부슬」/pusûl-busûl/(しとしと)、「주렁주렁」/churông-jurông/(ふさふさ)、「불쑥」/pulssuk/(すぐ)などは副詞として用いられているオノマトペの例である。オノマトペが副詞的に用いられる場合、後述のように副詞語尾を伴なう場合もあるが、³⁷ (46a)に挙げた例のように基本形そのままの形で用いるのが普通である。これが、副詞的用法をオノマトペの基本的用法であると見なす根拠の1つである。(46b)の「두근두근해서」/tugûndugûn-hæsô/(ときどきして)、「비틀거리는데」/pit'ûl-gôrinûn/(ふらつく)、「끄덕였다」/kkûdôg-yôtta/(頷いた)、「허둥대었습니다」/hôdung-dæyôssmnida/(慌てました)などは動詞として用いられるオノマトペの例であり、(46c)の「뽀뽀할까」/ttôttôt'alkka/(潔いだろうか)、「妥妥한」/p'up'ut'an/(清々しい)などは形容詞として用いられた例である。いずれの場合も日本語と同様適切な派生接尾辞を付ける必要がある。(46d)のように名詞あるいは名詞の一部としてオノマトペが用いられることもある。韓国語ではオノマトペがそのままの形で名詞的に用いられることは少ない。(46d)の最初の用例の「반짝이」/pancchagi/(非常灯)は、オノマトペの「반짝」/pancchak/(きら、ぴか)に名詞形成語尾の「-이」/i/を付けた形である。第2例の「반짝이등」/pancchagi-dûng/(非常灯)はその「반짝이」と「등」/tûng/(灯)の結合による複合名詞である。文中における機能の観点から見ても、日本語のオノマトペと同様、(46e)のように引用形として用いられることも、(46f)のように独立的に用いられることもある。

以上のように日韓両語のオノマトペは、用法に関してほとんど同様に区分される。以下、副詞的用法、用言的用法(動詞・形容詞)、名詞的用法の3つの品詞別用法に関して、日韓両語のオノマトペを詳しく比較対照し検討することに

³⁷ §2.5.1を参照。

する。

2.5.1 副詞的用法

韓国語においても日本語においてもオノマトベの最も基本的な用法は副詞としての用法である。まず韓国語から述べると、韓国語ではオノマトベは単一形や反復形をそのままの形で、あるいは副詞接尾辞などと結合して副詞としての機能を果たす。

(47) a) 정말 아무런 이유 없이 핑핑 울고 싶을 때가 있다. (本当に何の理由もなくわんわん泣きたい時がある。)『父』

남 박사는 아무런 대꾸도 없이 주섬주섬 책상 위를 정리하고 있었다. (南博士は何の返事もせず一つ一つ机の上を片づけていた。)『父』

안주를 굽다 힐끔 돌아본 주인이 어이없는 눈빛으로 다시 소주병을 가져왔다. (酒のつまみを焼きながらちらっと振り向いた主人が啞然とした顔で再び焼酎を持ってきた。)『父』

정수는 높아지고 짜증스러운 자신의 음성에 스스로 윤절 놀랐다. (チョンスは高くいらついている自分の声にびくりと驚いた。)『父』

밥을 안치고 찌개를 준비하는 간간이 정인은 이불을 푹 뒤집어 쓰고 침대에 누운 환유를 힐끔 거렸다. (ご飯を炊いてチゲを用意する間々チョンインはふとんをすっほりかぶってベッドに横たわったファニユをちらちら見た。)『手紙』

멀리 이국으로 홀쩍 떠난다고 했다. (遠く異国へふらっと旅立つという。)『手紙』

다른 학생들 또한 이 상황이 재미있는지 생글생글 웃으며 정인의 얼굴을 뻔히 쳐다보고만 있었다. (ほかの学生達もこの状況が面白いのかにこにこ笑いながらチョンインの顔をじーっと見ていた。)『手紙』

저 멀리 기차가 가물가물 꼬리를 흔들며 달려가고 있는 것이 보였다. (遠く汽車がゆらゆらと走っていくのが見えた。)『手紙』

b) 아슬아슬하게 춤을 추던 화분은 정인의 오른손에 간신히 매달려 있었다. (はらはらさせるように宙を舞っていた花鉢はチョンインの右手にかろうじて収まっていた。)『手紙』

짜릿하게 밀려오는 아픔으로 남 박사는 절로 콧등이 시큰했다. (じいんとして押し寄せてくる痛みで南博士はおのずと目頭が熱くなった。)『父』

거기에는 이정인이라는 이름과 전화번호가 반듯하게 적혀 있었다. (そのにはイ・チョンインという名前と電話番号がきちんと書いてあった。)『手紙』

정말 어마어마하게 큰 호랑이군! (本当にものすごく大きい虎だなあ!)『童話』

c) 정인은 들고 있던 화분과 책을 벤치 위에 사뿐히 내려 놓았다. (チョンインは持っていた花鉢と本をベンチの上にそっと置いた。)『手紙』

이거 톡톡히 한턱 내야 되는 것 아녜요? (たっぷり一席設けなければいけないんじ

ゃない。)『手紙』

환유는 아무런 표정도 없이 두눈만 멀뚱히 뜬 채 침대에 누워 있었다. (ファニユは無表情にきよとんと目を開けたままベットに横たわっていた。)『手紙』

잔잔히 흐르는 입가의 미소가 행복함인듯도, 서글픔인듯도 하였다. (穏やかにこぼれる口元の微笑みが幸せのようでもあり、悲しみのもようでもあった。)『父』

정수의 눈가엔 이슬방울이 촉촉히 젖어 있었다. (チョンスの目は涙でしっとりとし濡れていた。)『父』

정인이 가져온 도시락 보자기를 풀고 뚜껑을 열자 까만 김밥이 사각의 도시락에 츄츄히 박혀 있었다. (チョンインが持ってきたお弁当のふたを開けると黒いのり巻きご飯が四角のお弁当箱にぎっしり入っていた。)『手紙』

- d) 1톤 트럭을 타고 온 가구점 직원은 내던지듯 마당에다 등나무 의자를 부러 놓고는 황하니 가버렸다. (1トントラックに乗ってきた家具店の職員は放り出すように庭に藤椅子をおろしてさっと行ってしまった。)『手紙』

멍하니 누운 채 사방을 둘러보던 그가 별떡 일어나 창문 쪽 벽에 등을 기대고 앉았다. (ぼーっと横になったまま四方を見回していた彼はかばっと起きて窓側の壁に背をもたせかけて座った。)『父』

정인은 불에 덴 듯 훅하니 고개를 돌려 역무원을 쳐다보았다. (チョンインは火に当たったようにくると首を回して駅員を見上げた。)『手紙』

밤색 빨데 안경이 노인네들의 돋보기 안경처럼 코끝까지 내려와 삐딱하니 걸려 있었다. (茶色の縁の眼鏡が老眼鏡のように鼻の先まで落ちて傾いてかかっていた。)『手紙』

소리나게 수화기를 내려 놓은 정인은 쌩하니 환유 옆을 지나 도서관 쪽으로 걸어가 버렸다. (音を立てて受話機を置いたチョンインはすうっとファニユの横を通り過ぎて図書館の方へ歩いて行ってしまった。)『手紙』

- e) 환유가 라면을 먹는 틈틈이 바닥에 놓인 패중시계를 이리저리 만졌다. (ファニユがラーメンを食べる合間に合間に床に置かれた懐中時計のあちこちをさわった。)『手紙』
그 위에 파란 잉크의 만년필로 쓴 지원의 예쁜 글씨가 뻐곡이 들어차 있었다. (その上に青いインクの万年筆で書いたチュウォンのかわいい字がぎっしりと埋められていた。)『父』

뻐뻐이 글씨를 담은 그 종이는 개찰구 옆 플랫폼과 선로를 가르는 철책 위에 걸려 있었다. (ぎっしり字が書かれたその紙は改札口の横のプラットホームと線路を分ける鉄柵の上にかけられていた。)『手紙』

그 중 문 쪽으로 가장 가까운 좌석에 앉아 있던 남학생 한 명이 꽃꽂이 서서 정인을 노려보고 있었다. (その中から一番ドアに近い席に座っていた男子学生の一人がまっすぐに立ってチョンインをにらみつけていた。)『手紙』

어둠 속에서 간간이 바람에 쓸린 물결이 찰랑이는 소리가 들려왔다. (闇の中から時々風に吹かれて立った波がばしゃんと打つ音が聞こえてきた。)『手紙』

당신이 그 노래처럼, 그렇게, 꽃꽂이 살아가기를 바래. (あなたがその歌のように、そのように、屈せずに生きていくことを望んでいる。)『手紙』

- f) 그리고 날카로운 기타소리의 잔영이 그를 거의 신새벽까지 뒤척이게 했다. (そして鋭いギターの音の残影が彼にはほ明け方まで寝返りをうたせた。)『父』
마지막 가는 길, 단 몇 분이라도 고통으로 혈떡이게 할 수는 없었다. (最後に

行く道、ただの何分かでも痛みではあはあ言わせるわけにはいかなかった。)『父』

(47a)は、オノマトペが副詞派生接辞などを一切添加することなくそのままの形で副詞として用いられている例である。これがオノマトペを副詞として用いるとき圧倒的に多い形式である。(47b)と(47c)はオノマトペを語幹とする「하다形容詞」の副詞形「~하게」/hage/と「~히」/hi/の例である。(47d)と(47e)はそれぞれ副詞を派生する接辞「-니」/ni/と「-이」/i/による副詞的オノマトペの例である。そして(47f)は「-이다/ida/型」動詞の副詞形「~이게」/ige/の例である。

副詞的用法が韓国語のオノマトペの基本的用法であるとする根拠は2つある。1つは形態的な理由である。上に述べたように、オノマトペを用言的に用いる場合には必ず何らかの派生接辞を付けなければならないのに対して、副詞的に用いる場合には何の変化も加える必要がなくそのままの形を用いるのが普通である。第2の根拠は、オノマトペが副詞として用いられることが圧倒的に多いという事実である。例えば、박용수(パク・ヨンス)編(1989)『우리말 갈래사전 (韓国語分類辞典)』の副詞語の項目には848語が収められているのに対して、³⁸ 擬声語・擬態語は3863語も収録されており、その大部分は副詞として用いられるものである。つまり、韓国語の副詞語彙の大部分がオノマトペであるということになる。

実際の使用頻度の調査としては、徐尚揆(ソ・サンギョ)(1993:81)が現代韓国語の資料³⁹から総数5726語のオノマトペを拾い出し、用法別の分布状況を調査している。その結果は次の通りである。

³⁸ ただし、そのうち純粋な副詞は200語程度にすぎない。

³⁹ 資料としたテキストは小説23篇、放送手記2篇、ドラマ台本・シナリオ4篇、その他14篇であったという。

(48)

用 法	用 例 の 数	比 率
副詞	3135	54.75%
叙述的な使い方	72	1.26%
形容詞	948	16.56%
「-하다」	(854)	(14.91%)
「-아하다」	(12)	(0.21%)
「-엿다」	(68)	(1.91%)
「-스럽다」	(14)	(0.24%)
「-게」副詞	85	1.48%
「-니」副詞	28	0.49%
自動詞	908	15.86%
「-거리다」	(455)	(7.95%)
「-이다」	(221)	(3.86%)
「-하다」	(131)	(2.29%)
「-대다」	(87)	(1.52%)
「-매다」	(12)	(0.21%)
「-지다」	(2)	(0.03%)
他動詞	279	4.87%
「-이다」	(134)	(2.34%)
「-거리다」	(109)	(1.90%)
「-하다」	(30)	(0.52%)
「-대다」	(6)	(0.10%)
用言の語幹	212	3.70%
動詞	(156)	(2.72%)
形容詞	(43)	(0.75%)
「-지다」	(13)	(0.23%)
名詞	60	1.05%
合 計	5726	100.00%

この結果によれば、過半数の場合においてオノマトペが副詞的に用いられているのであるから、副詞的用法がオノマトペの基本用法であると判断してもよいであろう。

筆者も지선옥(チ・ソンオク)編『韓国伝来童話上・下』を資料として、副詞的用法の比率を簡単に調査してみた。その結果、収集したオノマトペの用例879例のうち、実に77.47%に当たる681例が副詞的用法であった。徐尚揆(ソ・サンギョ) (1993)の調査結果よりも高い比率である。

次に、日本語においてオノマトペが副詞的に用いられる場合を検討してみよう。

- (49) a) そしてまるでなんと云ったらいいかわからない変な気持ちがして歯をきりきり云わせました。『風の又三郎』
 …カムパネルラは、円い板のようになった地図を、しきりにぐるぐるまわして見ていました。『銀河鉄道』
 みんなは悦んでパチパチ手を叩きました。『雪渡り』
 一郎が顔をまっかにして、汗をぼとぼとおとしながら、その坂をのぼりますと、にわかにはぱつとあかるくなって、眼がちくつとしました。『どんぐりと山猫』
 やはりもじもじ立ち上がったままやはり答えができませんでした。『銀河鉄道』
- b) 樺の木は何だか少し困ったように思いながらそれでも青い葉をきらきらと動かして土神の来る方を向きました。『土神』
 …いきなりきものをぬぐとすぐどぶんどぶんと水に飛びこんで両足をおかわるがわるまげて、だあんだあんと水をたたくようにしながらななめにならんで向こう岸へ泳ぎはじめました。『風の又三郎』
 …うつくしい燐光をあげて、ちらちらと燃えるように見えたのもわかりました。『銀河鉄道』
 そこを小十郎がまるで自分の座敷の中を歩いているという風で、ゆっくりのっしのっしとやって行く。『なめとこ山』
 見えない天の川の水もそのときはゆらゆらと青い焰のように波をあげるのでした。『銀河鉄道』
- c) その葉はぐるぐるに縮れ葉の下にはもう美しい緑いろの大きなほうが赤い毛を吐いて真珠のような実もちらっと見えたのでした。『銀河鉄道』
 その代り憎しみをこめてズタズタに切り裂き、海に捨ててしまう。『航海記』
 甲板はつるつるに凍りつき、索具にはまっ白に霜がおりている。『航海記』
 …道端にペコペコに凹(くぼ)んだ埃(ほこり)だらけのシトロエンがずらりと並んでいるので…『航海記』
 太い根や枝までついた、ぼりぼりに折られた太い薪でした。『祭の晩』

(49a)はオノマトペがそのままの形で用いられる場合であり、韓国語の場合と同様、やはりこれが副詞的用法の基本形式である。(49b)と(49c)は、それぞれ、助詞の「と」そして「に」を伴って用いられる場合である。

助詞の「と」は、擬声語・擬音語に付く場合には(45e)のように引用形を導く助詞として解釈できるが、擬態語に付く場合にはそのような解釈はできない。「と」は随意的に伴う場合と義務的に伴う場合とがある。一方、「に」は結果副詞として機能するオノマトペに付くが、これは形容動詞「～だ」の連用形が副詞的に用いられたものと考えることができる。日本語のオノマトペが副詞として機能す

る場合の助詞との共起関係に関して田守・スコウラップ(1999:64)は次のような一般論が成り立つとしている。

- ① 助詞「と」を随意的に伴うオノマトペは2モーラ反復形である。
- ② 通常助詞を伴わないオノマトペは2モーラ反復形のオノマトペのうち、頻度副詞として機能するものと程度副詞として機能するものは「と」を伴わないのが普通である。
- ③ 「と」を伴った方が好ましいオノマトペは「り」ないし撥音の反復形をもつ場合である。
- ④ 「と」を義務的に伴うオノマトペは様態副詞として機能する場合である。
- ⑤ 「に」を義務的に伴うオノマトペは2モーラ反復形のオノマトペが結果副詞として機能する場合である。

日本語のオノマトペについては韓国語の(48)に相当するような機能別使用頻度に関する調査報告が得られなかったので、筆者自信が宮沢賢治の童話7編⁴⁰を資料として簡単に調査をしてみた。その結果は次の通りである。

(50)

用 法	用 例 の 数	比 率
副 詞	586	73.9%
用 言	148	18.7%
~(と)する	(69)	(8.7%)
~(と)している	(48)	(6.1%)
~(と)なる	(8)	(1.0%)
~させる	(6)	(0.8%)
~だ	(15)	(1.9%)
~い	(2)	(0.3%)
名 詞	5	0.6%
引 用	41	5.2%
独立用法	13	1.6%
合 計	793	100.0%

この結果から、日本語においても韓国語の場合と同等あるいはそれ以上に、オノマトペは副詞的に用いられるのが基本的用法であると判断してよいであろう

⁴⁰ 『銀河鉄道の夜』、『注文の多い料理店』、『なめとこ山の熊』、『土神ときつね』、『風の又三郎』、『どんぐりと山猫』、『雪渡り』

う。

2.5.2 用言的用法

日韓両語のオノマトペが用言(動詞、形容詞など)として用いられる場合、オノマトペの語幹あるいは語基に何らかの用言形成語尾を付けなければならない。このようにオノマトペの用言形は必ず派生的に作られるという点からだけでも、日韓両語のオノマトペにとって用言としての用法は二次的な用法に過ぎないことがわかる。

2.5.2.1 日本語の用言オノマトペ

日本語の用言には、動詞、形容詞、形容動詞の3種があるが、用言オノマトペもその3種にわたっている。

- (51) a) 茶褐色の街の多いなかで、ほっとするような緑のなかに落ち着いたただずまいを見せる由緒ある街でした。『生きる』
 あれやこれやで呆として突っ立っていると、禿おやじがにこにこしながらまたいった。『吉里吉里』
 ふたりは飛鳥山の花見客でざわめきはじめている大通りをぬけ、裏のたんぼ道へでた。『森』
 それから、私とコストロ氏は石油ランプのともる露店街をぶらつき…『航海記』
- b) その紙片はもうずいぶんクシャクシャで…『航海記』
 この三日間でクタクタの上に少し酔っぱらっている私には感慨なんて起りようがなかった。『航海記』

(51a)は動詞として機能するオノマトペ、(51b)は形容動詞として機能するオノマトペの例である。実際の用例は見つからなかったが、後述のようにオノマトペが形容詞として用いられることもある。

2.5.2.1.1 動詞

オノマトペ動詞を派生する語尾として最も一般的で生産性の高いのは「(と)する」であり、次のようにほとんどすべてのタイプの擬態語に付くことができる。

- (52) a) そのときみんなはぎよっとしました。『風の又三郎』
 …デッキに出ると身を切る寒風でじっとしてられない。『航海記』
 ハッとして目ざめると、もう何杯食ったのか、食べたのか食べないのかもわからなくなってしまう。『航海記』
 ひよっとしたら自分は悪い夢を見ているのかも知れないと思ったからだ。『吉里吉里』
 茶褐色の街の多いなかで、ほっとするような緑のなかに落ち着いたただずまいを見せる由緒ある街でした。『生きる』
 私も同時にむっとした表情をしたが、これはむろん笑いをこらえるためであった。『航海記』
- b) …そのしんとした朝の教室のなかにどこからきたのか…『風の又三郎』
 壁際につんとして突っ立ち…『航海記』
- c) 毎日天気でカラッとして却って風は冷たいし、朝などは霜が雪のようでした。『化物丁場』
 ジョバンニはそっちを見てまるでぎくっとしてしまいました。『銀河鉄道』
 …びっくりして我に返ったと思えば俄かに頭がぐらっとしました。『土神』
 …すきっとした金いろの円光をいただいて、しずかに永久に立っているのです。『銀河鉄道』
 青年はぞくっとしてからだをふるうようにしました。『銀河鉄道』
 ほんとうに土神は樺の木のことを考えるとなぜか胸がどきっとするのでした。『土神』
 佐太郎はびくっとしましたけれども、まだいっしんに水を見ていました。『風の又三郎』
 なんだかお日さんぼやっとしてきたな。『風の又三郎』
- d) 波止場近くのガレージみたいにならんとした居酒屋では…『航海記』
 こんなととのったのは、はじめて見たぜ。あの帯の、きちんとしていることね。『火山弾』
 一郎は俄かにぼかんとしてしまいました。『風の又三郎』
- e) …外国婦人めいた大股でさっそうと歩くのが、背筋のまっすぐなすらりとした長身にいっそ似合って…『森』
 古橋が訊くと少年警官はにやりとし…『吉里吉里』

- f) …おばさんは看板を眺めてしばらくうっとりしていた。『吉里吉里』
 …私は少なからずガッカリした。『航海記』
 下手袖からひとりの少年が登場し、しっかりと足どりで東郷老人の方へ歩み寄った。『吉里吉里』
 そのでっふりした係長は、契約という言葉をかめしく何遍も使用した。『航海記』
 …はじめはどうしてもそれが、はっきりしませんでした。『銀河鉄道』
 電話口の向こうで、さすがにビックリしたような声が叫んだ。『航海記』
 八月十五日、空はきらきらと晴れあがり、盛夏という言葉がびったりする暑い日であった。『青春記』
 …指が塩っぽく、特有のねっとりした感じになる。『航海記』
 アナウンサーは姿勢を元に戻すと、ゆっくりした歩調で移動をはじめた。『吉里吉里』
 入港手続きで忙しかった船内がひっそりとしたのはもう夜半の一時半ころであったが…『航海記』
- g) …うんざりした様子で欠伸をしているアナウンサーに…『吉里吉里』
 その涙(なみだ)は雨のように狐に降り狐はいよいよ首をぐんにやりとうすら笑ったようになって死んでいたのです。『土神』
 忽ち彼はずんぐりした体軀をゆすぶって笑いだす。『航海記』
 …元旦日は漂泊したままのんびりした刻(とき)をすごした。『航海記』
 半ばぼんやりした表情で、窓から首をだしてホームを見つめている。『航海記』
- h) ジョバンニはまるでたまらないほどいらいらしながらそれでも堅く唇を噛んでこらえて窓の外を見ていました。『銀河鉄道』
 二時すぎごろ、ウトウトしていた私は、けたたましい物音で目が覚めた。『航海記』
 …例の入国者収容所の前でうろうろしているところへあのイサム安部って少年警官が出てきたんですよ。『吉里吉里』
 赤ひげの人が、少しおずおずしながら、二人に訊きました。『銀河鉄道』
 すると受話器の向うから、きびきびした声でこう名乗るのが聞えてきた。『吉里吉里』
 毎日毎日ぐうたらぐうたらしていてもよくも飽きないものだわね…『吉里吉里』
 学生時代、ラグビーで鍛えたという佐藤のごつごつした広い肩へ古橋は顎をしゃくって…『吉里吉里』
 天気がよくて雪がきらきらしてました。『化物丁場』
 汽車の中がまるでざわざわしました。『銀河鉄道』
 路が林の中に入り、しばらく路はじめじめして、あたりは見えなくなりました。『風の又三郎』
 薄まっているので大したことはないが、それでも目がチクチクする。『航海記』
 ジョバンニは、まるでどきどきして、頭をやけに振りました。『銀河鉄道』
 あれやこれやで呆として突っ立っていると、禿おやじがにこにこしながらまた

いった。『吉里吉里』

カメラは蝸牛が這うくらいの、のろのろした動きで平沢教授に寄って行く。『吉里吉里』

あまり猛烈にまわすので、腸でも破けやしないかとこっちはヒヤヒヤする。『航海記』

馴れないうちは加根は吐きそうにむかむかした。『森』

すると三郎はすっかり顔を赤くしてしばらくもじもじしていましたが…『風の又三郎』

ところがその強い足なみもいつかよろよろしてしまい…『土神』

これから遠足に出かけようとしている子どもたちよろしくなかわくわくするような表情を浮かべ…『吉里吉里』

見るとそこらいちめん、きらきらきらきらする栗の実でした。『祭の晩』

ジョバンニはわくわくわくわくして足がふるえました。『銀河鉄道』

…にわかにその男が、眼をばちばちとして、それから急いで向うを向いて木戸口の方に出ました。『祭の晩』

i) 覚悟はきまっている。いまさらじたばたはしない。『吉里吉里』

ちやほやもしない代り、親切でもなく、つかず、離れずで、しかも気まずいおもいもさせないのは…『森』

…寒い戸外に客を求める女たちの姿もちらほらする。『航海記』

ジョバンニはもうどぎまぎしてまっ赤になってしまいました。『銀河鉄道』

何かいやなことがあって、むしゃくしゃした気分を抑えるためにショッピングをする人がいます。『生きる』

(52a)の「ぎよっとする」、「じっとする」、「はっとする」などは「○っ」型のオノマトペに「と」が付いて動詞化された例である。この場合「と」は義務的である。このタイプのオノマトペ動詞の例は少なく、上掲例の他は「かっとする」、「すっとする」、「にっとする」、「ばっとする」がある程度である。

(52b)の「しんとする」と「つんとする」は「○ん」型のオノマトペが動詞化された例で、この場合にも「と」は義務的である。他の例としては、「きゅんとする」、「しゃんとする」、「しゅんとする」、「じんとする」、「でんとする」、「びんとする」などがある。

(52c)の「からっとする」、「ぎくっとする」、「ぐらっとする」などは「○□っ」型のオノマトペに「と」が付いた例で、この場合にも「と」は義務的である。

例はかなり多く、上掲例の他に次のようなものがある。

- | | | | | |
|------|--------|---------|---------|--------|
| (53) | うかつとする | がくつとする | きちつとする | きらつとする |
| | ぎらつとする | けろつとする | くらつとする | さらつとする |
| | ざらつとする | しゃきつとする | しゃりつとする | すかつとする |
| | ずきつとする | だらつとする | でれつとする | どきつとする |
| | どしつとする | どてつとする | とろつとする | どろつとする |
| | ぬるつとする | ぱりつとする | ぱりつとする | ぴかつとする |
| | びくつとする | びちつとする | ひやつとする | ぴりつとする |
| | ぶすつとする | ふらつとする | ぼけつとする | ぼさつとする |
| | ほろつとする | むすつとする | もさつとする | もやつとする |
| | ゆらつとする | よろつとする | | |

(52d)の「がらんとする」、「きちんとする」、「ぼかんとする」は「○□ん」型のオノマトペが動詞化された例で、これも「と」は義務的である。このタイプのオノマトペ動詞の例はそれほど多くなく、上例の他に次のようなものがある。

- | | | | | |
|------|---------|---------|--------|--------|
| (54) | がくんとする | きよとんとする | こくんとする | ごろんとする |
| | しょぼんとする | たらんとする | だらんとする | ちゃんとする |
| | つるんとする | とろんとする | どろんとする | ぺたんとする |

(52e)の「すらりとする」と「にやりとする」は「○□り」型のオノマトペの動詞化の例で、やはり「と」は義務的である。例はそれほど多くなく、上例の他に次のようなものがあるに過ぎない。

- | | | | | |
|------|--------|--------|--------|--------|
| (55) | からりとする | きらりとする | ぐらりとする | さらりとする |
| | だらりとする | ぶらりとする | べこりとする | |

(52f)の「うっとりする」、「がっかりする」、「しっかりする」は「○っ□り」型のオノマトペを語幹とする動詞の例である。(52a)から(52e)までの例に「と」が義務的に付けられるのに対して、このタイプのオノマトペ動詞の場合には「と」が概ね随意的である、つまり、付けても付けなくてもよいという場合がほとん

どである。(52f)に挙げた例の中では、最後の例の「ひっそりとする」だけに「と」が添加されているけれども、最初の2例の「がっかりする」と「びっくりする」で「と」が添加できないことを除いて、あとの例については「と」が随意的に添加可能である。⁴¹ このタイプのオノマトペ動詞の例としては他に次のようなものがある。

- | | | | |
|------|-----------|-----------|-----------|
| (56) | あっさり(と)する | うっかりする | おっとり(と)する |
| | がっかり(と)する | ぐったり(と)する | げっそり(と)する |
| | こっくり(と)する | さっぱり(と)する | しっくり(と)する |
| | しっとり(と)する | しっぽり(と)する | すっきり(と)する |
| | ずっしり(と)する | ちゃっかりする | のっぺり(と)する |
| | ほっそり(と)する | むっちり(と)する | むつつり(と)する |
| | ゆったり(と)する | | |

(52g)の「うんざりする」、「ぐんにやりする」などは「〇ん□り」型のオノマトペを語幹とする動詞の例である。この型の場合には「と」はすべて随意的である。このタイプには他に次のようなものがある。

- | | | | |
|------|------------|-----------|-----------|
| (57) | げんなり(と)する | こんがり(と)する | こんもり(と)する |
| | しょんぼり(と)する | しんみり(と)する | どんより(と)する |
| | にんまり(と)する | ひんやり(と)する | ふんわり(と)する |

動詞派生接辞「-(と)する」が最も頻繁に結び付くのは(52h)の「いらいらする」、「ウトウトする」、「うろうろする」などのように完全反復形のオノマトペの場合である。このタイプの例の数は非常に多く、ア行とカ行で始まるものだけでも他に次のようなものを挙げるができる。

- (58) いそいそする いじいじする いちゃいちゃする うかうかする

⁴¹ 「と」の義務性/随意性に関する判断は、基本的にはオノマトペ辞典の用例や記述に基づいて行ない、それでも不明な場合については母語話者の判断を参考にした。

どである。(52f)に挙げた例の中では、最後の例の「ひっそりとする」だけに「と」が添加されているけれども、最初の2例の「がっかりする」と「びっくりする」で「と」が添加できないことを除いて、あとの例については「と」が随意的に添加可能である。⁴¹ このタイプのオノマトペ動詞の例としては他に次のようなものがある。

(56)	あっさり(と)する	うっかりする	おっとり(と)する
	がっかり(と)する	ぐったり(と)する	げっそり(と)する
	こっくり(と)する	さっぱり(と)する	しっくり(と)する
	しっとり(と)する	しっぽり(と)する	すっきり(と)する
	ずっしり(と)する	ちゃっかりする	のっぺり(と)する
	ほっそり(と)する	むっちり(と)する	むつつり(と)する
	ゆったり(と)する		

(52g)の「うんざりする」、「ぐんにやりする」などは「〇ん□り」型のオノマトペを語幹とする動詞の例である。この型の場合には「と」はすべて随意的である。このタイプには他に次のようなものがある。

(57)	げんなり(と)する	こんがり(と)する	こんもり(と)する
	しょんぼり(と)する	しんみり(と)する	どんより(と)する
	にんまり(と)する	ひんやり(と)する	ふんわり(と)する

動詞派生接辞「-(と)する」が最も頻繁に結び付くのは(52h)の「いらいらする」、「ウトウトする」、「うろうろする」などのように完全反復形のオノマトペの場合である。このタイプの例の数は非常に多く、ア行とカ行で始まるものだけでも他に次のようなものを挙げることができる。

(58)	いそいそする	いじいじする	いちゃいちゃする	うかうかする
------	--------	--------	----------	--------

⁴¹ 「と」の義務性/随意性に関する判断は、基本的にはオノマトペ辞典の用例や記述に基づいて行ない、それでも不明な場合については母語話者の判断を参考にした。

うきうきする	うじうじする	うじゃうじゃ	するうずうずする
うつらうつらする	うねうねする	うろうろする	えへらえへらする
おたおたする	おどおどする	おろおろする	がくがくする
がつがつする	かりかりする	がんがんする	ぎすぎすする
ぎとぎとする	ぎすぎすする	きよときよとする	きよろきよろする
きらきらする	きりきりする	くさくさする	ぐずぐずする
ぐにゃぐにゃする	くねくねする	くよくよする	くらくらする
ぐらぐらする	くんくんする	ごしごしする	こせこせする
こそこそする	ごそごそする	ごたごたする	ごちゃごちゃする
こりこりする	ごろごろする	など多数	

「と」はこのタイプのオノマトペの場合には添加されないのが普通であるけれども、絶対に付けられないというのではなく、付けても付けなくてもかまわない随意的な場合が多い、というのが母語話者の判断であった。(52h)の最後の例「ばちばちっとする」のように、反復形にさらに拡張過程により促音「っ」が添加された場合には義務的に「と」が添加される。

最後に、(52i)のように類音反復形のオノマトペにも「-(と)する」が付いて動詞が形成される。この場合も「と」は添加しないのが普通であるが、場合によっては添加されることもあるようである。他の例としては次のようなものがある。

- (59) あたふたする うろちよろする ぎくしゃくする ちぐはぐする、
 どたばたする ぬらりくらりする のらくらする のらりくらりする、
 へどもどする やきもきする

以上に見たように、「-(と)する」は非常に生産的な派生語尾でどのようなタイプのオノマトペにも付くことができる。しかしながら、生産性が高いといってもすべてのオノマトペに付けられるわけではない。擬声語・擬音語の場合、「-(と)する」が付けられる(60a)のような反復形に限られ、(60b)のような非反復形には付けられない。しかし、(60c)のように反復形の擬声語・擬音語で「-(と)する」が付けられないものも多い。また、(60d)のように擬態語であっても「-(と)

する」を付けられないものもかなりある。

- (60) a) かさかさ がさがさ かたかた がたがた かちやかちや
 がちゃがちゃ がやがや ごそごそ ざわざわ どんどん
- b) あーん うおーん うわーん かーん がーん
 うっ かしゅっ がっ がぶっ ぐーすか
- c) うんうん かーかー がーがー がぶがぶ ぎこぎこ
 きゃーきゃー ぎゃーぎゃー きゃっきゃっ きゃんきゃん ぐーぐー
 くすくす けたけた けらけら げらげら けろけろ
 ごーごー ごくごく こっこっ こっとんこっとん
 ごによごによ ごほんごほん など
- d) あんぐり うっすら がっぶり がっぼがっぼ がっぼり
 がば がみがみ ぎっしり ぎっちり ぎっちり
 きっぱり ぎゅっ ぐいぐい くだくだ ぐっ
 ぐっしより ぐっすり くだくだ ぐびりぐびり くりくり
 ぐんぐん ぐん けちよんけちよん こっそり
 ごっそり こてんこてん ころっ ころり こんこん
 など

「-(と)する」ばかりでなく、次のように「-(と)させる」や「-となる/-になる」などの語尾もオノマトペの動詞化に用いられる。

- (61) a) 山下蕭雨はそのほうの入口に近づいて馬蹄型のノッカーをがたがたさせた。
 『森』
 ユーイチ小松はすっかり舞い上がってしまい、軀を慄わせ、膝をがくがくさせているのだった。『吉里吉里』
 カムパネルラは、そのきれいな砂を一つまみ、掌にひろげ、指できしきしさせながら、夢のようにいっているのです。『銀河鉄道』
 その大学士らしい人が、眼鏡をきらっとさせて、こっちを見て話しかけました。『銀河鉄道』
 嘉助は胸をどきどきさせました。『風の又三郎』
 …困ったことにそのポーランド人はドイツ語をちっとも知らず、徒に口をもぐもぐさせるだけである。『航海記』
 三郎は少し目をパチパチさせて気の毒そうにいました。『風の又三郎』
- b) …なにしろこの町は海にむかった丘の斜面にあるため、少なからずへトへトになってきた。『航海記』
 だけどすぐ俗語だってペラペラになった。『航海記』

- c) そしてこれは五年分ぐらの笑い溜めをしなければならないらしいぞと覚悟を決めたが、すぐにぎくりとなって笑うのをやめた。『吉里吉里』

これには私もギャフンとなったが…『航海記』

さあみんなはだんだんしいんとなって、まるで堅くなってしまいました。『風の又三郎』

みんなはおじぎをする間はちよっとしんとなりましたが…『風の又三郎』

「-(と)する」の添加が可能なオノマトペであればすべて、意味的な不都合がない限り、(61a)の「がたがたさせる」、「がくがくさせる」、「きしきしさせる」などのように「-(と)させる」を付けて使役の意味のオノマトペ動詞を派生することができる。(61b)の「へとへとになる」のように「-になる」を付けて動詞化できるオノマトペは、普通、結果副詞として機能する完全反復形のオノマトペである。しかし、「ペラペラ(とよくしゃべる)」のような様態副詞にも上例のように「-になる」がつくこともある。その他のオノマトペの場合は(61c)のように「-となる」が付く。「-になる」型の動詞には他に次のようなものがある。

(62)	かさかさになる	がたがたになる	かちかちになる
	がらがらになる	がりがりになる	かんかんになる
	ぎざぎざになる	きちきちになる	くしゃくしゃになる
	ぐちゃぐちゃになる	ぐでんぐでんになる	ぐにゃぐにゃになる
	ぐらぐらになる	ごちゃごちゃになる	ごわごわになる
	さらさらになる	すかすかになる	すべすべになる
	だぶだぶになる	つやつやになる	つるつるになる
	どろどろになる	ぬるぬるになる	ねばねばになる
	ばさばさになる	ばりばりになる	びかびかになる
	びしょびしょになる	びりびりになる	ふかふかになる
	ぶくぶくになる	ぶつぶつになる	ふにゃふにゃになる
	ぶよぶよになる	ふわふわになる	ぺこぺこになる
	べたべたになる	べちゃべちゃになる	へとへとになる
	ぼーぼーになる	ぼさぼさになる	めろめろになる
	よぼよぼになる	よれよれになる	れろれろになる

オノマトペから動詞を派生する語尾としては、その他に「-つく」、「-めく」、

「-ける」などがある。いずれも使用がかなり限定されている。

- (63) a) 結局は手足を一糶動かすにもおどつき、ひとこと喋べるのにもびくついてしまうのである。『吉里吉里』
 女の顔はムリとしても、せめて酒びんの幻影でもちらつかぬものかと思ったのだが、完全に徒労に終わった。『航海記』
 …お祭の御馳走にばくつくようなさもしい真似はしないようにと…『森』
 さっきまで小雨がばらついていたのが嘘のようないい日和になっていた。『吉里吉里』
 それから、私とコストロ氏は石油ランプのともる露店街をぶらつき…『航海記』
- b) ふたりは飛鳥山の花見客でざわめきはじめている大通りをぬけ、裏のたんぼ道へでた。『森』
- c) メカジキのトロなどは女の腿よりも白いとろけるような脂肪で…『航海記』

(63a)の「ちらつく」、「ばくつく」、「ばらつく」などの「-つく」は比較的用例の多い語尾であるが、2拍反復形のオノマトペの語基に付けられる。「ちらつく」、「ばくつく」、「ばらつく」は、それぞれ、2拍反復形のオノマトペの「ちらちら」、「ばくばく」、「ばらばら」の語基【ちら】、【ばく】、【ばら】に「-つく」が付いたものであると考えられる。このタイプのオノマトペ動詞には他に次のようなものがある。

- | | | |
|------------------|--------------|----------------|
| (64) いらつく(くいらいら) | うろつく(くうろうろ) | がさつく(くがさがさ) |
| がたつく(くがたがた) | がつつく(くががつがつ) | がちゃつく(くがちゃがちゃ) |
| ぎくつく(くぎくぎく) | ぎらつく(くぎらぎら) | ぎろつく(くぎろぎろ) |
| ぐずつく(くぐずぐず) | ぐらつく(くぐらぐら) | こそつく(くこそこそ) |
| ごそつく(くごそごそ) | こせつく(くこせこせ) | ごたつく(くごたごた) |
| ごてつく(くごてごて) | ざらつく(くざらざら) | じとつく(くじとじと) |
| じめつく(くじめじめ) | だぶつく(くだぶだぶ) | ちらつく(くちらちら) |
| てかつく(くてかてか) | にやつく(くにやにや) | ねとつく(くねとねと) |
| ねばつく(くねばねば) | ばくつく(くばくばく) | ばさつく(くばさばさ) |
| ばさつく(くばさばさ) | ばたつく(くばたばた) | ばらつく(くばらばら) |
| ばりつく(くばりばり) | ひくつく(くひくひく) | ひよろつく(くひよろひよろ) |
| ひりつく(くひりひり) | ふらつく(くふらふら) | ぶらつく(くぶらぶら) |
| べとつく(くべとべと) | まごつく(くまごまご) | むかつく(くむかむか) |

もたつく(くもたもた)

田守・スコウラップ(1999:57)によれば、こうした「-つく」型の用言オノマトペには共通の意味的特徴があるという。すなわち、何らかの意味で否定的な(マイナスの)意味を持つという共通性がある。(63a)と(64)の例のうちこの共通性への例外は「ちらつく」と「ばらつく」ぐらいであろう。

(63b)と(63c)の接尾辞「-めく」と「-ける」も、「-つく」と同様2拍反復形オノマトペの語基に付いて派生動詞を造るが、使用は「-つく」に比べるとずっと限られている。上掲例以外には次のようなものがある。

- (65) a) きしめく(くきしきし) きらめく(くきらきら) ざらめく(くざらざら)
 ざわめく(くざわざわ) そよめく(くそよそよ) はためく(くはたはた)
 ひらめく(くひらひら) ゆらめく(くゆらゆら) よろめく(くよろよろ)
- b) いじける(くいじいじ) だらける(くだらだら) とろける(くとろとろ)
 にやける(くにやにや) ばらける(くばらばら) よろける(くよろよろ)

「-めく」には「-つく」の場合のような否定的なニュアンスはないようである。「どよめく」や「ひしめく」もこの類であると感じられるが、対応する適当なオノマトペがない。前者については「どやどや」が候補であるが、「どよめく」と対応させていいかどうかははっきりしない。また、「ひしひし」というオノマトペはあるけれども、「ひしめく」とは意味がかなり異なる。「わめく」や「うめく」は「わいわい／わーわー」、「うんうん」から派生した可能性があるけれども断定できない。

「-ける」には否定的な意味合いがあるように思われる。「ふやける」と「のろける」もこの類のように思われるが、対応する適当なオノマトペがない。

その他、特定のオノマトペと対応しオノマトペ動詞と思われる語には、次のようなものがある。これらの動詞については、オノマトペから動詞が派生して

いるのか、動詞からオノマトペが造られたのか、派生の方向が明確でないものが多い。

- | | | | |
|---------|--------------|-------------|---------------|
| (66) a) | あきる (⇔あきあき) | うねる (⇔うねうね) | くねる (⇔くねくね) |
| | けちる (⇔けちけち) | しぶる (⇔しぶしぶ) | じれる (⇔じりじり) |
| | すける (⇔すけすけ) | すべる (⇔すべすべ) | すれる (⇔するする?) |
| | ずれる (⇔ずるずる) | たれる (⇔たらたら) | ちくる (⇔ちくちく) |
| | ぬめる (⇔ぬめぬめ) | ねばる (⇔ねばねば) | ひかる (⇔びかびか?) |
| | ひたる (⇔ひたひた) | へたる (⇔へたへた) | ぼしゃる (⇔ぼしゃっと) |
| | むれる (⇔むらむら) | もやる (⇔もやもや) | 揺れる (⇔ゆらゆら) |
| b) | きしむ (⇔きしきし) | くらむ (⇔くらくら) | くるむ (⇔くるくる) |
| | たるむ (⇔たらたら) | ひそむ (⇔ひそひそ) | ゆるむ (⇔ゆるゆる) |
| | むくむ (⇔むくむく) | | |
| c) | いらだつ (⇔いらいら) | 浮く (⇔うきうき) | 転がる (⇔ころころ) |
| | さわぐ (⇔ざわざわ?) | せく (⇔せかせか) | そよぐ (⇔そよそよ) |
| | たじろぐ (⇔たじたじ) | ひたす (⇔ひたひた) | 冷やす (⇔ひやひや) |

対応する適当なオノマトペはないが、「すする」、「がなる」、「どなる」、「うなる」などもこの類に準ずるものではないかと思われる。

2.5.2.1.2 形容詞・形容動詞

日本語では、前節に見たようにオノマトペ動詞の数が非常に多いのに対して、オノマトペ形容詞およびオノマトペ形容動詞の数は非常に限られている。⁴²

オノマトペ形容詞を造る接尾辞としては、反復形オノマトペに付く「-しい」

⁴² 韓国語にはオノマトペを語根とする「하다形容詞」が非常に多いのに対して (§2.5.2.2.2 参照)、日本語にはオノマトペを語根とする形容詞や形容動詞は少ない。しかしながら、§2.5.2.1.1 で取り上げた「-(と)する」タイプの動詞の多くは、「-(と)している」の形式で韓国語の「하다形容詞」に相当する形容詞的な意味を持つ場合が多い。例えば、「はっきりしている」、「あっさりしている」、「くねくねしている」、「ぼんやりしている」、「ぱりっとしている」などは、それぞれ、韓国語の「하다形容詞」の「똑똑하다」/ttokttok-hada/、「시원하다」/shiwôn-hada/、「구불구불하다」/kubulgubul-hada/、「멍하다」/mông-hada/、「말썽하다」/malssuk-hada/に相当する意味を持つ。これらは意味的には形容詞に相当するけれども、形態的には「-(と)する」型の動詞の変化形であると見なし動詞として扱った。

とオノマトペ語基に付く「ーい」とがある。いずれもあまり生産的ではなく例の数は少ない。

(67) a) けばけばしい とげとげしい たどたどしい くだくだしい
くどくどしい

b) くどい (⇔くどくど) だるい (⇔だらだら?) とろい (⇔とろとろ)
でかい (⇔でかでか) のろい (⇔のろのろ) ぼろい (⇔ぼろぼろ)
ゆるい (⇔ゆるゆる)

(67a)のうち「くだくだしい」と「くどくどしい」は、それぞれ、「くだくだ」と「クドクド」という反復形のオノマトペに対応するが、後の例はそのような対応形を持たない。「けばけばしい」と「とげとげしい」は、それぞれ、名詞の「毛羽(けば)」と「棘(とげ)」の反復を語幹としているのであろうし、「たどたどしい」は動詞の「たどる」に由来するのではないかと思われる。これらがオノマトペ形容詞として扱われるのは、その形式とオノマトペ的語感のためであろう。⁴³ だとすれば、形容詞、名詞、動詞などから派生する次のような例もこれに準ずるものと考えられる。

(68) いたいたしい (<痛い)	おもおもしろい (<重い)
かるがるしい (<軽い)	しらじらしい (<白い)
にがにがしい (<苦い)	よわよわしい (<弱い)
ふてぶてしい (<太い)	かいがいしい (<甲斐?)
そらそらしい (<空(そら)?)	どくどくしい (<毒)
なまなましい (<生(なま))	はかばかしい (<量(はか))
ばかばかしい (<馬鹿)	はなばなしい (<華)
ふくぶくしい (<福)	みずみずしい (<水)
めめしい (<女(め))	ものものしい (<もの)

⁴³ 天沼(1974)『擬音語・擬態語辞典』と浅野編(1978)『擬音語・擬態語辞典』は「けばけば」と「とげとげ」の両方が見出しになっているし、阿刀田・星野著『擬音語・擬態語使い方辞典』では「けばけば」だけを見出しにしている。「たどたどしい」はいずれのオノマトペ辞典にも挙げられていないが、田守・スコウラップ(1999:64)がオノマトペ形容詞の例として挙げている。

よそよそしい (<他所(よそ))	いまいまいしい (<忌む)
たけだけしい (<猛る)	ぎょうぎょうしい (<?)
ずうずうしい (<?)	すがすがしい (<?)
そうそうしい (<?)	

「かるがるしい」、「しらじらしい」、「ふてぶてしい」などでは、オノマトペには生じない連濁が生じており、純然たるオノマトペとは認めがたい点がある。オノマトペと一般語との境界領域に属する表現であろう。

(67b)の「ーい」によるオノマトペ形容詞は、(66)のオノマトペ動詞と同様、派生の方向が明確ではない。

オノマトペ形容動詞は、次のように結果様態を表わす反復形オノマトペに「ーだ」を付けたものと、オノマトペ語基に「ーやか」を付けたものがある。

(69) a)	がたがただ	かさかさだ	かちかちだ	がりがりだ
	かんかんだ	きちきちだ	くしゃくしゃだ	ぐしょぐしょだ
	ぐにゃぐにゃだ	ぐらぐらだ	ごちゃごちゃだ	ごたごただ
	ごてごてだ	ごわごわだ	さくさくだ	さらさらだ
	しこしこだ	しゃりしゃりだ	すかすかだ	すべすべだ
	だぶだぶだ	つつつだ	てかてかだ	にちやにちやだ
	ぬるぬるだ	ねばねばだ	ばさばさだ	ばさばさだ
	ばらばらだ	ばりばりだ	ばりばりだ	びかびかだ
	びしょびしょだ	ひよろひよろだ	びりびりだ	ふかふかだ
	ぶかぶかだ	ぶくぶくだ	ぶつぶつだ	ふにゃふにゃだ
	ふらふらだ	ぶりぶりだ	ふわふわだ	ぺこぺこだ
	べたべただ	べちゃべちゃだ	へとへとだ	べとべとだ
	べろべろだ	ぼーぼーだ	ほかほかだ	ほこほこだ
	ほさほさだ	ぼてぼてだ	ほやほやだ	ほろほろだ
	めちゃめちゃだ	めろめろだ	もじゃもじゃだ	よほよほだ
	よれよれだ	ぐでんぐでんだ		

b)	しなやかだ (<しなしな)	つややかだ (<つやつや)
	にこやかだ (<にこにこ)	のびやかだ (<のびのび)
	ひそやかだ (<ひそひそ)	ひやかだ (<ひやひや)
	ゆるやかだ (<ゆるゆる)	

「ーだ」は、「そっくり」、「たっぷり」、「びったり」など一部の「○っ□り」型の

オノマトペや、「きんきらきん」、「どんぴしゃり」などの非反復形のオノマトペにも付けられる。

2.5.2.2 韓国語の用言オノマトペ

韓国語の用言は動詞と形容詞であり、用言オノマトペにもその2種類がある。

- (70) a) 너구리 한마리가 눈을 꿈쩍꿈쩍하며 토끼를 보고 말했습니다. (タヌキ一匹が眼をぱちぱちさせながらウサギをみて言いました。)『童話』
- b) 방문이 스르르 열리면서 커다란 구렁이 한 마리가 혀를 날름거리며 들어왔습니다. (ドアがするつと開いて大きいアオダイショウが一匹舌をべろべろさせて入ってきました。)『童話』
- c) 그길로 송골매는 으스대면서 주인 집으로 갔습니다. (その足でハヤブサはいばりながら主人の家に行きました。)『童話』
- d) 남편이 산에 나무를 하러 갔다가 발밑에서 번쩍이는 노오란 금덩어리를 발견했습니다. (夫が山にたきぎを取りに行き、足元でびかびか光る黄色の金塊を見つけました。)『童話』
- e) 박이 평하고 갈라지면서 뽀족뽀족한 몽둥이를 들은 도깨비들이 튀어나왔습니다. (ひょうたんがぱんと割れるとつんつんと尖った棒を持った鬼達が出てきました。)『童話』
- f) 또 얼마나 끔찍스러운 일을 저지르려고 나를 또 밖으로 나가라고 하는가. (またどんな残酷なことをしてかそうと、私に外へ出ろというのか。)『朝鮮語象徴語辞典』

(70a~d)はオノマトペ動詞の例であり、(70e,f)はオノマトペ形容詞の例である。

2.5.2.2.1 動詞

2.5.2.1.1に見たように日本語のオノマトペ動詞はほとんどが「-する」によるものであり種類も少ないのに対して、韓国語のオノマトペ動詞は多様である。比較的生産的な接尾辞だけでも(70a)の「-하다」/hada/、(70b)の「-거리다」/kôrida/、(70c)の「-대다」/tæda/、(70d)の「-이다」/ida/の4種がある。朴東根(1997:66)によれば、ハングル学会編(1992)『韓国語大辞典』に収録されてい

るオノマトペについてどのタイプの用言オノマトペが可能であるかを調査した結果、次のような分布が得られたという。

(71)

タイプ	品詞	語数	計
하 다 型	動詞	3136	5510
	形容詞	2026	
	動詞・形容詞	348	
거 리 다 型	自動詞	1024	2229
	他動詞	227	
	自動詞・他動詞	928	
대 다 型	動詞	2229	2229
이 다 型	動詞	401	401

オノマトペ動詞のうち最も少ないのは「이다型」であるが、それでも401語というのはかなり生産性が高い。

しかしながら、実際の使用頻度の観点から見るとこれらのタイプの分布状況はかなり異なる。(48)に示した徐尚揆(ソ・サンギョ)(1993:81)の調査結果のうち関係部分だけを取り出してみると次のようになる。

(72)

タイプ	品詞	用例数	小計
하 다 型	動詞	161(7.9%)	1015(50.1%)
	形容詞	854(42.1%)	
거 리 다 型	自動詞	455(22.4%)	564(27.8%)
	他動詞	109(5.4%)	
대 다 型	動詞		93(4.6%)
이 다 型	動詞		355(17.5%)
計			2027(100.0%)

この2つの調査結果を比較すると、次のような違いがある。

- ① 하다型用言では、可能な動詞と可能な形容詞の比率がほぼ3:2(3484語:2374語⁴⁴)で動詞の方が多いのに対して、使用頻度は形容詞が動詞の5倍を越える(161例:854例)。

⁴⁴動詞と形容詞の両方に用いられるものを含んだ語数である。

- ② 可能な動詞のタイプとしては하다型(3484語)が最も多く、以下거리다型(2229語)・대다型>이다型(401語)の順であるが、使用頻度の点では거리다型(564例)がもっとも頻繁に用いられ、以下이다型(355例)>하다型(161例)>대다型(93例)の順である。

2.5.2.2.1.1 하다型

「하다型」オノマトペ動詞は完全反復形のオノマトペを語幹とするものが圧倒的に多いが、その他のタイプのオノマトペに付く場合もある。

- (73) a) 은 바다 밑에서 온 의사는 오랜시간 진찰을 하더니 고개를 가웃가웃 했습니다. (深い海の底から来た医者は長い間診察をすると首をしきりにかしげました。)『童話』
 나무꾼의 등 뒤에서 이상하게도 달그락달그락 하는 소리가 들려왔습니다. (きこりの背後から奇妙なことにかたかたいう音が聞こえてきました。)『童話』
 덕보는 선비의 말을 듣고 고개를 끄덕끄덕 했습니다. (トクボは学者の話の聞いて首をこくりとうなずきました。)『童話』
 상점 안을 기웃기웃 들여다보다 그 안에 들어가서는 이것저것 주물럭주물럭 했습니다. (店の中をしきりにのぞいてからその中に入ってあれこれしきりにいじりました。)『童話』
- b) “아버지는 할아버지가 불쌍하지도 않으십니까?” 하고 불끈하여 외쳤습니다. (「お父さんはおじいさんが可哀想じゃないんですか」とかっとなって叫びました。)『童話』
 시골 양반은 고개를 꾸벅하며, “그럼 가겠습니다. (田舎の方は首をぺこりとして、“それでは帰ります”。)『童話』
 불쑥 튀어나온 정수의 말소리에 남 박사는 가슴이 철렁했다. (いきなりしゃべるチョンスの声にナム博士はどきっとした。)『父』
 어깨를 으쓱하며 서둘러 시장을 떠났습니다. (肩を怒らしながら慌てて市場を離れました。)『童話』
 토끼가 그 큰 귀를 쫑긋하며… (우사기가その大きい耳をぴんと立てながら…)『童話』

(73a)は完全反復形のオノマトペを語幹とする「하다型」動詞の用例であり、(73b)は単一形語幹を持つ動詞の用例である。反復形は動作の繰り返しや継続、単一形は一回だけの動作・現象を表わしている。したがって、単一形語幹／反復形語幹の違いにより次のようなオノマトペ動詞の対ができる。

(74) 가웃하다	首をかしげる
가웃가웃하다	しきりに首をかしげる
달그락하다	かたっと／ことっと音がする
달그락달그락하다	かたかた／ことことする
끄덕하다	こくりとする
끄덕끄덕하다	こっくりこっくり／うつらうつらする
불끈하다	かっとする
불끈불끈하다	かっかっとする、しきりに腹を立てる
꾸벅하다	こっくり／ぺこりとする
꾸벅꾸벅하다	こっくりこっくり／ぺこぺこする
철렁하다	どきっと／びくっとする
철렁철렁하다	どきどきする／びくびくする
으쓱하다	肩を怒らす、得意になる
으쓱으쓱하다	しきりに肩を怒らす
쟁그랑하다	がちゃんと音がする
쟁그랑쟁그랑하다	がちゃんがちゃんと音がする

しかしながら、次の(75a)のように単一形にしか「-하다」が付かない場合や(75b)のように反復形にしか付かない場合、あるいは(75c)のように類音反復形に付く場合もある。

(75) a) 감박하다 (うっかりする)	깔끔하다 (さっぱりしている)
흰하다 (薄明るい)	뽀로통하다 (つんとしている)
행하다 (よく知っている)	얼떨떨하다 (頭がふらつく)
더부룩하다 ((ひげなどが)ぼうぼうとしている)	
때꾼하다 (げっそりして目が落ち窪んでいる)	
b) 반등반등하다 (ぶらぶら)	종달종달하다 (ぶつぶつ言う)
짱잘짱잘하다 (べちゃくちゃしゃべる)	짱알짱알하다 (だだをこねる)
허덕허덕하다 (あえぐ)	허둥허둥하다 (あたふたする)
허위적허위적하다 (じたばたする)	허적허적하다 (ひっかき回す)
짱알짱알하다 (べちゃくちゃしゃべる)	방글방글하다 (にこにこする)
다독다독하다 (ぼんぼんたたく)	달가닥달가닥하다 (かたかたする)
달각달각하다 (かたかたする)	덜거덩덜거덩하다 (がたんがたんする)
덜걱덜걱하다 (がたんがたんする)	덜커덕덜커덕하다 (がたがたする)
덜척덜척하다 (がたがたする)	망설망설하다 (ぐずぐずする)

바스락바스락하다(かさかさする)

- | | |
|-------------------|---------------------|
| c) 싱글병글하다(にこにこする) | 허겁지겁하다(あたふたする) |
| 허둥지둥하다(あたふたする) | 엄병덤병하다(あたふたする) |
| 옥신각신하다(ああだこうだと言う) | 싱숭생숭하다(そわそわする) |
| 우물쭈물하다(もじもじする) | 얼기설기하다(ごちゃごちゃする) |
| 왈각달각하다(가챠가챠하는) | 곤드레만드레하다(べろんべろんになる) |

2.5.2.2.1.2 거리다型

オノマトペ動詞形成接尾辞として最もよく使われるのが「-거리다」/kôrida/ である。

- (76) a) 안에는 불빛만 가물거릴 뿐 아무 대답이 없었습니다. (中には火がちらちらするばかりで、何の返事もありませんでした。)『童話』
- 이 말을 들은 머슴은 그저 고개를 끄덕거릴 뿐이었습니다. (この言葉を聞いた下男はただ首をこっくりこっくりさせるばかりでした。)『童話』
- …어떤 선비가 무언가를 찾는 듯 두리번거리며 올라왔습니다. (…ある学者が何かを探るようにきよるきよるしながら上がってきました。)『童話』
- 거인은 온 몸이 따끔거리 잠을 이룰 수 없었습니다. (巨人は全身がちくちくして眠れませんでした。)『童話』
- 이 말에 동네 사람들은 눈치를 채고 저마다 수군거렸습니다. (この話を聞いて村の人々は感づいてみなこそこそしました。)『童話』
- 막내는 냇물을 건너려다가 물에 빠져 허위적거리는 스님을 발견했습니다. (末っ子は川を渡ろうとして、水に落ちてあつぷあつぷしているお坊さんを見つけました。)『童話』
- 술에 취해 엉망이 된 정수는 갈지자걸음으로 비틀거렸다. (酒に酔いへべれけになったチョンスは千鳥足でふらついた。)『父』
- 지원은 제 방으로 달려가고 자리에서 일어선 영신은 어쩔 줄 몰라 자꾸만 서성거렸다. (チウオンは自分の部屋に駆け込み、椅子から立ったヨンシンはどうすることもできずおろおろするばかりであった。)『父』
- 남 박사가 독백처럼 중얼거렸다. (ナム博士は独白のようにつぶやいた。)『父』
- 미리부터 끝을 향해,벼랑을 향해 허겁지겁 허둥거리는 모습들은 정말 보기 싫었다. (初めから終りに向かって、崖に向かってあたふたとあわてふためく姿は本当に見たくなかった。)『父』
- 사내는 숨이 턱에 차 헐떡거리기 시작했다. (男は息が詰まって喘ぎ始めた。)『父』
- 후들거리는 다리를 가누지 못한 그녀가 무너지듯 주방바닥에 주저앉았다. (おなわなする足を支えきれず彼女は崩れるように台所の床に座り込んだ。)『父』
- 정수는 다시 노래를 홍얼거리며 휘청거리는 발걸을 내딛기 시작했다. (チョンスは再び鼻歌を歌いながら、ふらふらする足取りで歩き始めた。)『父』

사내는 고개를 가우똥거리러가며 말끝을 흐렸다. (男はしきりに首をかしげながら言葉を濁した。)『父』

b) 두리번두리번거리다가, 눈에 잘 띄는 나뭇가지 위에 걸어놓았습니다. (きよろきよろしてから目立つ枝の上に掛けておきました。)『童話』

c) 깃발 바로 옆에서 깔깔거리는 웃음 소리가 들려왔습니다. (旗のすぐそばから、からから笑う笑い声が聞こえてきました。)『童話』

멀리서 보니 호랑이가 얼음 위에 주저앉아 움직이지도 못하고 깡깡거리고 있었습니다. (遠くから見ると、トラが氷の上に座り込んで動くこともできずうんうんうなっていました。)『童話』

거인은 툭툭거리며 방에서 마루로 나와 벌렁 드리누웠습니다. (巨人はぶつぶつ言いながら部屋から板の間へ出て、ごろんと寝転びました。)『童話』

남 박사가 씩씩거리는 정수의 손을 걸어내며 주머니 속의 약봉지를 내밀었다. (ナム博士ははあはあいうチョンスの手をはらいポケットの中の薬袋を差し出した。)『父』

…칙칙거리는 라디오소리에 이어 들리는 처음 듣는 음악… (…キーキーいうラジオの音に続いて聞こえるはじめて聞く音楽…)『父』

포장마차 사내의 객적은 농담 몇 마디와 정수보다 몇 곱은 더 낄낄거리는 그의 공허한 웃음뿐이었지만… (屋台の男のつまらない冗談とチョンスより何倍もけらけら笑う彼の虚しい笑いだけだったが…)『父』

그런데 머릿속은 점점 맑아지고 가슴은 자꾸만 쿵쿵거리었다. (しかし、頭の中はどンドン湧えて胸はしきりにどきどきした。)『父』

「-거리다」/kôrida/は反復の意味を内包する接尾辞であるので、一般に(76a)のような単一形オノマトペに付く。(76b)のような反復形に「-거리다」が付いた例は極めて例外的である。ただし、1音節のオノマトペの場合は(76c)のようにその反復形に付く。このタイプのものとしては、他に次のようなものがある。

(77) <u>갈갈거리</u> 다(飢えてががつする)	<u>댕댕거리</u> 다(かんかんと鳴る)
<u>멍멍거리</u> 다(가ん가んと音を立てる)	<u>멍멍거리</u> 다(わんわんほえる)
<u>빵빵거리</u> 다(ばんぱんと音をたてる)	<u>삑삑거리</u> 다(びいびい泣く)
<u>삑삑거리</u> 다(ぎゃあぎゃあ泣く)	<u>실실거리</u> 다(へらへら笑う)
<u>징징거리</u> 다(ぶつぶつ言う)	<u> 짹짹거리</u> 다(ちゅっちゅっと舌を鳴らす)
<u> 짹짹거리</u> 다(ぼかぼかする)	<u> 짹짹거리</u> 다(ちえっちえっと舌打ちをする)
<u> 짹짹거리</u> 다(めそめそする)	<u> 짹짹거리</u> 다(がみがみ言う)
<u> 짹짹거리</u> 다(くちゃくちゃ噛む)	<u> 짹짹거리</u> 다(せかせかとほっつき回る)
<u> 짹짹거리</u> 다(舌打ちをしたり舌鼓を打つ)	<u> 짹짹거리</u> 다(羽振りよく暮す)
<u> 짹짹거리</u> 다(さらさら流れる)	<u> 짹짹거리</u> 다(ざあざあと流れる)

쭈쭈거리다(ちよろちよろと音をたてる)	짹짹거리다(ずるずる引きずる)
떨떨거리다(しくしく泣く)	캉캉거리다(きゃんきゃんと吠える)
꽤꽤거리다(까까っと咳をする)	캱캱거리다(キツネがこんこんと鳴く)
각각거리다(가아가가아っと声を出す)	콜콜거리다(とくとくと流れ出る)
쿨쿨거리다(すやすやと眠る)	콩콩거리다(わんわんと吠える)
콕콕거리다(ふすっふすっと刺す)	팔팔거리다(ざあざあと流れ出る)
광광거리다(どんどんと音がする)	쿨쿨거리다(ぐうぐう寝る)
쿵쿵거리다(どんどんと音がする)	킁킁거리다(だくだくと流れ出る)
쿵쿵거리다(くんくん鼻を鳴らす)	킁킁거리다(くすくす笑う)
킬킬거리다(くすくす忍び笑いをする)	킁킁거리다(うんうんとうなる)
툭툭거리다(ぶつぶつ言う)	텅텅거리다(どんどんと音がする)
통통거리다(どんどんと音がする)	팡팡거리다(ばあんばあんと言がする)
핑핑거리다(ぼんぼんと音がする)	풍풍거리다(ふうふうと言がする)
하하거리다(しきりにはたと笑う)	허허거리다(はっはっはっと笑う)
헉헉거리다(疲れて息を切らす)	헤헤거리다(しきりにへへと笑う)
호호거리다(しきりにほほと笑う)	흥흥거리다(鼻をふがふがさせる)
후후거리다(ふうふうする)	

「거리다型」オノマトペは動作の反復・継続を表わす。したがって、「反復形オノマトペ+하다」のタイプのオノマトペ動詞とほとんど同じ意味を表わすことになる。

(78) 가웃가웃하다	~ 가웃거리다	しきりに首をかしげる
달그락달그락하다	~ 달그락거리다	かたかた/ことことする
끄덕끄덕하다	~ 끄덕거리다	こっくりこっくり/うつらうつらする
불끈불끈하다	~ 불끈거리다	까까っとする、しきりに腹を立てる
꾸벅꾸벅하다	~ 꾸벅거리다	こっくりこっくり/べこべこする
철렁철렁하다	~ 철렁거리다	ときどきする/びくびくする
으쓱으쓱하다	~ 으쓱거리다	しきりに肩を怒らす
쫄달쫄달하다	~ 쫄달거리다	ぶつぶつ言う
쫄잘쫄잘하다	~ 쫄잘거리다	ぺちやくちゃしゃべる
짱알짱알하다	~ 짱알거리다	むずかる、だだをこねる
허덕허덕하다	~ 허덕거리다	あえぐ、あくせくする
허둥허둥하다	~ 허둥거리다	あたふた/うろうろ/じたばたする
허위적허위적하다	~ 허위적거리다	じたばた/あつぷあつぷする
허적허적하다	~ 허적거리다	ひっかき回す

가물가물하다	~ 가물거리다	ちらちら/ゆらゆらする
끄덕끄덕하다	~ 끄덕거리다	こくりこくりする
두리번두리번하다	~ 두리번거리다	きよろきよろする
수군수군하다	~ 수군거리다	ひそひそ話す、ささやく
비틀비틀하다	~ 비틀거리다	よろよろ/ふらふらする
허적허적하다	~ 허적거리다	ちらちら/ゆらゆらする
서성서성하다	~ 서성거리다	うろうろ/そわそわする
중얼중얼하다	~ 중얼거리다	ぶつぶつぶやく
수군수군하다	~ 수군거리다	ひそひそ話す、ささやく
허둥허둥하다	~ 허둥거리다	おろおろ/あたふたする
헐떡헐떡하다	~ 헐떡거리다	しきりにあえぐ、ぜいぜいする
서성서성하다	~ 서성거리다	うろうろ/そわそわする
흥얼흥얼하다	~ 흥얼거리다	ふんふん鼻歌を歌う
휘청휘청하다	~ 휘청거리다	よろよろ/ふらふらする
가우똥가우똥하다	~ 가우똥거리다	しきりに首をかしげる
꿈쩍꿈쩍하다	~ 꿈쩍거리다	しきりにまばたきをする
날름날름하다	~ 날름거리다	舌をぺろぺろ出す

この2つのタイプのオノマトペ動詞はほぼ同数存在するのであるが、使用頻度は圧倒的に「거리다型」の方が多い。それが、(72)で見たように「하다型」動詞全体の使用頻度を低める大きな要因となっているし、また、韓国語の反復形オノマトペの使用頻度を若干低めている原因でもある。

2.5.2.2.1.3 대다型

「-대다」/tæda/も「-거리다」/kôrida/と同様、単一形のオノマトペに付いて動作の反復・継続を表わす動詞を造る。

(79) 모두들 어찌 된 영문인지를 몰라 소곤대고 있었습니다. (皆どうしたのか訳を知らずこそこそしていました。)『童話』

산적들이 감추어 놓은 금은보화를 짊어지고 으스대며 집으로 돌아왔습니다. (山賊達は隠しておいた金銀宝貨を担いで肩を怒らせて家に帰ってきました。)『童話』

원래 덜병대는 성격에다가 돈을 손에 쥐자 좋아서 날뛰며 집으로 달려오다가 그만 잃어버리고 말았습니다. (もともとせっかちな性格の上お金を手にするとうれしくて飛び跳ねて家に帰って来る途中、無くしてしまいました。)『童話』

“조금 전 우리 영감이 어떤 놈의 총에 맞아 죽어가는 데 얼른 감자를 캐가지고 영감에게 먹여야 하네.”하며 몹시 허둥대었습니다. (「さっき私の夫がある人の銃に撃たれて死にそうなので早くジャガイモを掘って夫に食べさせなければならない」と言いとてもあわてふためきました。)『童話』

朴東根(パク・トングン)(1997:66)の調査結果(71)によれば、「거리다型」と「대다型」は2229語で同数になっているが、これは偶然の一致ではなく、「-거리다」と「-대다」は同等の価値を持つ接尾辞であると見なされたためである。実際、李熙昇(イ・ヒスン)編(1983)『国語大辞典』、金星出版社編(1991)『金星版国語大辞典』、ハングル学会編(1992)『韓国語大辞典』などではこの両者を区別していない。徐尚揆(ソ・サンギョ)(1993:81)の調査結果(72)が示すように、実際の使用頻度は「거리다型」が圧倒的に多いのであるが、これは「대다型」の表現は非標準語と見なされてきたことによる。

しかしながら、社会科学出版社編(1992)『朝鮮語大辞典』によれば、「-거리다」は「繰り返される動きや性質の状態や状況を表わす」ものであり、「-대다」は「行動が引き続いて繰り返されることを表わす」ものであるとして、微妙に意味を区別している。朴東根(パク・トングン)(1997:66)も韓国語話者21名を対象として調査したところ、次のような結果が得られたと報告している。

(80) a) 「-거리다」、「-대다」共に結合が自由なもの

글썩 (涙をためる)	꼬기작 (しわくちや)
꿈지락 (ゆっくり身動きする)	꾸물 (ぐずぐずする)
꿈적 (のろのろ)	끄덕 (こっくり)
넘실 (大きくうねる)	대롱 (ぶらりぶらり)
더듬 (手で探る)	덤병 (どぶん、あたふた)
두근 (どきどき)	뒤뚱 (よろよろ)
들썩 (かたかた、そわそわ)	북적 (がやがや)
비실 (よろよろ)	비틀 (よろよろ)
아른 (ちらちら、ゆらゆら)	울렁 (わくわく)
이글 (かっかと)	절뚝 (びっこを引く)
출썩 (ふざける)	출렁 (どぶん)
흐물 (とろとろ)	

b) 「-거리다」とは結合が自由であるが、「-대다」とは制約されるもの

가물 (ちらちら)	구불 (くねくね)
기우똥 (ぐらぐら)	기웃 (しきりにのぞく)
근적 (ねばねば)	날름 (ぺろぺろ)
달랑 (りんりん)	따끔 (ひりひり)
말똥 (まじまじと見る)	말랑 (ふわふわ、ふよふよ)
바글 (うようよ、ぐらぐら)	바들 (ぶるぶる)
반들 (つるつる)	반짝 (きらきら)
방긋 (にこにこ)	방글 (にこにこ)
오싹 (ぞくぞく)	질뚝 (びっこを引く)
후끈 (ぼかぼか)	흔들 (ゆらゆら)

c) 「-거리다」、「-대다」共に結合が制約されるもの

깡충 (びよんびよん)	꼬깃 (しわくちゃ)
둥실 (ふわふわ)	뜨끈 (非常に熱い)
망설 (ぐずぐず、もじもじ)	몽뚝 (先が擦り切れて鋭くない)
발끈 (かっと)	벌떡 (ぱっと、すくと)
불쑥 (突然)	아슬 (はらはら)
야금 (もぐもぐ)	오들 (ぶるぶる)
오물 (もぐもぐ、うようよ)	철철 (じゃあじゃあ、なみなみ)

2.5.2.2.1.4 이다型

「-이다」/ida/も生産性の高い動詞形成語尾の1つであり、「-대다」/tæda/に比べるとかなり使用頻度が高い。この語尾も単一形のオノマトペに付くのが普通である。⁴⁵

(81) 호랑이는 고개를 끄덕이며 조금만 더 참아보리라 생각했습니다. (虎はうなずきながらもう少し我慢してもよいと思った。)『童話』

남편이 산에 나무를 하러 갔다가 밭밑에서 번쩍이는 노오란 금덩어리를 발견했습니다. (夫はたきぎを取りに行き足元で**ぴかっと光る**黄色の金塊を見つけました。)『童話』

…심지어는 베란다가 화분들까지 들먹이더니 마침내는 아빠에 대한 불평으로 이어졌다. (…さらにベランダの鉢のことも**ぶつぶつ**言っ、しまいには父に対する不満へと続いた。)『父』

기어코 지원은 어깨를 들썩였다. (ついにチウオンは肩を揺り動かした。)『父』

다시 멍하니 시선을 돌리던 그의 눈빛이 반짝였다. (再びぼんやり視線を向けた彼の目が輝いた。)『父』

남 박사는 거의 울먹이고 있었다. (ナム博士はほとんど泣き出していた。)『父』

⁴⁵ 朴東根(1997)によれば、반짝반짝이다(きらきら光る)、쿨럭쿨럭이다(ごほんごほん)、쩍쩍이다(ちいちい/ちゅんちゅん)のような反復形オノマトペを語幹とする使用例がある。

그런데 그는 가는 신음소리를 내며 연신 헐떡이고 있었다. (ところが彼は細いうめき声を出してずっと息を切らせていた。)『父』

영신이 공항 안 한쪽 모퉁이를 가리키며 꺾속말로 속삭였다. (ヨン신이空港の中の一角を指しながら耳もとでささやいた。)『父』

정수는 그의 걸음이 휘청인다고 생각했다. (チョンスは彼の足がふらついていると思った。)『父』

…어디선가 많은 사람이 지껄이는 듯한 시끌시끌한 소리가 들려왔습니다. (...どこからか多くの人がぺちやくちゃしゃべっているような騒々しい声が聞こえてきた。)『童話』

정수는 어색한 웃음만 지을 뿐 여전히 망설였다. (チョンスはぎごちない笑いを浮かべるだけで依然ためらっていた。)『父』

이 말을 들은 토끼는 가던 걸음을 멈추고 땅바닥에 주저앉아 갈까 말까하고 망설이고 있었습니다. (この話を聞いたウサギは足を止めて地面に座り込んで行くか行くまいかためらっていた。)『童話』

「이다型」動詞の語幹となるオノマトペは、「ㄱ」/k/、「ㅇ」/ng/、「ㄹ」/l/に終わるものに限られる。上の例ではほとんどが「ㄱ」に終わるものであるが、「ㅇ」と「ㄹ」に終わるものを補うと次のようなものがある。

- | | |
|---------------------|------------------|
| (82) a) 글썽이다 (涙ぐむ) | 덜렁이다 (がらんがらんと鳴る) |
| 술렁이다 (ぞわぞわして落ち着かない) | 울렁이다 (わくわくする) |
| 일렁이다 (ゆらゆら揺れる) | 출렁이다 (大きく波打つ) |
| b) 간질이다 (くすぐる) | 구불이다 (曲げる) |

2.5.2.2.1.5 その他

朴東根(1997:93ff)によれば、オノマトペ動詞を派生する接尾辞には上に挙げた4種の他に次のようなものがある。

- (83) a) -떨다 /ttôlda/
 이지렁떨다 (とぼける) Cf. 이지렁스럽다 (しらんぷりしている)
 새살떨다 (むやみにはしゃぐ) < 새살새살 (にこにこ笑いながらぺちやくちゃしゃべるようす)
- b) -치다 /ch'ida/
 어긋치다 (少し食い違っている) < 어긋어긋 (ちぐはぐ)
 툭탁치다 (ことの善し悪しを考えないで除いてしまう) < 툭탁 (こつんこつん)
 훌렁치다 (広くゆるんでいて物の出入りがする) < 훌렁훌렁 (だぶだぶ)
- c) -지다 /chida/

꼬부라지다 (曲がる) < 꼬불꼬불 (くねくね)
 비틀어지다 (ねじれる) < 비틀비틀 (ふらふら/よろよろ)
 얼룩지다 (染みがつく、まだらになる) < 얼룩얼룩 (まだらに)

d) -트(뜨)리다 /t'û(ttû)rida/

가든그뜨리다 (簡単にとりまとめる) < 가든가든 (気軽なさま)
 꼬부라트리다 (折り曲げる) < 꼬불꼬불 (くねくね)
 시들어뜨리다 (しおらせる) < 시들시들 (しおれているようす)

e) -그리다 /kûrida/

가동그리다 (足をばたばたさせる) < 가동가동 (足をばたばたさせるようす)
 가든그리다 (簡単にとりまとめる) < 가든가든 (気軽なさま)
 뺨당그리다 ((顔を横に振って)嫌がる) < 뺨글뺨글 (ぐるぐる/くるくる)
 찡그리다 (顔をしかめる) < 찡긋찡긋 (顔をしきりにしかめるようす)
 쑹그리다 (耳などをまっすぐ立てる) < 쑹긋쑹긋 (ぴんと立つようす)
 쭈그리다 (しゃがむ) < 쭈글쭈글 (しわしわ)
 웅숭그리다 ((寒さなどで)体をすくめる) < 꼬불꼬불 (くねくね)
 앙당그리다 ((寒さに)身を縮める) < 꼬불꼬불 (くねくね)

f) -부리다 /purida/

계정부리다 (不平がましい態度を取る) < 계정계정 (ぶつぶつ)
 이기죽부리다 (ねちねちといやみを言う) < 이기죽이기죽 (ねちねち)

g) -피우다 /p'iuda/

거드름피우다 (いばる) < 거드럭거드럭 (偉そうに横柄な態度をとるようす)
 야지랑피우다 (そらとぼける) < 야기죽야기죽 (人をこばかにしてしゃべりまくるようす)

最後に、次のようなゼロ派生、つまりオノマトペを直接、動詞の語幹とする場合がある。このような例は、日本語の(66)の動詞と同様、派生の方向は確定できないものが多い。

- | | | |
|-----------------|---|----------------------|
| (84) 까불다 (ふざける) | ⇔ | 까불까불 (軽率にふるまうようす) |
| 구불다 (曲がっている) | ⇔ | 구불구불 (くねくね) |
| 더듬다 (手で探る) | ⇔ | 더듬더듬 (手探りで) |
| 뒹굴다 (寝転ぶ) | ⇔ | 뒹굴뒹굴 (ごろごろ) |
| 부풀다 (毛羽立つ) | ⇔ | 부풀부풀 (毛羽立つようす) |
| 비비다 (こする) | ⇔ | 비빔비빔 (こしこし) |
| 비틀다 (ひねる) | ⇔ | 비틀비틀 (よろよろ) |
| 서슴다 (ためらう) | ⇔ | 서슴서슴 (もじもじ) |
| 설레다 (そわそわする) | ⇔ | 설레설레 ((頭を)軽く横に振るようす) |
| 시들다 (しぼむ) | ⇔ | 시들시들 (しおれて生気のないようす) |
| 엇글다 (混ぜてかき乱す) | ⇔ | 엇글엇글 (もつれる) |

주무르다 (もむ)	⇔	주물럭주물럭 (もみもみ)
헝클다 ((物事を)からませる)	⇔	헝클헝클 (もつれる)
흔들다 (振る)	⇔	흔들흔들 (ゆらゆら)

2.5.2.2.2 形容詞

韓国語のオノマトペ形容詞としては、可能な語数の点でも使用頻度の点でも、接尾辞「-하다」によるものが圧倒的に多い。

- (85) a) 충각은 불룩한 보자기를 다락방에 처박아놓았습니다. (チョンガーはふっくらとした風呂敷きを屋根裏部屋に押し込んでおいた。)『童話』
- 내 꼬리가 어째서 이렇게 묵직하고 뻘근하지?(私のしっぽがなぜこんなにずっしりして重々しいのかな。)『童話』
- 시원하고 새콤하고 입에 짹짹 들어붙는데 어떡하면 그것을 실컷 먹어 본담!(涼しくて甘酸っぱくて口に合うんだが、どうすればこれを腹一杯食べてられるかな。)『童話』
- 부자는 낮선 손님의 말에 어안이 멍멍할 뿐이었습니다. (お金持ちは知らぬ客のことで啞然となるだけでした。)『童話』
- 그런 엉뚱한 거짓말을 어떻게 떠들고 다닌담! (そんなとんでもない嘘をどうして言いふらしているだろう。)『童話』
- 소령은 가슴이 포근하다 못해 이제는 콧등까지 시큰했다. (ソリョンは胸が熱くなり、拳句に鼻までじーんとなった。)『父』
- 거의 같이 마셨는데도 남 박사의 의식은 말짱했다. (ほとんど一緒に飲んだのにナム博士の意識は覚めていた。)『父』
- 시큰둥한 표정으로 방을 가리킨 종업원이 별 관심 없다는 듯 횡하니 돌아섰다. (無愛想な表情で部屋を指差した従業員が別に関心はないというようにぱっと背を向けた。)『父』
- 휘황한 백열등에 눈이 부신 정수는 한 손을 이마에 얹어 그 빛을 가린 채 얼 거주춤한 자세로 과일무더기를 가리켰다. (皓々とした白熱灯がまぶしく、チョンスは片手を額においてその光りを覆ったまま、中腰の姿勢で果物の山を指差した。)『父』
- 남 박사의 엉뚱한 해석에 정수는 몹시 난처한 표정이었다. (ナム博士の突拍子もない解釈にチョンスは非常に困った表情だった。)『父』
- b) 옛날 도깨비가 득실득실 하던 시절의 이야기입니다. (昔、鬼がうじゃうじゃいたころの話です。)『童話』
- 물렁물렁하니까 손에 꼭 쥐면 안돼. (ふよふよだからぎゅっと握っちゃだめ。)『童話』
- …무우와 배추를 납작납작하게 썰어놓고 국물 맛이 시콤새콤한 것이 무엇이야? (…大根と白菜を平たく切って汁の味が甘酸っぱいものは何だ。)『童話』
- 이것은 뜨끈뜨끈한 아랫목에 이불을 썬워, 한 삼십일 가랑 그대로 놔두면 저절로 꺼어납니다. (これは暖かいオンドルの部屋の床に布団をかぶせて、30日くらいそのまま置いておくと自然にかえます。)『童話』

- 뛰가 이리 후끈후끈하지. (何がこうもむんむんするんだろう。)『童話』
- 저녁상을 함께한 기억도 가물가물했다. (夕食をともにした記憶もかすかだった。)『父』
- 과일가게 주인은 그 시간에도 말똥말똥한 눈빛을 한 채 상냥한 웃음을 흘렸다. (果物屋の主人はその時間にもすっきりした眼をしたままやさしい笑いを浮かべた。)『父』
- c) 정말 그 젊은이 참 똑똑하군. (本当にあの若者は賢いなあ。)『童話』
- 산 속에서 살기가 얼마나 심심하시오? (山の中で住むのはさぞ退屈でしょう。)『童話』
- 하루하루를 쓸쓸한 마음으로 방황하던 도령은 어느곳에선가 늙은 스님 한 분을 만났습니다. (毎日をさびしい気持ちでさまよったぼっちゃんはあるところで年老いた一人の僧侶に会いました。)『童話』
- 배가 출출하니 시장기나 떤워야겠다. (お腹がすいたので何かを食べよう。)『童話』
- 내 살이 통통한 닭을 한 마리 잡아줍세. (丸々と太った鶏一匹をつぶしてあげよう。)『童話』
- 그 오래잡은 침묵의 답답함을 먼저 남 박사가 견뎌내지 못했다. (そんなに長くない重苦しい沈黙をナム博士の方が我慢できなかった。)『父』
- 자랑스럽고 마지막 보루처럼 든든하면서도 언제든 투정부릴 수 있는 여유가 보이고… (誇らしく最後のとりでのように頼もしくいつでもだだをこねる余裕がみえて…)『父』
- 차라리 그렇기라도 했으면 얼마나 멋쩍할까. (いっそそうであれば堂々とできるだろう。)『父』
- 나만 약에 취해 편안히 드러누워 죽음을 기다리는 뻔뻔함 또한 견딜 수 없네. (私だけ薬に酔って安らかに横になって死を待つずうずうしさもまた耐えられない。)『父』
- 포장마차 주인이 소담스럽게 담긴 싱싱한 굴 한 접시를 내놓으며 싱긋이 웃어보였다. (屋台の主人はおいしそうに盛られた新鮮な牡蠣を一皿出しながらにこっと笑って見せた。)『父』
- 이건 아비에 대한 절절한 사랑이야. (これは父さんに対する切々とした愛だ。)『父』
- 난 그 촉촉한 물기에 행복할 수 있을 것이다. (私はそのみずみずしい水気で幸せになれるであろう。)『父』
- 갑자기 눈앞이 침침했다. (突然目の前がかすんで見えた。)『父』
- 먼저 퀴퀴한 냄새가 콧전을 자극했다. (まず悪臭が鼻を突いた。)『父』
- 팽팽하고 격렬한 싸움의 시간이 흐르고 있었다. (伯仲した激しい戦いの時間が流れていた。)『父』
- 남 박사는 그의 푹푹한 정이 진심으로 고마웠다. (ナム博士は彼のすれてない情が本当にありがたかった。)『父』
- 등 너머로 들려온 사내의 투박한 말투에는 훈훈한 정이 묻어 있었다. (背中越に聞こえてきた男のぶっきらぼうな言い方には暖かい情が感じられる。)『父』
- d) 그 늦은 시간에도 집 안은 온통 불빛으로 환했다. (遅い時間にも家の中は灯りで明るかった。)『父』
- 정수는 한참 동안의 멍한 진동이 끝난 뒤 술잔을 입 안으로 부었지만 아무런 감촉도 느끼지 못했다. (チョンスはしばらくにぶい振動が終った後、酒を飲んだが何の感觸も感じられなかった。)『父』

헝하니 들어간 눈, 하루가 달리 검누렇게 변해가는 낮빛… (目がおちくぼんで
精気がなく、日毎に黒みがかって黄色く変わっていく顔色…) 『父』

메마르고 탁하게 갈라지는 그의 목소리가 곤혹스러운 듯 들렸다. (干からびて
がらがらとした彼の声が困惑したように聞こえた。) 『父』

(85a)は単一形オノマトペを語幹とする例であり、(85b)は反復形オノマトペを語幹とする例である。多くの場合、次のように単一形語幹と反復形語幹との対ができる。

(86)	볼록하다	物の表面がいくらか膨れ上がっているようす
	볼록볼록하다	膨れ上がっている
	묵직하다	ずっしり重い
	묵직묵직하다	いずれも皆ずっしり重い
	포근하다	柔らかくて暖かい／ふわふわしている
	포근포근하다	ふかふかだ
	시큰하다	ずきんずきん痛む
	시큰시큰하다	ずきんずきんする
	물렁하다	ふにゃっと／ぐにゃっとしている
	물렁물렁하다	ぶよぶよ／どろどろしている
	뿔족하다	先がとがっている
	뿔족뿔족하다	複数のものが等しく先がとがっている
	새콤하다	やや酸っぱい
	새콤새콤하다	多くのものが非常に酸っぱい、非常に酸っぱい
	시끌하다	やかましい、騒々しい
	시끌시끌하다	非常にやかましい／騒々しい
	뜨끈하다	非常に熱い
	뜨끈뜨끈하다	非常に熱い、ほかほかしている
	후끈하다	顔や体が熱気を感じて急にほてるようす
	후끈후끈하다	ぼかぼか／かっかっしている
	가름하다	やや長めだ
	가름가름하다	(複数のものが)みな少し長めだ
	말랑하다	(物が)やわらかい
	말랑말랑하다	ふわふわしている
	거뜰하다	(物が)思ったよりずいぶん軽い
	거뜰거뜰하다	(複数のものが)みな軽いようす
	거뻑하다	かなり軽い

거뽯거뽯하다	(複数のものが)みなかなり軽いよう
굵직하다	粒が大きめだ
굵직굵직하다	複数のものがすべて大きい
그득하다	一杯だ
그득그득하다	どの杯にもなみなみと酒をつぐ
글썽하다	(目に)涙をためている
글썽글썽하다	涙ぐむ
길쭉하다	(幅のあるものなどが)やや細長い
길쭉길쭉하다	複数のものが皆やや細長い
까칠하다	やせて肌や毛につやがない
까칠까칠하다	ざらざらしている
꺼칠하다	かさかさしている
꺼칠꺼칠하다	表面が滑らかでない
날씬하다	すらりとしている
날씬날씬하다	複数のものがみなほっそりとしている
날캉하다	柔らかすぎて垂れそうだ
날캉날캉하다	ぐにゃぐにゃしている
납작하다	平たい、平べったい
납작납작하다	複数のものがみな平べったい

このような単一形語幹／反復形語幹の対がある場合、反復形は単一形の意味の強調、あるいは対象の複数性を意味する。

(85c)と(85d)は、それぞれ、1音節反復形の語幹と1音節語幹に「-하다」が付いた例である。いずれも「하다型」動詞にはほとんど見られないタイプの形式である。他の例を補えば次の通りである。

(87) a) 갑갑하다 (退屈だ、うっとうしい)	꼼꼼하다 (冷静できちようめんだ)
꽃꽃하다 (まっすぐだ)	굳굳하다 ((意志が)強い)
끈끈하다 (べとべととする)	넉넉하다 (十分だ、豊かだ)
단단하다 (しっかりしている)	덤덤하다 ((言うべきときに)黙っている)
든든하다 (心強い)	딱딱하다 (こちこちに固い)
똥똥하다 (ぼっちゃりしている)	튼튼하다 (強い)
반반하다 (顔立ちが整っている)	변변하다 (まあまあだ、立派だ)
멍멍하다 (呆然とする)	뻣뻣하다 (ぼそぼそしている)
뽕뽕하다 (こちこちだ)	뽕뽕하다 (ぎっしりだ)

백백하다 (非常に濃い)	뻗뻗하다 (こちこちにこわばっている)
선선하다 (さわやかだ)	섭섭하다 (名残惜しい、残念だ)
시시하다 (くだらない)	쌀쌀하다 (肌寒い、冷たい)
얼얼하다 ((口の中が)ひりひりする)	짱짱하다 (頑丈でがっしりしている)
쟁쟁하다 (かんかん照りつける)	짹짹하다 (後味が悪い)
충충하다 (ぎっしり生えている)	씩씩하다 (勇ましい、りりしい)
찹찹하다 (なんとなく気まずい)	축축하다 (しっとりしている)
축축하다 (じめじめしている)	깜깜하다 (真っ暗だ)
킴킴하다 (真っ暗だ)	퀴퀴하다 ((物が腐ったりして)臭い)
탄탄하다 (がっしりしている)	탱탱하다 (はちきれそうだ)
통통하다 (ぼんぼん音がする)	튼튼하다 (丈夫だ)
팍팍하다 (足が重い)	팔팔하다 (こらえ性がなくせっかちだ)
팽팽하다 (びんと張っている)	훤훤하다 (こちんまりしている)
b) 뚱하다 (口数が少なく無愛想だ)	뚱하다 (まばらだ)
뻘하다 (分かりきっている)	뻘하다 (呆然としている)
짱하다 (じいんとする)	훤하다 (薄明るい)

「-하다」に次いで生産性が高い接尾辞は「-스럽다」/sûrôpta/であるが、使用頻度はあまり高くない。大半は(87a)のように単一形オノマトペに付くが、(87b)のように1音節反復形を語幹とするものもいくつかある。多くは「하다型」形容詞と交替する。

- (88) a) 불통스럽다 (口の利き方がぶっきらぼうだ) < 불통불통 (ぶっきらぼうに)
 엉뚱스럽다 (突拍子もない) ⇔ 엉뚱하다 (とんでもない)
 가랑스럽다 (似つかわしくない) ⇔ 가랑맞다 (似つかわしくない)
 거드름스럽다 (見るからに尊大ぶっている) ⇔ 거드름피우다 (いばる)
 게정스럽다 (不平たらたらだ) < 게정게정 (ぶつぶつ)
 감쪽스럽다 (こましゃくれたところがある) ⇔ 감쪽하다 (こましゃくれている)
 끝금스럽다 (すっきりしている) ⇔ 끝금하다 (すっきりしている)
 끔찍스럽다 (むごたらしい) ⇔ 끔찍하다 (むごたらしい)
 능글스럽다 (ずうずうしい) ⇔ 능글맞다 (とてもずうずうしい)
 능청스럽다 (しらじらしい) ⇔ 능청맞다 (しらじらしい)
 바지런스럽다 (見るからにまめめめしい) ⇔ 바지런하다 (まめめめしい)
 비아냥스럽다 (皮肉っぽい) ⇔ 비아냥하다 (皮肉っぽく言う)
 수선스럽다 (騒々しい) ⇔ 수선떨다 (しきりに騒がしくふるまう)
 수월스럽다 (たやすい) ⇔ 수월하다 (たやすい、容易だ)
 시들스럽다 (気乗りがしない) ⇔ 시들하다 (気にくわない、気乗りしない)
 시원스럽다 (さっぱりしている) ⇔ 시원하다 (涼しい、すがすがしい)
 악착스럽다 (粘り強い) ⇔ 악착같다 (がむしゃらだ、粘り強い)

- 억척스럽다 (がむしゃらだ) ⇔ 억척같다 (가むしゃ라다、粘り強い)
 안달스럽다 (いらいらする) ⇔ 안달하다 (いらいらする)
 앙상스럽다 (やせ衰えて見える) ⇔ 앙상하다 (葉が落ちて枝ばかりが残っている)
 야릇스럽다 (おかしい) ⇔ 야릇하다 (おかしい)
 영큼스럽다 (とても腹黒い) ⇔ 영큼하다 (腹黒い)
 이지렁스럽다 (知らん振りしている) ⇔ 이지렁떨다 (わざととぼけるふりをする)
 주접스럽다 (がつがつしている) ⇔ 주접떨다 (がつがつする)
- b) 펄펄스럽다 (短気でせっかちだ) ⇔ 펄펄하다 (短気でせっかちだ)
 팔팔스럽다 (こらえ性がなくせっかちだ) ⇔ 팔팔하다 (こらえ性がなくせっかちだ)
 쌀쌀스럽다 (冷たい) ⇔ 쌀쌀하다 (冷たい)
 끈끈스럽다 (べとべとする) ⇔ 끈끈하다 (べとべとする)
 뻘뻘스럽다 (ずうずうしい) ⇔ 뻘뻘하다 (ずうずうしい)
 뻘뻘스럽다 (ふてふてしい) ⇔ 뻘뻘하다 (ふてふてしい)
 간간스럽다 (気難しくてねちっこい) ⇔ 간간하다 (気難しくてねちっこい)

オノマトペ形容詞を派生する接尾辞には、朴東根(パク・トンゲン)(1997:93)によればその他に次のようなものがある。

- (89) a) -어ㅎ다 /ôt'a/
 서느렇다 (やや冷たい) ⇔ 서늘하다 (ひんやりしている)
 사느렇다 (冷え冷えする) ⇔ 사늘하다 (ひんやりしている)
 둥그렇다 (まんまるい) < 둥글둥글 (まるまる、くりくり)
- b) -맞다 /matta/
 양증맞다 (不釣り合いに小さい) ⇔ 양증하다 (よく整っていてかわいらしい)
 능청맞다 (そらとぼけている) ⇔ 능청떨다 (そ知らぬふりをする)
 가랑맞다 (似つかわしくない) ⇔ 가랑스럽다 (似つかわしくない)
 능글맞다 (とてもずうずうしい) < 능글능글 (ずうずうしいようす)
 징글맞다 (いやらしいほどしつこい) < 징글징글 (ひどく気味悪いようす)
 쌀쌀맞다 (冷淡だ) ⇔ 쌀쌀하다 (冷たい、冷やかである)
- c) -ㅁ다 /pta/
 간지럽다 (くすぐったい) < 간질간질 (くすぐったいようす)
 미끄럽다 (滑らかだ) < 미끈미끈 (つるつる/すべすべ)
 번지럽다 (つやつやしている) < 번질번질 (びかびか/てかてか)
 부드럽다 (やわらかい) < 부들부들 (感触が非常に柔らかいようす)
 뻘드럽다 (つやがあつて滑らかだ) < 뻘들뻘들 (つやつや)
 시끄럽다 (やかましい) ⇔ 시끌시끌하다 (非常にやかましい/騒々しい)

어지럽다(目まいがする) < 어질어질(目まいがするようす／くらくら)

d) -지다 /chida/

아롱지다(まだらだ) < 아롱다롱(点などが不揃いにちりばめられたようす)

질푼지다(ぬかるんでいる) ⇔ 질푼하다(ぬかるんでいる)

끈적지다(粘り強い) < 끈적끈적(ねばねば／べとべと)

e) ゼロ派生

거칠다((粒や目が)粗い) < 거칠거칠(表面がざらざらしているようす)

둥글다(丸い) < 둥글둥글(まるまる)

보풀다(毛羽立つ) < 보풀보풀(けばけば)

삐뚤다(傾いている) < 삐뚤삐뚤(目まいがするようす／くらくら)

비뚤다(曲がっている) < 비뚤비뚤(くねくね)

까딱없다(びくともしない) < 까딱까딱(こっくりこっくり)

꼼짝없다(なすすべがない) < 꼼짝꼼짝(もそもそ)

끄떡없다(びくともしない) < 끄떡끄떡(こっくりこっくり)

서슴없다(ためらわない) < 서슴서슴(もじもじ)

2.5.3 名詞的用法

日本語でも韓国語でもオノマトペ名詞の使用頻度は高くない。しかしながら、いずれの言語においても実に多様なオノマトペ名詞が造られており、いわば、オノマトペ語彙と一般語彙の橋渡しの役割を果たしている。

2.5.3.1 日本語の場合

日本語のオノマトペ名詞には、オノマトペが直接名詞化される場合と、オノマトペと一般名詞が結合して複合名詞を形成する場合とがある。以下の解説は、田守(1993)および田守・スコウラップ(1999)に負うところが大きい。

(90) a) …ピオラ女王とやはは縞のアッパッパみたいなものを着こんだオカミさんである。『航海記』

インドの奥地で警官とゴタゴタを起したときにブツ放したら相手は倒れてしまったという。『航海記』

淵の水には、おおきなぶちぶちがたくさんできて、水だか石だかわからなくなっていました。『風の又三郎』

b) その画面の外でNHKのアナウンサーがおろおろで騒ぎたてている。『吉里吉里』

二人の胴間声ときんきん声は二百米(メートル)四方へ轟きわたり、たちまち道路上から人影が絶えた。『吉里吉里』

…カンシャクもちでネゴトもちでヤブニラミでキンキラ声の…『航海記』

くねくね人間が口を尖らせたとき、男のアナウンサーの硬質な声がトランジスタから飛び出した。『吉里吉里』

このふんではいざ実物を見るときにはポンポン蒸気くらいに縮小してしまいそうである。『航海記』

…ほの暗いぶら提灯の灯をたよりの…『森』

…街道での乗物は人力車はべつとして、神田の万世橋からでて、路上に馬ふんを散らして走るガタ馬車のほかはなかった。『森』

…窓から軀(み)を乗り出して向いの窓から聞えてくるチョビ髭の中年男の声に上半身を耳にしている。『吉里吉里』

…ビールをがぶ飲みし酒を舐めながら開始時間を待っている。『吉里吉里』

…いきなりザンブと大波がきたと思ったら、もう私は頭のテッペンからどこからどこまでズブ濡れになっていた。『航海記』

それから気をとり直してビシヨ濡れのズボンを拾い…『航海記』

烈しい風と雨にぐしよぬれになりながら、二人はやっと学校へ来ました。『風の又三郎』

名字は同じ井上でも、靖と友一郎がごちゃませになつては困るのです。『吉里吉里』

田舎からぼつとでの小娘にはすべてが理解に遠い話題であったが…『森』

車室の中は、青い天蚕絨(びろうど)を張った腰掛けが、まるでがら明きで…『銀河鉄道』

オノマトペは(90a)のように単独で名詞として用いられていることもあり、また、(90b)のように一般語名詞と結合して複合名詞を形成することもある。

2.5.3.1.1 名詞

オノマトペがそのままの形で名詞化された例の典型として、次のような幼児語を挙げることができよう。いずれも鳴き声や音を表わす擬声語・擬音語がその主体を表わすように転用されたものである。

- | | | |
|--------------|-----------|-----------|
| (91) カーカー(鳥) | ワンワン(犬) | ニャーニャー(猫) |
| チューチュー(鼠) | チュンチュン(雀) | モーモー(牛) |

メーメー(山羊)	ガラガラ(玩具の一種)	コンコン(咳、狐)
ゴロゴロさん(雷)	チュルチュル(麺類)	ブーブー(車、豚)
ポンポン(腹)		

オノマトペの名詞化は幼児語に限られているわけではない。次のようなオノマトペは、「～するもの、～したもの」の意味で名詞として用いられる場合がある。

(92)	ぐりぐり	ざらざら	どろどろ	ぬめぬめ	ぬるぬる
	ねちゃねちゃ	ねばねば	ひらひら	ぶつぶつ	ぶつぶつ
	ぼこぼこ	ぼろぼろ	もやもや		

類音反復形の「でこぼこ」もこの類である。擬情語の「いらいら」、「むかむか」も「いらいらが募る」や「胸のむかむかが取れない」のように名詞的に用いられることがある。その他、反復形のオノマトペ名詞としては「ごたごた」、「しゃぶしゃぶ」があるが、後者は肉料理の名前である。肉を洗うようにして食べることから生じた名称であると思われる。

反復形以外の形態のものとしては、次のようなものがある。

(93)	カナカナ	ガチャガチャ	カッコウ	スイッチョン	ツクツクポーシ
	ガタ(が来る)	トンカチ	パチンコ	チャンバラ	カチンコ
	ピカドン	ドンパチ			

また、オノマトペは描写性が豊かであるために次の例のように商標名にされることも多い。

(94)	コロピタ(事務用糊)	サッサ(掃除用ナブキン)	ザブ(洗剤)
	スッキリ(目薬)	タントン(肩叩き)	ハッキリ(頭痛薬)

2.5.3.1.2 複合名詞

オノマトペを含む複合名詞は、元になる表現形式により用言修飾型と体言修飾型に分けることができる。用言修飾型のものとしては、まず、2拍反復形のオノマトペ様態副詞と動詞の結合に由来する複合名詞がある。この場合には単純にオノマトペと動詞の名詞形を結び付ければよい。

- (95) かんかん照り < かんかん(と)照る
 きりきり舞い < きりきり(と)舞う
 ぎゅうぎゅう詰め < ぎゅうぎゅう(と)詰める
 くすくす／にやにや笑い < くすくす／にやにや(と)笑い笑う
 ぐるぐる巻き < ぐるぐる(と)巻く
 ざあざあ／ざんざん降り < ざあざあ／ざんざん(と)降る
 ずるずる延ばし < ずるずる(と)延ばす
 ひそひそ話 < ひそひそ(と)話す
 ぶらぶら／よちよち歩き < ぶらぶら／よちよち(と)歩く

同じ2拍反復形のオノマトペでも結果副詞として機能するもの場合には、複合名詞化するとき反復形ではなく単一形(あるいは単一形語基)となる。

- (96) がら空き < がらがらに空く
 ぐしょ濡れ < ぐしょぐしょに濡れる
 ごちゃ混ぜ < ごちゃごちゃに混ぜる
 ばら売り < ばらばらに売る
 ばらまき < ばらばらにまく
 びしょ濡れ < びしょびしょに濡れる
 ぶつ切り < ぶつぶつに切る
 ぼろ負け < ぼろぼろに負ける
 めった斬り < めっためたにきる

「ごった煮」と「めった切り」は、「ごたごた」、「めためた」という完全反復形ではなく、促音を挿入した「ごったごた」、「めっためた」という強調形に由来する。

単一形のオノマトペからも複合名詞が造られる。

- (97) がぶ飲み < がぶっと飲む
 ぐい飲み < ぐいっと飲む
 ころ負け < ころっと負ける
 ごろ寝 < ごろっと寝る
 ずる剥け < ずるっと剥ける
 ちょんがけ(相撲の技) < ちょんとかける
 つるっ禿 < つるっと禿げる
 べた焼き < べたっと焼く
 べた塗り < べたっと塗る
 ぼい捨て < ぼいと捨てる
 ほろ酔い < ほろっと酔う

他にも、用言修飾型のオノマトペ複合名詞と思われる表現がいくつかある。「ごり押し」は「ごりごり押す」のような表現から来ているように思われるが、これは一般的な動詞句ではない。「どしゃ降り」は「土砂降り」のように漢字表記されるが、これは当て字でやはり「どしゃ」はオノマトペではないかと思われる。ただし、「どしゃどしゃ/どしゃっと降る」のような表現は使われない。「うたた寝」の「うたた」は「うとうと(と)寝る」の「うとうと」の転じたものであろう。「がんじがらめ」もこの類のように思われるが「がんじ」に当たるオノマトペが見当たらない。「どんちゃん騒ぎ」は「どんちゃんと騒ぐ」から来たものであろう。「どんでん返し」も「どんでんと返す」のような表現に由来すると思われるが、使われない動詞句である。「ピンはね」は「びんとはねる」からだろうが、この動詞句も使われない。これらの表現は用言修飾型のオノマトペ複合名詞であると考えられるが、元の表現が使われず名詞として孤立してしまったものである。

「のろのろ運転」や「のんびり旅行」のような表現は、それぞれ、「のろのろ(と)運転する」、「のんびり(と)旅行する」に由来するとも考えられるが、「のろのろとした運転」、「のんびりとした旅行」から来るものとみなし、体言修飾型複合名詞として扱うことにする。

体言修飾型オノマトペ複合名詞は、「オノマトペを含む体言修飾節＋名詞」の

構造が簡潔化されて生じたものである。修飾節の中でオノマトペが果たす機能は様々である。

- (98) がらがら声 < がらがらとした声
 だらだら坂 < だらだらとした坂
 ボンボン時計 < ボンボンと鳴る時計
 みんな蝉 < みんなと鳴く蝉
 きらきら星 < きらきら(と)光る星
 にこにこ顔 < にこにこ(と)微笑む顔
 ほかほか弁当 < ほかほかと温かい弁当
 ばらばら死体 < ばらばらにされた死体
 よれよれズボン < よれよれになったズボン

「ばらばら死体」と「よれよれズボン」の「ばらばら」と「よれよれ」は結果副詞であるが、用言修飾型の場合とは異なり、結果副詞であっても反復形のまま複合名詞の構成要素となっている。

類例を挙げると次のようなものがある。

- | | | | | |
|------|---------|------------|---------|--------|
| (99) | がりがり亡者 | きんきん声 | くねくね道 | くりくり坊主 |
| | くるくる寿司 | さくさく感 | すけすけルック | ずーずー弁 |
| | だらだら坂 | チンチン電車 | デンデン太鼓 | とんとん拍子 |
| | にこにこ顔 | にいにい蝉 | のろのろ運転 | ばらばら事件 |
| | ばらばら死体 | パラパラ写真 | びちびちギャル | ふかふか饅頭 |
| | ぶらぶら病い | ぺろぺろキャンディー | | ぺんぺん草 |
| | ほくほく顔 | ぼさぼさ頭 | ホロホロ鳥 | ボンボン蒸気 |
| | よぼよぼ爺さん | よれよれズボン | るんるん気分 | |

「がりがり亡者」は「自分の利益だけを考える人」の意味であり、この「がりがり」は「がりがりひっかく」、「がりがり勉強する」、「がりがりにやせる」などのオノマトペ「がりがり」とは関係がなく、漢字で「我利我利」と表記される。したがって、オノマトペ複合名詞の例に含めるのは適当ではないかもしれないが、

語感的には同類と感じられているのではないかと思われる。「さくさく感」、「ずーずー弁」の「感」と「弁」は独立の名詞ではなく、「爽快感」、「大阪弁」の場合と同じく接尾辞と見なすべき要素である。したがって、派生名詞として別扱いにすべきものであるが、例の数が限られているので便宜的に複合名詞に含めた。「くりくり坊主」は「坊主」のことではなく、「髪をくりくりに剃った坊主頭」の意味であり、同様に「ポンポン蒸気」は「蒸気」のことではなく、「ポンポンと音をたてて進む蒸気船」の意味である。このように、主要語の一般名詞も簡略化されることがある。「ばらばら事件」は事件がばらばらであるというのではなく、「ばらばら死体事件」あるいは「ばらばら殺人事件」の簡略化されたものである。

オノマトペの部分は反復形に限られず、様々なタイプの単一形オノマトペも可能である。2拍単一形の例としては次のようなものがある。

- (100) きよろ目 < きよろっとした目
 きら星 < きらっと光る星
 そよ風 < そよ(そよ)と吹く風
 どか雪 < どかっと降る雪
 とろ火 < とろとろ燃える火
 どた靴 < どたっとした靴
 ばりソバ < ばりっとしたソバ

このタイプの例としては他に「ガリ版」、「チャラ銭」、「がり勉」、「こそ泥」、「どか弁」などがあるが、いずれも(100)のような典型的なものではない。「ガリ版」は「原紙をがりがり切って刷る印刷(機)」の意味で明らかにオノマトペを含むけれども、「版」は独立の名詞ではなく「凸版」などの場合と同じく接尾辞的要素である。「チャラ銭」の「銭(せん)」も「賽銭」、「釣り銭」の場合と同様接尾辞である。「がり勉」と「こそ泥」は、それぞれ、「がりがりとする勉強」と「こそこそした泥棒」に由来するが、主要語の一般名詞の「勉強」と「泥棒」までが簡略化された例である。「どか弁」もこれと同様に「どかっとした弁当」が簡略化されたも

のと解釈されるが、「土方弁当」の縮約だとする説もある。しかし、後者の解釈が正しいとしても、この表現が一般的に使用される過程でオノマトペ的語感が作用していたことは確かであろう。

その他に、次のように様々なタイプのオノマトペを要素とする複合名詞がある。⁴⁶

(101)	あっさり味	ぎっくり腰	ぐうたら亭主	ざんばら髪
	しわくちゃ婆さん	そっくりショー	ちゃっかり娘	ちょび髭
	チンドン屋	でこぼこ道	どさくさ紛れ	どたばた喜劇
	どつきりカメラ	どんちゃん騒ぎ	のんびり屋	のんびり旅行
	びっくり箱	ぴったり賞	ぼっくり病	むっつり助平
	ポテンヒット	ほんわかムード		

最後に、必ずしも名詞というわけではないが、次のようにオノマトペを第2要素とする複合表現もある。

(102)	汗だく	金ぴか	草ぼうぼう	髭ぼうぼう	新婚ほやほや
	熱気むんむん	腹ぺこ			

2.5.3.2 韓国語の場合

韓国語のオノマトペ名詞については、朴東根(パク・トンゲン)(1997)が詳細な分析をしている。以下の解説はこれに負うところが大きい。

2.5.3.2.1 名詞

日本語の場合とは違って、韓国語ではオノマトペがそのままの形で名詞として使われるという例は極めて少ない。鶏を指すのに「丑丑」/kko-kko/というが、

⁴⁶ 「チンドン屋」、「のんびり屋」の「屋」や「ぼっくり病」の「病」は独立の語ではなく接尾辞と見なすべきである。したがって、これらの表現は厳密には複合名詞ではないけれども、(99)の「さくさく感」、「ずーずー弁」の場合と同じ理由で便宜的に複合名詞の類に含めた。

これは鳴き声の擬声語を直接名詞化したものである。揶揄的に女の子を指す表現の「지지배」/chijibæ/は、ヒバリの鳴き声を表わすオノマトペの「지지배배」/chiji-bæbæ/が転じたものである。韓国でも大流行したポケベルは「삐삐」/ppi-ppi/という。電子音を表わすオノマトペが商標名になり、やがて一般語化したものである。頬などに軽くチュッとするキスのことを「뽀뽀」/ppo-ppo/というが、これもオノマトペ名詞であると考えられる。ただし、「뽀뽀」が副詞的に使われることはない。「얼룩」/ölluk/(まだら)は「얼룩얼룩」/ölluk-ölluk/(まだらに)という反復表現があるためオノマトペに数えられるが、これはオノマトペが一般語の「얼룩」から派生した可能性もある。

オノマトペをそのままの形で名詞化することはほとんどない代わりに、韓国語ではオノマトペを名詞化する接尾辞が多様かつ豊富に用いられる。逆に、日本語ではオノマトペについてこの派生法はあまり見られず、「うっかり屋」、「のんびり屋」の「-屋」ぐらいしかない。

オノマトペを名詞化する接尾辞のうち最も生産的なものは「-이」/i/である。(103a)のように「人」を表わす場合、(103b)のように「動物」を表わす場合、(103c)のように「もの」を表わす場合がある。

- (103) a) 까불이(軽薄な人、おっちょこちょい) < 까불까불(軽率にふるまう様子)
 깐깐이(しつこい人) < 깐깐하다(しつこい、ねちねちしている)
 껌떡이(食いしん坊、欲ばり) < 껌떡껌떡(ごくごく)
 껌렁이(いいかげんな人、ろくでなし) < 껌렁껌렁하다(いいかげんだ)
 정충이(のっぽ) < 정충하다(脚が長い)
 꼬부랑이(腰の曲がった人) < 꼬부랑꼬부랑(曲がりくねっているようす)
 껌껌이(ことあるごとに怒鳴り散らす人) < 껌껌(怒鳴り散らす声)
 꿀꿀이(豚のように貪欲な人) < 꿀꿀(豚が鼻を鳴らす音)
 날씬이(ほっそりした人) < 날씬하다(すらっとしている)
 달랑쇠(おっちょこちょい) < 달랑달랑(そそっかしく)
 덜렁이(あわてんぼう) < 덜렁거리다(そそっかしくふるまう)
 더필이(おっちょこちょい) < 더필더필(そそっかしくふるまう)
 뚝뚝이(利口な子、お利口さん) < 뚝뚝하다(賢い、利口だ)
 뚱뚱이(でぶ、太っちょ) < 뚱뚱하다(太っている)

- 떨떨이(うすのろ、ばか) < 떨하다(ばかみたいだ)
 멍청이(ばか、まぬけ、あほう) < 멍청하다(間抜けだ)
 비뚤이(つむじまがり) < 비뚤비뚤(くねくね)
 삐뚤이(ひねくれ者) < 삐뚤삐뚤(くねくね)
 삐뚤이(ひねくれ者) < 삐뚤삐뚤(よろよろ、くねくね)
 시시덕이(はしゃぎ屋) < 시시덕거리다(はしゃぐ)
 오그랑이(性根が曲がった人) < 오그랑오그랑(所々凹んだり縮れているさま)
 째째이(あちこちせわしくうろつき回る人) < 째째거리다(せわしく歩き回る)
 쫄쫄이(軽はずみで視野の狭い人) < 쫄쫄((少量の水が)速く流れる音)
 찼찼이(足の悪い人) < 찼찼(ひどくびっこを引くようす)
 출랑이(おっちょこちよい、あわて者) < 출랑출랑(おっちょこちよいに)
 쿵쿵이(鼻をくんくん鳴らす癖のある人) < 쿵쿵(くんくん)
 털털이(細かいことにこだわらない人) < 털털하다(おおらかだ、気さくだ)
 텅텅이(おおらかな人) < 텅텅하다(おおらかだ、ざっくばらんだ)
 헐렁이(軽率な人、おっちょこちよい) < 헐렁거리다(軽々しくふるまう)
 흘쭉이(やせこけた人) < 흘쭉하다(げっそりとやせている)
- b) 멥꽁이(ジムグリガエル) < 멥꽁멍꽁(ジムグリガエルの鳴き声)
 멍멍이(犬、わんわん) < 멍멍(わんわん)
 부엉이(コノハズク) < 부엉부엉(フクロウの鳴き声、ホーホー)
 얼룩이(まだら模様の動物) < 얼룩얼룩((整然と)まだらになっているようす)
 얼렁이(まだら模様の動物) < 얼렁얼렁(まだらになっているようす)
 베짖이(ウマオイムシ) < 베짖베짖(ウマオイムシの鳴き声)
- c) 고부랑이(曲がったもの) < 고부랑고부랑(くねくね)
 구부렁이(曲がったもの) < 구부렁구부렁(曲がりくねったようす)
 깜박이((俗)自動車の点滅灯) < 깜박깜박(ちらちら)
 꼬부랑이(曲がったもの) < 꼬부랑꼬부랑(くねくね)
 꾸부렁이(曲がったもの) < 꾸부렁꾸부렁(くねくね)
 끈끈이(鳥もち、はえとり紙) < 끈끈하다(べとべとする)
 남남이([幼児語]食べ物、おやつ) < 남남([幼児語]舌鼓を打つ音)
 동강이(切れ端) < 동강동강(長いものがいくつにも折れるようす、きれぎれ)
 딸딸이((俗)三輪車) < 딸딸(ごろごろ)
 땡땡이(でんでん太鼓) < 땡땡(かんかん、ちんちん)
 알룩이(まだら模様、斑点、ぶち) < 알룩알룩(まだらに)
 물컹이(ぐにゃぐにゃしたもの) < 물컹물컹(ぐにゃぐにゃ)
 얼룩이(斑点) < 얼룩얼룩(まだらに)
 얼렁이(まだらな模様の点、まだら模様のもの) < 얼렁얼렁(まだらに)
 오뚝이(起きあがりこぼし) < 오뚝오뚝(によきによき)
 쭈그렁이(しわくちャのもの) < 쭈글쭈글(しわくちャ)
 팽이(こま) < 팽(くるっと、くるくる)
 흔들이(振り) < 흔들흔들(ゆらゆら、ぶらぶら)

次の例のように「-리」/ri/や「-기」/ki/で終わるものもかなりある。「-리」と「-기」は独立の接尾辞ではなく、それぞれ、「ㄹ」/l/と「ㄱ」/k/で終わるオノマトペに「-이」を付けたものが綴りの変化を起したに過ぎない。これらは動物の名前に多い。

- (104) a) 개구리(蛙) < 개굴개굴(ゲロゲロ)
 피꼬리(ウグイス) < 피꿀(ウグイスの鳴き声)
 *꿀꾸리([幼児語]豚) < 꿀꿀(ブーブー)
 딱따구리(キツキ) < 딱딱(かちかち、こつこつ)
 떠버리(おしゃべり、ほら吹き) < 떠벌리다(大げさに言う、ほらを吹く)
 종다리(ヒバリ) < 종달종달(ぶつぶつ、くどくど)
 주저리((垂れ下がっている)房) < 주질주질(だらりだらり)
 째짜리(あちこちせわしくうろつき回る人) < 째째(せかせか)
 탈타리(一文無し) < 탈탈(ばたばた、ばんばん)
- b) 깍두기(ダイコンの角切りのキムチ) < 깍둑깍둑(乱切りにするようす)
 기러기(ガン) < 기력기력(ガンの鳴き声)
 *꺽꺽기(事あるごとにわめいたり怒鳴り散らす人) < 꺽꺽(怒鳴り散らす声)
 *꺽꺽기(事あるごとにわめいたり怒鳴り散らす人) < 꺽꺽(怒鳴り散らす声)
 누더기(継ぎはぎの衣服) < 누덕누덕(継ぎはぎだらけのようす)
 따오기(トキ) < 따옥따옥(トキの鳴き声)
 *딱따기(キチキチバッタ) < 딱딱(かちかち、こつこつ)
 뽕부기(クイナ) < 뽕북뽕북(クイナの鳴き声)
 바스락기(かけら) < 바스락바스락(かさかさ、ごそごそ)
 뼈꾸기(カッコウ) < 뼈꼭뼈꼭(カッコウカッコウ)
 진드기(ダニ) < 진득진득(ねばねば)

オノマトペ名詞を派生する接尾辞には、「-이」の他に次のようなものがある。

- (105) a) -질 /chil/
 곤두박질(急に逆さまに落ちること) < 곤두박이다(頭から落ちる)
 더듬질(手探り) < 더듬더듬(手探りで)
 도리질(乳児が頭を左右振るしぐさ) < 도리도리도리(赤ん坊のあやし言葉)
 뒤적질(ひっかき回すこと) < 뒤적뒤적(ごそごそ、がさがさ)
 딸꾹질(しゃっくり) < 딸꾹딸꾹(ひっくひっく)
 버둥질(足をバタバタさせること) < 버둥버둥(手足をばたつかせるようす)
 부라질(赤ん坊をあやすこと) < 부라부라(赤ん坊のあやし言葉)

속닥질(ひそひそ話をする行為) < 속닥속닥(ひそひそ)
 씨부렁질(無駄口をたたく行為) < 씨부렁씨부렁(ぺちやべちや)
 죄암질(赤ん坊のにぎにぎ) < 죄암죄암(赤ん坊がにぎにぎをするようす)

b) - 증 /chûng/

갑갑증(うっとうしさ) < 갑갑하다(うっとうしい)
 답답증(もどかしさ) < 답답하다(もどかしい)
 벌떡증(ときどき状態) < 벌떡벌떡(胸が)ときどきする)
 심심증(ひどく退屈な気分) < 심심하다(退屈だ)
 안달증(やきもきする状態) < 안달복달하다(やきもきする)
 어질증(めまい) < 어질어질(くらくら)
 통통증(鬱積した怒りを発散できずいら立つこと) < 통통(ぶくぶく)
 허겁증(体が虚弱でおどおどする症状) < 허겁지겁(あたふた)
 헛헛증(空腹感) < 헛헛하다(空腹感を覚える)

c) - 병 /pyông/

시들병(筋萎縮症) < 시들시들(ややしおれて柔らかいようす)
 조춤병(ためらいがちな性格) < 조춤조춤(ためらうようす、もじもじ)
 주춤병(ぐずぐずしてなかなか決断しない癖) < 주춤주춤(ぐずぐず)

d) - 결 /kyôl/

엉겁결(とっさに) < 엉거주춤(するのかもしれないのかはっきりしないで)
 얼떨결(どさくさまぎれに) < 얼떨떨하다(頭がふらつく、めんくらう)

e) - 꾀 /kkun/

건달꾀(よた者、よた公) < 건들건들(ぶらぶら)
 덩병꾀(慌てん坊) < 덩병덩병(せかせか、あたふた)
 덜렁꾀(慌てん坊) < 덜렁덜렁(落ち着かずそそっかしいようす、ふらふら)

f) - 배기 /pægi/

악착배기(根気強い子供) < 악착같다(がむしゃらだ、粘り強い)
 앞둑배기(あばた面の人) < 앞둑앞둑(顔にあばたがまばらにあるさま)
 앞죽배기(あばた面の人) < 앞죽앞죽(大小のあばたが散らばっているさま)
 얼룩배기(まだら模様の動物や物) < 얼룩얼룩(まだらに)

g) - 뱅이 /pæng-i/

안달뱅이(すぐに気をもみいらいらする人) < 안달복달하다(ひどく気をもむ)
 알금뱅이(あばた面の人) < 알금알금(小さいあばたがまばらにあるようす)
 너털뱅이(大声で笑う人) < 너털너털(大声で笑うようす、げらげら)

h) -쟁이 /chæng-i/ / -장이 /chang-i/

콜록쟁이(長く咳をする病気にかかっている人) < 콜록콜록(ごほんごほん)
 꼼꼼쟁이(物事を几帳面に処理する人) < 꼼꼼하다(冷静で几帳面だ)
 꾹꾹쟁이(こせこせした人) < 꾹꾹하다(こせこせしている)
 만만쟁이(人に軽んじられる人) < 만만하다(くみしやすい、御しやすい)
 또드락장이(彫金師) < 또닥또닥(こつこつ、かちかち)

i) -보 /po/

똥똥보(でぶ、太っちょ) < 똥똥하다(太っている)
 똥보(むっつりした人、無愛想な人) < 똥하다(口数が少なく無愛想だ)

j) -쇠 /sœ/

달랑쇠(おっちょこちよい) < 달랑달랑(そそっかしく)
 덜렁쇠(そそっかしい人、あわてんぼう) < 덜렁덜렁(そそっかしく)
 알랑쇠(おべっかを使う人) < 알랑알랑(こびへつらうようす)
 얼렁쇠(おもねる人、ごますり) < 얼렁얼렁(こびへつらうようす)

2.5.3.2.2 複合名詞

日本語ではオノマトペに由来する用言修飾型複合名詞がかなり多様であるが、韓国語ではこのタイプの複合名詞はあまりない。次のように「걸음」/kôrm/(歩き)と「웃음」/usûm/(笑い)を含むものがいくつもある程度である。「걸음」と「웃음」は、それぞれ、動詞の「걷다」/kôtta/(歩く)と「웃다」/utta/(笑う)の名詞形である。

- (106) a) 똥똥걸음(小走り、早足) < 똥똥(しきりに軽く踏み鳴らすようす、とんとん)
 비척걸음(千鳥足) < 비척비척(よろよろ、よたよた)
 비틀걸음(よろよろした足どり、千鳥足) < 비틀비틀(ひよろひよろ、よろよろ)
 아장걸음(よちよち歩き) < 아장아장(よちよち)
 종중걸음(急ぎ足、小走り、早足) < 종중(すたすた)
 충충걸음(急ぎ足) < 충충거리다(あわただしいようす)
 통통걸음(とんとんと速く歩く足取り) < 통통(とんとん)
 텡텡걸음(どすんどすと歩く足取り) < 텡텡(どんどん)
- b) 깔깔웃음(高笑い、大笑い) < 깔깔(からから)
 꺾꺾웃음(高笑い、豪傑笑い) < 꺾꺾(からから)

너털웃음(豪傑笑い、高笑い) < 너털너털(げらげら)

一方、体言修飾型複合名詞は非常に多様かつ豊富である。

- (107) 더펄개(むく犬) < 더펄더펄(ふわふわ)+개(犬)
 멍멍개(犬、わんわん) < 멍멍(わんわん)+개
 북슬개(むく毛の大きな犬) < 북슬북슬(動物が太って毛が多いようす)+개
 건들바람(初秋の涼風) < 건들건들(そよそよ)+바람(風)
 산들바람(そよ風) < 산들산들(そよそよ)+바람
 선들바람(そよ風) < 선들선들(そよそよ)+바람
 소슬바람(もの寂しげに吹く秋風) < 소슬하다(肌寒くもの寂しい)+바람
 서늘바람((初秋の)涼風) < 서늘하다(涼しい)+바람
 솔솔바람(そよ風) < 솔솔(そよそよ)+바람
 솔바람(そよ風) < 솔솔(そよそよ)+바람
 보슬비(小雨、細雨) < 보슬보슬(しとしと)+비
 부슬비(小雨、こぬか雨) < 부슬부슬(しとしと)+비
 서늘비((初秋の)涼しい雨) < 서늘하다(涼しい)+비
 고부랑길(曲がりくねった道) < 고불고불(くねくね)+길(道)
 구부렁길(曲がりくねった道) < 구불구불(くねくね)+길
 꼬부랑길(曲がりくねった道) < 꼬불꼬불(くねくね)+길
 꾸부렁길(曲がりくねった道) < 꾸불꾸불(くねくね)+길
 따옥새(トキ) < 따옥따옥(トキの鳴き声)+새(鳥)
 뽐북새(クイナ) < 뽐북뽐북(クイナの鳴き声)+새
 삐꾹새(カッコウ) < 삐꾹삐꾹(カッコウの鳴き声)+새
 종달새(ヒバリ) < 종달종달(ぶつぶつ、くどくど)+새
 고수머리(縮れ毛) < 곱슬곱슬하다(縮れている)+머리(頭、髪)
 곱슬머리(縮れ毛) < 곱슬곱슬하다(縮れている)+머리
 까까머리(坊主頭、丸坊主) < 깎다(刈る)+머리
 더펄머리(ふさふさした髪) < 더펄더펄(ふわふわ)+머리
 종종머리(女の子の髪型の一つ) < 종종(ぎっしり)+머리
 쓰름매미(ツクツクボウシ) < 쓰름쓰름(ツクツクボウシの鳴き声)+매미(セミ)
 쌍쌍매미(니이니이데미) < 쌍쌍(니이니이데미의鳴き声)+매미
 감감소식(長い間消息がないこと) < 감감하다(真っ暗だ)+소식(消息)
 건들장마(初秋の気まぐれな長雨) < 건들건들(そよそよ)+장마(梅雨)
 까까중(くりくり頭、坊主頭) < 깎다(刈る)+중(僧)
 감감소식(長い間消息がとだえていること) < 감감하다(真っ暗だ)+소식(消息)
 감감절벽(話が全然通じない相手) < 감감하다+절벽(絶壁)

- 깜깜부지(全く知らないこと) < 깜깜하다+부지(不知)
 깜박불(ぱちぱちする火花) < 깜박깜박(ぱちぱち)+불(火)
 껌껌나라(目の前が暗くて何も見えないこと) < 껌껌하다(真っ暗だ)+나라(国)
 꼬꼬닭(鶏) < 꼬꼬(鶏の鳴き声)+닭(鶏)
 꼬부랑글자(曲がりくねって下手な字) < 꼬부랑꼬부랑(くねくね)+글자(文字)
 꼬부랑말([俗語]外国語) < 꼬부랑꼬부랑(くねくね)+말(言葉)
 꼬부랑할머니(腰の曲がったおばあさん) < 꼬부랑꼬부랑+할머니(おばあさん)
 꼬부랑늙은이(腰の曲がった老人) < 꼬부랑꼬부랑+늙은이(年寄り)
 꿀꿀돼지(豚) < 꿀꿀(ブタの鳴き声)+돼지(豚)
 꿀돼지(豚) < 꿀꿀(ブタの鳴き声)+돼지
 끈끈물(粘液) < 끈끈하다(ねばねばする)+물(水)
 깃소리((ほんの小さな)反論) < 깃깃(鋭く張り上げる叫び声)+소리(声)
 납작감(平べったい柿) < 납작하다(平べったい)+감(柿)
 납작보리(平麦、押し麦) < 납작하다+보리(麦)
 납작코(鼻べちゃの人の鼻) < 납작하다+코(鼻)
 납작호박(平べったいカボチャ) < 납작하다+호박(カボチャ)
 덜걱마루(がたがたきしむ板の間) < 덜걱덜걱(がたがた)+마루(板の間)
 덜렁말(暴れ馬、荒馬) < 덜렁덜렁(そそっかしい)+말(馬)
 딱성냥((どこでも)どこでも発火する)摩擦マッチ < 딱(かちっ)+성냥(マッチ)
 떨걱마루(がたがたする安普請の板の間) < 떨걱떨걱(がたがた)+마루(板の間)
 똑딱단추((衣服の)スナップ、ホック) < 똑딱(かちかち)+단추(ボタン)
 똑딱선(小型発動機船) < 똑딱(ぼんぼん)+선(船)
 말랑무우(切り干し大根) < 말랑말랑하다(ふわふわしている)+무우(大根)
 몽땅연필(短い鉛筆) < 몽땅하다(太くて短い)+연필(鉛筆)
 물렁뼈(軟骨) < 물렁물렁하다(ぶよぶよする)+뼈(骨)
 몽계구름(もくもくとわき出る雲) < 몽계몽계(もくもく)+구름(雲)
 바스락장난(軽いいたずら) < 바스락바스락(かさかさ)+장난(いたずら)
 보스락장난(こそこそとするいたずら) < 보스락보스락(こそこそ)+장난
 볼록렌즈(凸レンズ) < 볼록하다(幾分膨れ上がっているさま)+렌즈(レンズ)
 불뚝성(にわかにならむと起こる怒り) < 불뚝(かっど)+성(怒り)
 삐꾸종(カッコウ時計) < 삐꾸(카코오)+종(鐘)
 뽀족구두(ハイヒール) < 뽀족하다(先が細くなって尖っているようす)+구두(靴)
 서벽돌(もろい石) < 서벽서벽(さくさく)+돌(石)
 알록점(まだら模様、斑点) < 알록알록(まだらに)+점(点)
 알록천(まだら模様の布地) < 알록알록+천(布地)
 얼룩말(シマウマ) < 얼룩얼룩(まだらに)+말(馬)
 얼룩무늬(まだら模様) < 얼룩얼룩(まだらに)+무늬(模様)

얼럭소(まだらの牛) < 얼럭얼럭(まだらに)+소(牛)
 얼룩점(斑点、まだら) < 얼룩얼룩(まだらに)+점(点)
 움푹눈(窪目、金壺眼) < 움푹(ひどくへこんでいるようす)+눈(目)
 척척박사(物知り博士) < 척척(すらすら)+박사(博士)
 통통배(ぼんぼん蒸気) < 통통(とんとん)+배(船)
 종종모(ぎっしり植えた稲の苗) < 종종(ぎっしり)+모(苗)
 흔들바위(ゆらぎ石) < 흔들흔들(ゆらゆら)+바위(岩、石)
 흔들의자(揺り椅子) < 흔들흔들+의자(椅子)

また、複合名詞にさらに接尾辞「-이」/i/を付けた(108a)のような例や、(108b)のような接尾辞「-이」によるオノマトペ名詞と一般名詞の複合名詞もある。

- (108) a) 움푹눈이(目のくぼんだ人) < [움푹(べこん/ぼこんと)+눈(目)]+이
 툇눈이(出目金) < [툇(ぶくっと)+눈(目)]+이
- b) 눈깜작이(しきりにまばたきする人) < 눈(目)+[깜작(まばたくようす)+이]
 코짹짹이(鼻が詰まって鼻声になっている人) < 코(鼻)+[짹짹(ぶつぶつ)+이]
 꿀꿀이죽(粥状の豚のえさ) < [꿀꿀(ブタの鳴き声)+이]+죽(かゆ)
 땡땡이중(鉦を鳴らして回る托鉢僧) < [땡땡(かんかん)+이]+중(僧)

2.6 音声象徴

オノマトペの音声象徴に関しても日本語と韓国語は類似するところが多い。日韓両語の音声象徴の現われ方には2つの異なるタイプがある。1つは「ころころ」と「ごろごろ」あるいは「とんとん」と「どんどん」のように音の違いが語感を異にする交替形を造り出す場合である。いま1つのタイプは、オノマトペ語彙全体を見た場合に特定の音に多少なりとも一般的な意味的共通性が見られるという場合である。例えば、「さらさら」、「そよそよ」、「かさかさ」などのサ行音には「軽やかさ・さわやかさ」が感じられるとか、「ねばねば」や「ぬるぬる」などのナ行音には「粘っこさ」が感じられるという類のものである。第2のタイプの音声象徴は、オノマトペだけに限らず一般語彙にもある程度存在する。また、程度の差はあるがどの言語にも存在すると考えられるものである。しかし、交

替形を生み出す第1のタイプの音声象徴はオノマトペだけに限られる現象であり、どの言語にも見られる現象というわけではない。日本語や韓国語が高度に発達したオノマトペを持つとされる最大の理由は、このような音声象徴に基づく交替形が豊富に存在するためである。

「かたっ」、「かたかた」、「かたり」、「かたん」のようなオノマトペも同一のオノマトペ語基から派生する交替形であると考えられるが、この場合、交替形は単なる音の交替によって作られるのではなく、§2.4で見た反復や拡張という形態派生過程によって造られている。このような交替形に係わる音声象徴を形態象徴と呼ぶことにする。

2.6.1 日本語の場合

日本語では、母音の交替がオノマトペの交替形を造ることはほとんどなく、ごく一部の擬声語・擬音語にそれらしいものが見られる程度である。例えば、大坪(1989:118)は、笑い声を表わすオノマトペには次のような交替形があると述べている。

- (109) アハハ：明るくておおらかな笑い
 イヒヒ：鋭くて病的な笑い
 ウフフ：胸に一物ある含み笑い
 エヘヘ：下卑たお追従笑い
 オホホ：しとやかで上品な笑い

これに基づき、大坪(1989:119)は日本語の母音には一般的に次のような情感が具わっていると述べている。

- (110) ア：明るく大きな情感
 イ：小さく鋭い情感
 ウ：暗くてくすんだ情感

エ：明るくて締めりのない情感

オ：円やかで深みがあり、落ち着いた情感

そして、こうした情感は、「カラカラ」と「キリキリ」、「グルグル」と「ゴロゴロ」、「バタバタ」と「ベタベタ」、「ペトペト」と「ポトポト」など他の擬音語⁴⁷を比較してみても感じられるという。しかしながら、これらの語対は、(109)の笑い声の場合とは異なり、同一のオノマトペの交替形とは見なすことができない。「カラカラ」は明るい笑い声あるいは乾いた状態を意味するのに対して、「キリキリ」は刺すような鋭い痛みや忙しく立ち働く様子を表すオノマトペである。「グルグル」と「ゴロゴロ」は回転を表すという意味では共通性があるけれども、同一のオノマトペの交替形とは認めがたい。「グルグル」(あるいは「クルクル」)は場所を移動せずにその場で「回る」さまを表すのに対して、「ゴロゴロ」(あるいは「コロコロ」)は回りながら移動する「転がる」さまを表すからである。「バタバタ」ははためく音や走る足音を表す擬声語あるいは倒れるさまを表す語であり、「ベタベタ」は塗ったり貼ったりするさまを表す擬態語である。「ペトペト」はどの擬声語・擬態語辞典にも見当たらない意味不明の語であるが、しずくの落ちる音を表す「ポトポト」の交替形でないことは確かである。したがって、大坪の挙げている語対に見られる母音の違いは、語感が異なる交替形を造るものではなく、異なるオノマトペを成立させるものであって、(109)のような様々な笑い声のオノマトペに見られる母音の違いとはまったく性質が異なるものである。

しかしながら、大坪の言う情感(110)が根拠のないものであるかというところではない。金田一(1988:130)も「ア」は「大きいもの、荒いもの」を表わし、「イ」は「小さい感じ」がし、「エ」には「品のない感じ」がするとしている。このような

⁴⁷ 大坪は「擬音語」を広義に用いており本論文の「オノマトペ」と同義である。

感じ・情感は、次のようなオノマトペ群に共通するものとして浮かび上がってくるものである。前節に述べた第2のタイプの音声象徴である。

- (111) a) がーがー かつ かーん がさがさ かたかた
 がたがた がちゃん がつがつ がばがば がみがみ
 がやがや からから がりがり かんかん がんがん
 ざーざー ざくざく ざらざら じゃーじゃー じゃんじゃん
 だーだー だくだく だらだら ばかばか ばきばき
 ばくばく ばさばさ ばたばた ばらばら ばりばり
 ばんばん ばんばん わーわー わんさ
- b) ぎしぎし きちきち きびきび きらきら ぎりぎり きんきん
 しくしく しずしず しとしと しんしん ちかちか ちくちく
 ちびちび ちまちま ちらちら ちりちり ちろちろ ぴかぴか
 ひくひく びくびく びくびく ひしひし びしびし びちびち
 ひらひら ひりひり びりびり びりびり びんびん みしみし
- c) あけすけ あべこべ えへらえへら おめおめ ぐでんぐでん
 くねくね げーげー けたけた げたげた げっそり
 けばけば げぼげぼ けらけら げらげら げろげろ
 げんなり こせこせ ごてごて こてんこてん じめじめ
 ずけずけ せかせか ぜーぜー つべこべ てかてか
 でれでれ めめめめ ねちねち ねとねと ねばねば
 べきべき へこへこ べこべこ べこべこ へたへた
 べたべた べたべた べちやくちや べちやべちや べちやべちや
 へとへと べとべと へどもど へなへな へべれけ
 へらへら べらべら べらべら べりべり べろべろ
 ぺろぺろ ぼてぼて むせむせ めそめそ めらめら
 めりめり めろめろ

特に、(111c)の「エ」の印象が強く「エ」を含むオノマトペでマイナスの語感をまったく伴わないのは、「めきめき(上達する)」と「てくてく(歩く)」ぐらいではないかと思われる。「ウ」と「オ」については、音声象徴の力が上の3母音ほど強くはないようである。

なお、笑い声以外に母音の交替が語感の異なるオノマトペの交替形を生み出

す例としては、次のような擬音語の対がある。「ア」～「オ」の交替が多い。

- (112) がさがさ ～ ごそごそ
 がん ～ ごん
 だん ～ どん
 かたっ ～ ことっ
 がたん ～ ごとん
 かちかち ～ こちこち
 がつん ～ ごつん
 からん ～ ころん
 かりかり ～ こりこり
 がりっ ～ ごりっ
 さやさや ～ そよそよ
 ばりばり ～ ぼりぼり
 ばきっ ～ ぼきっ ～ べきっ
 ばりっ ～ べりっ
 だくだく ～ どくどく
 ぼん ～ ぼん
 ぼたぼた ～ ぼとぼと

一方、子音の場合は、よく知られているように清音(あるいは半濁音)/濁音の交替がオノマトペの交替形を生み出すのに活用されている。「カ行音」/「ガ行音」、「バ行音」/「バ行音」の交替によるものが多い。

- | | | | |
|-------|-----------|-----------|-----------|
| (113) | かくん/がくん | かさっ/がさっ | かつん/がつん |
| | かたっ/がたっ | かちっ/がちっ | かりっ/がりっ |
| | かん/がん | きーきー/ぎーぎー | きちきち/ぎちぎち |
| | きやっ/ぎやっ | きゅっ/ぎゅっ | きよろり/ぎよろり |
| | きらっ/ぎらっ | くいっ/ぐいっ | くくっ/ぐぐっ |
| | くしゃっ/ぐしゃっ | くたん/ぐたん | くつくつ/ぐつぐつ |
| | くにやっ/ぐにやっ | くらっ/ぐらっ | くるっ/ぐるっ |
| | けたけた/げたげた | けらけら/げらげら | けろけろ/げろげろ |
| | こそこそ/ごそごそ | こつん/ごつん | ことっ/ごとっ |
| | こりこり/ごりごり | ころっ/ごろっ | こん/ごん |
| | さくっ/ざくっ | さらっ/ざらっ | さわさわ/ざわざわ |

しっとり/じっとり	しゃりっ/じやりっ	しゃぶしゃぶ/じゃぶじゃぶ
しゅっ/じゅっ	するする/ずるずる	たらん/だらん
とろん/どろん	とん/どん	ばかっ/ばかっ
ばきっ/ばきっ	ばくばく/ばくばく	ばさっ/ばさっ
ばしっ/ばしっ	ばしゃっ/ばしゃっ	ばたっ/ばたっ
ばちっ/ばちっ	ばちやっ/ばちやっ	ばっ/ばっ
ぱっくり/ぱっくり	はらり/ばらり/ばらり	
ぱりっ/ぱりっ	ばん/ばん	びー/びー
ひくひく/びくびく	びしっ/びしっ	びしゃっ/びしゃっ
びたっ/びたっ	びちやっ/びちやっ	びたっ/びたっ
ひゅー/びゅー/びゅー	ひよこっ/びよこっ	ひりっ/びりっ/びりっ
ぶくっ/ぶくっ	ぶすっ/ぶすっ	ふっ/ぶっ/ぶっ
ふつつり/ぶつつり	ふらふら/ぶらぶら	ぺこっ/ぺこっ
ぺたん/ぺたん	ぺりっ/ぺりっ	ぺらぺら/べらべら
ぺろぺろ/べろべろ	ぼかり/ぼかり	ぼきぼき/ほきほき
ぼこん/ぼこん	ぼろぼろ/ぼろぼろ	ぼん/ぼん

このような子音の清濁の交替において、濁音は「大きさ」、「強さ」、「荒々しさ」、「重さ」などの象徴的意味を担っていると考えられる。

交替形の生成に係わらない子音の音声象徴に関しては、金田一(1988:131)が次のように述べている。

- (114) カ行：乾いた堅い感じ (カサカサ、カラカラ、キチツと)
 サ行：快い感じ、湿った感じ (サラサラ、シトシト)
 ナ行：ねばる感じ (ヌルヌル、ネバネバ)
 ハ行：軽く、抵抗感のない感じ (ヒラヒラ、フワフワ)

また、大坪(1989:120)は次のように子音の表わす象徴的意味を記述している。

- (115) 破裂音：強く、硬く、力の籠もった感じ (カタカタ、ゴトンゴトン、キッチリ、グイグイ、ダダダダ、バン、ピー、ポインなど)
 摩擦音：物の擦れ合う感じ (サラサラ、ズルズル、シュッシュュッ、ヒュウヒュウ、フツ)
 流音：滑らかに回転する感じ (カラカラ、ヒリヒリ、ブルブル、ヒラリヒ

ラリ、コロリコロリ)

鼻音：軟かく円やかで、粘りのある感じ（メソメソ、モクモク、ムニヤムニヤ、ネットリ、ヌラヌラ、ノロノロ）

§2.4でみたように、こうしたオノマトペの交替形は、反復、長音化、撥音・促音・「り」の添加などの過程によって形成されるのであるが、それぞれの過程の持つ意味が形態象徴である。形態象徴に関しては、金田一(1988:257)に次のような記述がある。

- (116) コロコロ : 転がり続けること
 コロリ : 一回ころがって止まる様子
 コロッ : ころがりかける様子
 コロリコロリ : ころがっては止まり、ころがっては止まる様子
 コロンコロン : はずみをつけてころがって行く様子
 コロリンコ : 一回ころがってははずみをもって止まり、あとは動きそうもない様子

長音についての言及はないけれども、形態象徴を非常に分かりやすく説明したものである。

形態象徴についての一般的な記述としては、大坪(1989:119)が、促音、撥音、長音について次のように述べている。

- (117) 促音：力の籠もった、急迫した感じを表し、しばしば、破裂的な感じや、破裂後の空虚な感じを伴う。(キッ、グッ、ドッ、バツ、ドカッ、ボカッ)
 撥音：弾力性あって、跳ねる感じを表し、しばしば、破裂的な感じや、鳴り響く感じを伴う。(ピョン、パーン、フンワリ、ヤンワリ、カンカンカン)
 長音：時間的に継続する状態や、空間的な広がりのある状態を表し、転じて強調に用いられる。(スー、カーン、ズラーツ、ユーラリユーラリ)

また、田守・スコウラップ(1999:26-9)には形態象徴に関してさらに詳しい記述がある。「ごろり」、「ぼきり」、「ぼろり」、「ぼとり」、「ばたり」の末尾の「り」

は、「ごろっ」、「ぼきっ」、「ぼろっ」、「ぼとっ」、「ばたっ」との比較などから、「ゆったりとした感じ」ないしは「完了(ひと区切り)」を表わすとしている。促音に関しては、「はっ」、「かっ」、「さっ」、「ばたっ」、「ぼきっ」、「ぼとっ」のように1拍あるいは2拍のオノマトペ語基に添加されるものは、「瞬時性」、「スピード感」、「急な終わり方」のような意味を表わすと言う。しかし、「ばっさり」、「ばったり」、「がっくり」におけるように語中に挿入される促音は、「ばさり」、「ばたり」、「がくり」などの対応形との比較から「強調」の挿入辞と見なすことができるので、末尾に添加されるものとは意味機能が異なるとしている。撥音に関しては、促音の場合と同様に語末に添加されるものと語中に挿入されるものがあるが、「ばん」、「ぼん」、「かん」、「ばたん」、「べたん」、「どきん」などのように1拍あるいは2拍のオノマトペ語基に添加されるものは、「共鳴」を表わすとしている。一方、「ぼんやり」、「ふんわり」、「げんなり」におけるような語中挿入の撥音は、語中に挿入される促音と同様に「強調」の挿入辞と見なすことも考えられるけれども、「ぼんやり」、「げんなり」には「*ぼやり」、「*げなり」のような撥音を含まない対応形がないので、これらの場合には「強調」の挿入辞と見なさない方がいいかもしれないと述べている。長音化については、「がー」、「ぐー」、「ぎゃー」、「ばーん」、「がーん」、「ごーん」など擬声語・擬態語に見られるものは、「自然界の物理的に長い音」を表わすとし、「かーっ(となる)」のような擬態語に用いられる長音は、「強調」の意味を表わすとしている。

最後に、日本語のオノマトペの中には次のように同じ母音で統一されたものがかなりある。特に「あ」と「お」に多いようである。

(118) a)	かさかさ	がさがさ	かしゃかしゃ	がしやがしや
	かたかた	がたがた	かちやかちや	がちやがちや
	がばがば	がやがや	からから	がらがら
	さばさば	さらさら	ざらざら	さやさや
	さわさわ	ざわざわ	だばだば	じゃかじゃか

	じやらじやら	たらたら	だらだら	ちゃかちゃか
	ちゃらちゃら	ばかばか	ばかばか	ばさばさ
	ばさばさ	ばしゃばしゃ	ばしゃばしゃ	ばたばた
	ばたばた	ばちゃばちゃ	はらはら	ばらばら
	わさわさ	わなわな		
b)	いじいじ	きしきし	ぎしぎし	きちきち
	ぎちぎち	きびきび	きりきり	ぎりぎり
	じりじり	ちびちび	ちりちり	ひしひし
	びしびし	びしびし	びちびち	びちびち
	みしみし			
c)	うるうる	くすくす	ぐすぐす	ぐずぐず
	くつくつ	ぐつぐつ	ぐにゆぐにゆ	くるくる
	ぐるぐる	すくすく	するする	ずるずる
	つるつる	にゆるにゆる	ぬるぬる	ぶくぶく
	ぶくぶく	ぶすぶす	ぶすぶす	ぶつぶつ
	ぶつぶつ	ぶるぶる	ぶるぶる	むくむく
	むずむず			
d)	でれでれ	へべれけ		
e)	きよときよと	きよろきよろ	こそこそ	ごそごそ
	こちよこちよ	ごちよごちよ	ことこと	ごとごと
	ごぼごぼ	ころころ	そろそろ	そろそろ
	そよそよ	ちよこちよこ	ちよろちよろ	とことこ
	とぼとぼ	とろとろ	どろどろ	によろによろ
	のこのこ	のそのそ	のろのろ	ひゆるひゆる
	ひよこひよこ	ひよろひよろ	ほろほろ	ぼこぼこ
	ぼそぼそ	ぼそぼそ	ぼとぼと	ほろほろ
	ぼろぼろ	ぼろぼろ	もこもこ	もごもご
	もそもそ	もぞもぞ	よろよろ	

このような例だけを見ると、日本語のオノマトペにも母音調和が働いているような印象を受けるけれども、実際は、次に示すように、日本語のオノマトペの内部での母音の組み合わせは自由である。

(119)

	あ	い	う	え	お
あ	さらさら	がりがり	ばくばく	(あけすけ)	がぼがぼ
い	いらいら	ひしひし	ぎすぎす	じめじめ	ひそひそ
う	ぐらぐら	ぷりぷり	ぶくぶく	ずけずけ	すごすご
え	てかてか	めきめき	てくてく	でれでれ	ぺろぺろ
お	ぼかぼか	どきどき	ごくごく	ぼてぼて	ころころ

したがって、(118)のような母音の一致は偶然の所産であるということになるけれども、口調のよさ、聞こえのよさという点では意味があるように思われる。

2.6.2 韓国語の場合

韓国語の音声象徴についても、日本語の場合と同様、交替形に係わるものと係わらないものがある。

日本語の場合とは異なり、韓国語では母音の交替が語幹を異にするオノマトペの交替形を造るのに積極的に活用されている。韓国語の母音は(120)のように陽母音と陰母音に区分され、この陰陽の母音の間には(121)のような語感の差があるとされる。

(120) 陽母音 : 아/a/, 오/o/, 애/æ/
陰母音 : 어/ø/, 우/u/, 에/e/

(121) 陽母音 : 小・少・狭・薄・明・密・美・善・固・鋭・軽・急・浅・清・親・剛・近・強
陰母音 : 大・多・広・厚・暗・粗・醜・悪・軟・鈍・重・緩・深・濁・疎・柔・遠・弱

このような陽母音と陰母音の違いにより、次のような語感を異にするオノマトペの交替形が造られている。

(122) a) 아/a/ ~ 어/ø/
반짝반짝 /pancchak-pancchak/ (きらきら)
번쩍번쩍 /pônccchôk-pônccchôk/ (びかびか)

바삭바삭 /pasak-pasak/ (かさかさ)
 버석버석 /pôsôk-pôsôk/ (がさがさ)
 찰싹 /ch'alssak/ (波打つ音:ばしゃっと)
 철썩 /ch'ôlssôk/ (波が強く打つ音:ばしゃっと)

b) 아/a/～우/u/

말랑말랑 /mallang-mallang/ (ふわふわ)
 물렁물렁 /mullông-mullông/ (ぶよぶよ)
 바스락 /pasûrak/ (かさっと)
 부스럭 /pusûrôk/ (がさっと)
 바들바들 /padûl-padûl/ (ぶるぶる)
 부들부들 /pudûl-pudûl/ (ぶるぶる)

c) 아/a/～으/û/

따끔따끔 /ttakkûm-ttakkûm/ (ひりひり)
 뜨끔뜨끔 /ttûkkûm-ttûkkûm/ (ちくちく)
 싹싹 /ssak-ssak/ (ごしごしこすったりもんだりする音)
 쓱쓱 /ssûk-ssûk/ (あまり力を入れずゆっくりこすったりもんだりする音)
 따끈따끈 /ttakkûn-ttakkûn/ (あつあつ)
 뜨끈뜨끈 /ttûkkûn-ttûkkûn/ (非常に熱く感じるようす:ほかほか)

d) 오/o/～우/u/

퐁퐁 /ttong-ttong/ (ぼっちゃり)
 뚱뚱 /ttung-ttung/ (でっぷり)
 소곤소곤 /sogon-sogon/ (ひそひそ)
 수군수군 /sugun-sugun/ (ひそひそ)
 꿈지락꿈지락 /kkomjirak-kkomjirak/ (わずかにゆっくり身動きするようす)
 꿈지럭꿈지럭 /kkumjirôk-kkumjirôk/ (ゆっくり体を動かすようす)

e) 애/æ/～에/e/

대구르르 /tægurûrû/ (小さい物がころころ転がるさま)
 데구르르 /tegurûrû/ (大きい物がころころ転がるさま)
 땡그랑땡그랑 /tænggûrang-dænggûrang/ (鈴などの鳴る音:りんりん)
 텡그렁텡그렁 /tenggûrông-denggûrông/ (大きな鈴や風鈴などが揺れて出る音:ちりんちりん)

一方、子音に関しては、平音・濃音・激音の3つの区別があるが、この区分がオノマトペの交替形に用いられる場合、平音<濃音<激音の順で語感が強くあるいは激しくなる。これにより、次のような語感を異にする交替形が造られ

る。

- (123) a) ㄱ /k(g)/ ~ ㄲ /kk/ ~ ㅋ /k'/
 감감하다 /kam-gam-hada/(暗い)
 감감하다 /kkam-kkam-hada/(真っ暗だ)
 감감하다 /k'am-k'am-hada/(真っ暗だ)
 고깃고깃 /kogit-kogit/(くしゃくしゃ)
 꼬깃꼬깃 /kkogit-kkogit/(しわくちゃ)
- b) ㄷ /t(d)/ ~ ㄸ /tt/ ~ ㅌ /t'/
 단단하다 /tan-dan-hada/(固い)
 딱딱하다 /ttan-ttan-hada/(非常に固い)
 탄탄하다 /t'an-t'an-hada/(堅固だ)
 땡땡 /tæng-dæng/(真鍮の器・銅鑼などをたたくときに出る音:かんかん)
 땡땡 /ttæng-ttæng/(小さい鐘・鉦などが続けざまに強く鳴る音:かんかん)
- c) ㅍ /p(b)/ ~ ㅃ /pp/ ~ ㅑ /p'/
 반반하다 /pan-ban-hada/(平らだ)
 뽀뽀하다 /ppan-ppan-hada/(なだらかだ)
 판판하다 /p'an-p'an-hada/(とても平たい)
- d) ㅈ /ch(j)/ ~ ㅉ /cch/ ~ ㅊ /ch'/
 졸졸 /chol-jol/(少量の水が絶え間なく流れる音:ちよろちよろ)
 쭉쭉 /cchol-cchol/(少量の水が速く流れる音)
 출출 /ch'ol-ch'ol/(液体が容器から少しずつあふれるようす:ちよろちよろ)
- e) ㅅ /s/ ~ ㅆ /ss/
 살랑살랑 /sallang-sallang/(そよそよ)
 쌀랑쌀랑 /ssallang-ssallang/(ひんやりした風が吹くようす:そよそよ)
 상글상글 /sanggûl-sanggûl/(愛想よく笑うようす:にこにこ)
 쌍글쌍글 /ssanggûl-ssanggûl/(にこにこ)

前節で、日本語の子音の清濁の交替において、濁がは「大きさ」、「強さ」、「荒々しさ」、「重さ」などの象徴的意味を担っていると述べたが、韓国語の交替はこれに比べるとかなり多様で複雑である。しかも、日本語の清濁の対立に基づく語幹の違いは、(122)に挙げたような母音の陰陽の対立によっても表わされている。したがって、音声象徴に関して単純に日韓の比較をすることはできないが、「強める」の具体的な意味には違いがあるけれども、日本語子音の清濁の対

立も韓国語の平音・濃音・激音の対立もともに語幹を強める働きをしているという点では共通している。

§2.1で、韓国語のオノマトペは日本語のオノマトペに比べて語彙量をはるかに大きいことを見たが、それは(122)のような母音交替や(123)のような子音交替によって交替形が数多く造られるためである。例えば、許卿姫(ホ・キョンヒ)(1989:63)は韓国語では日本語に比べて笑いに関するオノマトペが豊富であり、したがって、笑いに関する個々のオノマトペの意味範囲が日本語に比べて韓国語の方が狭く細分化されていると述べているけれども、例を詳しく検討してみると異なるオノマトペ語基が細分化されているのではなく、子音や母音の交替による交替形が多いということに過ぎないことがわかる。

日本語で、声を出さずに笑う様子を表わす擬態語としては次のようなものがある。

(124) にこり にこっ にっこり にこにこ にこにこっ にっこにこ
 にやり にやにや にやにやっ
 にたり にたにた にたにたっ
 にんまり

一方、(124)と同様あるいは類似の意味を表わす韓国語のオノマトペには「상그레」/sanggûre/系と「방그레」/panggûre/系とがある。⁴⁸ それぞれ、第1音節の母音が「ㅏ」/a/、「ㅑ」/æ/、「ㅓ」/ô/、「ㅣ」/i/の4通りに交替することにより次の8つの交替形が得られる。

(125) 상그레 생그레 성그레 싱그레
 방그레 땡그레 병그레 빙그레

⁴⁸これらは基本的には日本語の【にこ】に相当するが、交替形によっては「にやり」、「にやにや」に相当する場合もある。

また、「방그레」系の第2音節を「시」/shi/に替えた異形が存在する。

(126) 방시레 뱅시레 병시레 빙시레

語頭の子音は平音／濃音の交替をするため、以上の12通りの形に対してそれぞれ次のような交替形がある。

(127) 쌍그레 쌍그레 쌍그레 쌍그레
 뺑그레 뺑그레 뺑그레 뺑그레
 뺑시레 뺑시레 뺑시레 뺑시레

以上24通りの形式は単独で使用され反復はされない。反復形には2音節語幹が用いられる。まず、「그레」/kûre/を「글」/kûl/に替えた2音節形がある。

(128) 상글 생글 성글 싱글
 방글 뺑글 병글 빙글
 쌍글 쌍글 쌍글 쌍글
 뺑글 뺑글 뺑글 뺑글

さらに、「방시레」系のものには「시레」/shire/を「실」/shil/に替えた2音節形がある。

(129) 방실 뺑실 병실 빙실
 뺑실 뺑실 뺑실 뺑실

(128)と(129)は単独で用いることも可能であるが、次のような反復形で用いるのが普通である。

(130) 상글상글 생글생글 성글성글 싱글싱글
 방글방글 뺑글뺑글 병글병글 빙글빙글
 쌍글쌍글 쌍글쌍글 쌍글쌍글 쌍글쌍글

빵글빵글 뽕글뽕글 뽕글뽕글 뽕글뽕글
 방실방실 뽕실뽕실 뽕실뽕실 뽕실뽕실
 뽕실뽕실 뽕실뽕실 뽕실뽕실 뽕실뽕실

さらに、(128)と(129)のそれぞれについて、語末の子音を「ㄹ/l/」から「ㅅ/s/」に替えた2音節形が24通り存在する。

(131) 상긔 생긔 성긔 싱긔
 방긔 뽕긔 뽕긔 뽕긔
 쌍긔 쌍긔 쌍긔 쌍긔
 뽕긔 뽕긔 뽕긔 뽕긔
 방싯 뽕싯 뽕싯 뽕싯
 뽕싯 뽕싯 뽕싯 뽕싯

これらの形は単独形でも、また次のように反復形でも用いられる。

(132) 상긔상긔 생긔생긔 성긔성긔 싱긔싱긔
 방긔방긔 뽕긔뽕긔 뽕긔뽕긔 뽕긔뽕긔
 쌍긔쌍긔 쌍긔쌍긔 쌍긔쌍긔 쌍긔쌍긔
 뽕긔뽕긔 뽕긔뽕긔 뽕긔뽕긔 뽕긔뽕긔
 방싯방싯 뽕싯뽕싯 뽕싯뽕싯 뽕싯뽕싯
 뽕싯뽕싯 뽕싯뽕싯 뽕싯뽕싯 뽕싯뽕싯

以上挙げた形を合計すると120通りになるが、これで可能性の全てを尽くしたわけではない。(131)のうち「긔」/kût/に終わるものには、強調形として「긔」を濃音化し「긔」/kkût/とした形があり、またその反復形が可能である。

(133) a) 상긔 생긔 성긔 싱긔
 방긔 뽕긔 뽕긔 뽕긔
 쌍긔 쌍긔 쌍긔 쌍긔
 뽕긔 뽕긔 뽕긔 뽕긔
 b) 상긔상긔 생긔생긔 성긔성긔 싱긔싱긔
 방긔방긔 뽕긔뽕긔 뽕긔뽕긔 뽕긔뽕긔

쌍꺾쌍꺾 쌍꺾쌍꺾 쌍꺾쌍꺾 쌍꺾쌍꺾
 빵꺾빵꺾 빵꺾빵꺾 빵꺾빵꺾 빵꺾빵꺾

最後に、対応する「상그레」系の形と「방그레」系の形を組み合わせた次のような類音反復形式が可能である。

(134) 상글방글 생글뱅글 성글병글 싱글빙글
 쌍글빵글 쌍글뽕글 쌍글뽕글 쌍글뽕글
 상긱방긱 생긱뱅긱 성긱병긱 싱긱빙긱
 쌍긱빵긱 쌍긱뽕긱 쌍긱뽕긱 쌍긱뽕긱
 상긱방긱 생긱뱅긱 성긱병긱 싱긱빙긱
 쌍긱빵긱 쌍긱뽕긱 쌍긱뽕긱 쌍긱뽕긱

以上を合計すると、実に176通りもの交替形が3個の語基【상글】/sanggûl/、【방글】/panggûl/、【방실】/pangshil/から母音交替、子音交替、反復、語末子音の交替などの過程を経て造られている。ただし、これらの交替形は可能な形を網羅的に示したものに過ぎず、一個人がそのすべてを使い分けているというわけではない。おそらく特定の個人が使い分けているのは可能な形の10分の1以下ではないかと思われる。母語話者の筆者自身の判断ではこれらの可能な交替形のほとんどは意味的に明確に区別できないし、辞書の定義を見ても体系的に意味が区別されているわけではない。したがって、これらの交替形の区分は意味の区別に支えられたものではなく、見かけ上の形式的区分であるという性格が濃厚であると判断せざるを得ない。声を立てずに笑うさまを表わすオノマトペとしては、上に挙げたものの他には「히죽」/hijuk/(にやり、にたり)や「실실」/shil-shil/(へらへら、にたにた)およびその交替形がある程度で、異なる語基の数という観点からすれば日本語の場合とほとんど大差はないと考えられる。笑いに関するオノマトペは、オノマトペの語彙量に関する日韓の差の本質を的確に示している例であると言えよう。

韓国語の音声象徴について、青山(1977:28)は、子音の象徴的意味を次のようにまとめている。まず、擬音語・擬声語については次のようなことが言えるという。

- ① 衝撃によって発生するような音のときは、オノマトペ語基の頭音は大体において破裂音・破擦音が用いられる。また同類の自然音でも、比較的軽く緩慢な音には無気音が、硬質の物体が発するよう澄んだ鋭い音には濃音が、重い物体が発するよう鈍い音には有気音が用いられる傾向がある。
- ② 摩擦によって発生する音は、空気や固体の摩擦から液体の流動に至るまで広範囲だが、大体において頭音は摩擦音・両唇破裂音・半母音などが用いられるようである。
- ③ 自然音の形式が後に続かず急激に変化するか中断する場合には、オノマトペ語基の末音は内破音が、後に余韻を残して響く音には鼻音が、継続・流動する音には流音が、確実に停止せず変化がはっきりしない音には母音が用いられる。
- ④ 滑らかに継続するような音は流音を含む音節を重ねて描写する。
- ⑤ 自然音の形式が、同質で繰返される場合には語基を重ねた所謂疊語で描写されることは言うまでもないが、同質でしかも多少変化させた語基を組み合わせる描写する。
- ⑥ 人間の発する音声の場合、描写する語音もやはりそれと似た調音位置で発音されるようである。そしてこれは特に頭音についてはっきりしている。

一方、擬態語の場合は描写される内容と描写する手段との間は、擬声語よりも遠い間接的な関係にあるとしている。

- ① 緊密なまたは強固な状態を描写する場合には、擬態語語基の頭音に濃音を用いる傾向がある。
- ② 激しいまたは鈍濁な状態を描写する場合には、頭音に有気音を用いる傾向がある。
- ③ 擬態語語基の末音にかんしては、擬声語の場合に似て、内破音は急な変化またはけじめがはっきりした状態に、流音・鼻音・母音などは連続・維持またけじめがはっきりしない状態に用いられる傾向がある。しかしこの傾向はあまり顕著

なものとは言えない。

青山の記述は、交替形の形成に係わる音声象徴ばかりでなく、交替形に係わらないもの、形態象徴まで含まれているが、交替形に係わらない子音の象徴的意味に限って野間(1990:43)と朴東根(パク・トンゲン)(1997:181)の観察を引用してみよう。野間は、音節頭音に関して、次のような象徴的意味があるという。

- (135) 閉鎖音：衝撃・破裂
 破擦音：破裂・波動
 摩擦音：摩擦・擦過・流動
 流音：響き・持続

そして、音節末子音の象徴的意味について、野間と朴はそれぞれ次のように記述している。

(136)

	野間(1990)	朴(1997)
- ㄱ /k/	急な停止・鋭い終結	強勢、停止
- ㄷ /t/	急な停止・軽い中止・鋭さ	
- ㅍ /p/	急な停止・屈折	閉鎖感
- ㅇ /ŋg/	響き・余韻・漸次的な消滅	滑らかな流れ、弾力感
- ㄴ /n/	軽い響き・弾みのある移行	流れ、滑らかさ
- ㅁ /m/	緩行・停滞・閉鎖	継続感
- ㄹ /l/	弾み・揺れ・振動	
- ㅅ /t/		軽快感、緊迫感

この記述を比較するとあまり一致していない。これは、具体的にどのようなオノマトペを念頭に置くかによって象徴的意味のとらえ方が異なるということであり、それほどにオノマトペの象徴的意味というものは漠然としたものであるということを示していると思われる。

しかしながら、日本語の音声象徴と比べ合わせてみると興味ある共通性がみられる。促音の象徴的意味に関して、大坪(1989:119)が「力の籠もった、急迫

した感じを表し、しばしば、破裂的な感じや、破裂後の空虚な感じを伴う」と記述し、田守・スコウラップ(1999:26-9)が「瞬時性」、「スピード感」、「急な終わり方」のような意味を表わすと述べていることを紹介した。この記述と韓国語の語末音「-ㄱ/k/」、「-ㄷ/t/」、「-ㅂ/p/」、「-ㅌ/t/」(いずれも非開放で発音されるため日本語の促音に似た発音となる)に関する(136)の記述との間にはかなりの共通性があると思われる。また、撥音に関しては、大坪(1989:119)が「弾力性がある、跳ねる感じを表し、しばしば、破裂的な感じや、鳴り響く感じを伴う」と述べ、田守・スコウラップ(1999:26-9)が「共鳴」を表わすと述べているが、韓国語の鼻音の音節末音「-ㅇ/ng/」、「-ㄴ/n/」、「-ㄹ/m/」に関する(136)の記述と共通するところが大きい。また、音節頭の子音に関しても、許卿姫(1989:63)は「流音は流動を、破裂音が破裂や破壊を表わすのは、両言語に共通するところである」と述べている。

韓国語には反復形を除けば、日本語に見られるようなオノマトペに特徴的なパターンはないということを指摘したが、韓国語の音節末音は日本語のパターンに相当するような象徴的意味を担っているものと考えられる。

2.7 オノマトペの意味

韓国語のオノマトペに関する最も詳しい辞典である『朝鮮語擬声擬態語分類辞典』では、意味によりオノマトペを分類し記述している。菅野(1986:56)によれば、それぞれの意味区分ごとの収録語数は次の通りであるという。

(137)	擬声語	2129語
	人間と関連するもの	518語
	動物と関連するもの	328語
	器具、機械、楽器等と関連するもの	150語
	固体と関連するもの	946語
	気体と関連するもの	37語
	液体と関連するもの	150語

擬態語	8286語
人間と関連するもの	3209語
動物と関連するもの	879語
植物と関連するもの	97語
固体と関連するもの	1369語
液体と関連するもの	209語
気体と関連するもの	58語
空間、時間の一定の間隔をあらわすもの	22語
気候と関連するもの	73語
ほのお、光、色と関連するもの	104語
事態、状態、現象と関連するもの	137語

また、金仁和(キム・インファ)(1995:22)は、感覚別にオノマトペを分類しその割合は次の通りであったと報告している。⁴⁹

(138)	視覚オノマトペ	2517	50.5%
	動作	1533	30.8%
	状態	848	17.0%
	色彩	136	2.7%
	聴覚オノマトペ	1729	34.7%
	自然	293	5.9%
	動物	647	13.0%
	機械	789	15.8%
	嗅覚オノマトペ	22	0.5%
	味覚オノマトペ	85	1.8%
	触覚オノマトペ	302	6.5%
	心覚オノマトペ	330	7.1%
	合計	4985(4622)	

日本語のオノマトペに関しては、筆者の知る限り、これらの調査に相当するような調査は報告されていないようである。しかし、先行研究で言及されていることから判断すると、この点に関して日韓両語の間に大差はないようである。例えば、許卿姫(ホ・キョンヒ)(1989:63)や生越(1989:73)によれば、日韓両語オノ

⁴⁹ 李熙昇(イ・ヒスン)編(1982)『国語大辞典』および青山編(1991)『朝鮮語象徴語辞典』から得られた4622語のオノマトペを対象とする。

マトペには「人間の感情を表すものや人間の動作に関するもの」が多く、特に「人間の動作に関するもの」が多いという。また、日本語では匂いや味覚に関するオノマトペが少ないとされるが⁵⁰、これは(138)の結果からわかるように韓国語に関しても同じである。

一方、両語のオノマトペの違いがないわけではない。日本語には鳥や虫の鳴き声を表わす擬音語が非常に豊富であるけれども韓国語ではそれほどでもない。これは日本人が古くから鳥や虫の音に特別の関心を抱いてきたことによるものであろうと思われる。逆に、韓国語のオノマトペに特徴的な意味分野がある。「울긁불긁」/ulgût-pulgût/(色とりどりに)が典型的な例であるが、韓国語には物の色や形や配置などが均等でなく不揃いであることを表わすオノマトペが際立って多い。

(139) 가칠가칠	あっちこっちが潤いがなく少し荒い様子、あるいは非常に荒い様子
거칠거칠	あっちこっちが荒い様子、あるいは非常に荒い様子
티석티석	表面や面が均等に滑らかでなく荒くばさばさしている様子
테석테석	表面や面が均等に滑らかでなく荒くばさばさしている様子
꺼칠꺼칠	あっちこっちが荒い様子、あるいは非常に荒い様子
얼멍얼멍	均等でなく粗い様子
얼멍얼멍	糸や毛糸で編んだものが細かなく少し粗い様子
오돌도돌	表面や床が均等でなく凸凹で粗い様子
날쭉날쭉	見にくく不揃いな様子
도물도물	物体の面が滑らかでなく凸凹の様子
두물두물	物体の面が均等でなく凸凹の様子
들쭉날쭉	少し凹んだり出たりして揃ってない様子
들쭉날쭉	少し凹んだり出たりして非常に不揃いの様子
불퉁불퉁	物の表面があっちこっちはみ出てむくむくとした様子
불퉁불퉁	物の表面がはみ出てむくむくとした様子
언들먼들	床が均等でなくひどく凸凹とした様子
오물도물	床や表面が粗く凸凹で均等でない様子
울룩볼룩	床や表面がひどくあっちこっち凸凹で均等でない様子
울퉁볼퉁	均等でなく凸凹である様子
우물투물	表面や床が均等でなく凸凹で粗い様子

⁵⁰ 金田一(1978:18)などを参照。

우툴두툴	床や表面が粗く凸凹で均等でない様子
울퉁불퉁	床や表面がひどくあっちこっちはみ出て均等でない様子
울퉁불퉁	見にくく非常に凸凹である様子
울뚝불뚝	均等でなくぐっと突き出ている様子
울막줄막	小さく目立つものが均等でなく多い様子
울룩불룩	均等でなく凸凹の様子
울먹줄먹	大きく目立つものが均等でなく多い様子
울멍줄멍	大きくはっきりとしたものが均等でなく多い様子
오글쪼글	あっちこっち縮んだり凹んでいる様子
우그렁우그렁	あっちこっち縮んだり凹んでいる様子
우그렁우그렁	あっちこっち少し縮んでいる様子
우글쪼글	あっちこっち縮んだり凹んでいる様子
쪼룩쪼룩	長いものが所々かなり凹んでいる様子
오목오목	あっちこっちが窪んでいる様子
옴퉁옴퉁	あっちこっちが窪んでいる様子
옴쑥옴쑥	あっちこっちが窪んでいる様子
우묵우묵	あっちこっちが窪んでいる様子
도간도간	空間的に少しずつ間をおいて続く様子
드문드문	空間的に細かくなく間が空いている様子
듬성듬성	細かくなく粗い様子
상깃상깃	あっちこっちがかなり空いている様子
설핏설핏	あっちこっちがかなり空いている様子
성깃성깃	あっちこっちがかなり空いている様子
뜨문뜨문	空間的につまってなく間がかなり空いている様子
띠엌띠엌	間がつまってなく所々ある様子
도간도간	時間的に少しずつ間をおいて続く様子
드문드문	時間的に頻繁でなく間が空いた様子
뜨문뜨문	非常に疎らな様子
띠엌띠엌	続いてなく一定の間を置きながらする様子
감작감작	黒い染みや点のようなものが細かく散らばっている様子
검적검적	黒い染みや点のようなものが太く散らばっている様子
해끗해끗	所々白が混じっている様子
해뜩해뜩	白に他の色が所々混じっている様子
희끗희끗	所々白が混ざって見える様子
희뜩희뜩	白に他の色が所々混ざっている様子
아룩다룩	少し薄く斑な様子
알라꿩달라꿩	見にくく非常に斑な様子
알락달락	様々な色の染みや模様のようなものがいろいろ散らばっている様子
알락알락	様々な色の染みや模様のようなものがいろいろ散らばっている様子
알룩달룩	様々な色の染みや模様のようなものが均等に散らばっている様子
알송달송	様々な色の染みや模様のようなものが混ざって見分けにくいほど斑な様子
알송알송	様々な色が混ざって見分けにくいぐらい斑な様子

알쏭달쏭	様々な色や模様が混ざって見分けが付きにくいぐらい斑な様子
어둑더둑	少し薄く斑な様子
얼리꿍덜리꿍	非常に散らばっていて斑な様子
얼럭덜럭	様々な色の染みや模様のようなものが不揃いに混ざっている様子
얼럭얼럭	様々な色の染みや模様のようなものが均等に混ざっている様子
얼룩덜룩	様々な色の染みや模様のようなものが不揃いに混ざっている様子
얼룩얼룩	様々な色の染みや模様のようなものが均等に混ざっている様子
얼쏭덜쏭	様々な色や模様が混ざって見分けが付きにくいぐらい斑な様子
얼쏭얼쏭	様々な色や模様が混ざって見分けが付きにくいぐらい斑な様子
울긁불긁	様々な濃い色が他の色と混ざっている様子
가뭇가뭇	斑に黒っぽい様子
감숭감숭	所々少し黒い様子、あるいは非常に黒い様子
감실감실	少し黒々とした様子
거뭇거뭇	所々色が少し黒いような様子
검숭검숭	所々少し黒々とした様子
검실검실	少し黒々とした様子
까뭇까뭇	斑に黒い様子
꺼뭇꺼뭇	斑に黒い様子
노릇노릇	所々黄色い様子
누릇누릇	所々黄色い様子あるいは全部が黄色い様子
누릿누릿	所々鮮やかでなく黄色い様子
발긁발긁	斑に鮮やかに赤い様子
벌긁벌긁	斑できれいでなく赤い様子
불긁불긁	所々きれいで少し赤味がかった様子
불긁불긁	斑に赤い様子
불깃불깃	あっちこっちが少し赤い様子
빨긁빨긁	斑に赤い様子
빨긁빨긁	斑に赤い様子
파랏파랏	所々青い様子
푸랏푸랏	斑に青い様子
해끔해끔	色があっちこっち少し白いような様子
희스희스	疎らに白い様子
희끔희끔	色があっちこっち少し白い様子
어금지금	程度や水準に大きな差がない様子
어슴비스	お互いに似たりよったりで揃ってない様子
어쓱비쓱	お互いに非常に食い違ったり歪んでいて揃ってない様子
검불덤불	お互いに一緒に纏れて混ざって筋道が掴めず散らかっている様子
줄망줄망	細かいものが不揃いで混ざっている様子
얼기설기	纏れている様子
얼키설키	非常に纏れている様子
아롱다롱	小さな模様や点のようなものが不揃いで目が細かい様子
아롱다롱	小さな模様や点のようなものが揃っていて目が細かい様子

알롱달롱	はっきりした模様や点のようなものが不揃いで目が細かい様子
알롱알롱	はっきりした模様や点のようなものが揃っていて目が細かい様子
어롱더롱	模様や点のようなものが不揃いで目が細かい様子
어롱어롱	模様や点のようなものが揃っていて目が細かい様子
얼롱덜롱	はっきりした模様や点のようなものが不揃いで目が細かい様子
얼롱어롱	はっきりした模様や点のようなものが揃っていて目が細かい様子

意味の解説からわかるように、日本語にはこれらのオノマトペに対応するオノマトペはない。「でこぼこ(凸凹)」をオノマトペと見なすことができるかもしれないが、仮にそうであるとしても1語だけであり、(139)のすべてをカバーすることはできない。(139)のような例は、韓国人の物の見方、現象世界の認識の特徴を反映しているものと考えられる。

2.8 まとめ

本章では、日本語と韓国語のオノマトペを、語彙量および使用頻度、音韻的特徴、形態的特徴、統語機能、音声象徴機能、意味などに関して比較対照した。その結果、両語のオノマトペがそれらすべての面にわたって極めて高度な類似性を持っていることを論じた。

1) オノマトペの語彙量に関しては、韓国語の方が日本語よりも数倍多いように見えるけれども、それは、韓国語では母音や子音の交替が積極的に活用されることにより交替形が数多く造られることに起因するものであり、オノマトペ語基の数という観点から見直せば、見かけほどの差はないと考えられる。使用頻度については、比較の資料となり得るような詳細な調査がなされていないので断定的なことは言えないけれども、日韓両語の間で大きな違いはないようである。童話など低年齢向けの読み物の方が改まった文体の文章よりもオノマトペが多く使われるなど、言語レベルによって使用頻度に差があることも両言語に共通している。

2) オノマトペの長さについては、日本語も韓国語も4単位のものが最も比率

が高く 50%前後もある。しかし、他の長さのものでは比率、順位ともに両語の間で相違が見られる。日本語では3単位のものが多く、韓国語では2単位、1単位のものが多い。これは、(i)長さの単位が日本語では「拍」であるのに対して韓国語では「音節」であること、(ii)日本語が開音節言語であるのに対して韓国語は閉音節言語であること、(iii)日本語オノマトペには撥音、長音、促音、「リ」などによる特徴的なパターンがあること、などに起因する相違である。

3) 音節内における母音や子音の分布に関しては、日韓両語ともオノマトペは一般語とは異なる分布状況を示している。

4) 日本語でも韓国語でもオノマトペの最大の形態的特徴は反復形式(疊音形式)が多用されることである。反復形式は日韓両語とも「完全反復形(単純反復形)」、「類音反復形(不完全反復形)」、「部分反復形」に分類される。

5) 日本語では撥音、長音、促音、「リ」などの添加によるオノマトペに特徴的な拡張形式がある。韓国語にも拡張形のオノマトペがあるが日本語ほど顕著ではない。

6) 日韓両語とも、オノマトペの用法には副詞的用法、用言的用法、名詞的用法、引用的用法、独立用法がある。

7) 日韓両語とも、オノマトペの基本的用法は副詞的用法である。その根拠は、(i)オノマトペは、普通、そのままの形で副詞として用いられること、(ii)オノマトペの用例の大半は副詞的に用いられていることである。

8) 日韓両語ともに、オノマトペを用言として用いる場合には用言形成語尾を添加しなければならない。日本語の場合、動詞を派生する語尾は「-(ト)スル」が代表的でその他に「-(ニ)ナル」、「-ツク」、「-メク」、「-ケル」などがあり、形容詞派生語尾として「-シイ」、「-イ」、形容動詞派生語尾として「-ダ」がある。韓国語では、動詞派生語尾には「-하다」/hada/と「-거리다」/kôrida/があるが、後者は反復の意味を持ち単一形オノマトペに付くのが原則である。動詞

派生語尾には他に「-이다」/ida/、「-대다」/tæda/などがある。形容詞は「-하다」により派生するのが代表的であるが、他に「-스럽다」/sûrôpta/などがある。また、日本語にも韓国語にも、「ゆれる⇔ゆらゆら」や「흔들다/hûndûlda/(ゆれる)⇔흔들흔들/hûndûl-hûndûl/(ゆらゆら)」のように派生の方向がはっきりしないものが若干ある。

9) 日韓両語とも、オノマトペの名詞的用法は実際の用例の頻度としては非常に低いけれども、可能な形式は非常に多様である。「ワンワン」(犬)や「꼬꼬」/kkokko/のようにオノマトペが単独で名詞的に用いられる場合と、一般名詞と結合し複合名詞の形で用いられる場合とがある。後者は「よちよち歩き」や「아장걸음」/ajang-gôrûm/(よちよち歩き)のような用言修飾型複合名詞と、「キンキン声」や「산들바람」/sandûl-param/(そよ風)のような体言修飾型複合名詞とに分類される。韓国語ではオノマトペが単独で名詞的に用いられた例は日本語に比べて少ないけれども、「멍멍이」/môngmông-i/(犬)の「-이」/i/などオノマトペから名詞を派生する接尾辞が非常に多い。また、韓国語には用言修飾型複合名詞が日本語に比べて少ないけれども、体言修飾型複合名詞は日本語より豊富で多様である。

10) 日本語においても韓国語においても、音声象徴は2通りの形で働いている。1つは、「ははは」~「へへへ」、「반짝반짝/pancchak-pancchak/(きらきら)」~「번쩍번쩍/pônccchôk-pônccchôk/(びかびか)」のような母音交替や「かんかん」~「がががん」、「살랑살랑/sallang-sallang/(そよそよ)」~「쌀랑쌀랑/ssallang-ssallang/(ひんやりした風が吹くようす:そよそよ)」のような子音交替に係る音声表象である。日本語では笑い声など若干の例を除いて母音交替はあまり活用されていないけれども、韓国語では多様かつ広範囲に母音交替が活用され多くの交替形を作り出している。日本語では子音に清濁の交替がみられ、「大きさ」、「強さ」、「重さ」などの象徴的意味を濁音が担っている。韓国語の平音・濃音・

激音の交替はこれより多様かつ複雑な象徴的意味を持っているが、ともにこうした子音の交替によって語幹を強める働きをしているという点では共通している。母音交替と子音交替によって作り出される交替形の数も韓国語の方が日本語よりも圧倒的に多く、これが1)に述べたような韓国語と日本語のオノマトペ語彙量の差となって現れている。第2のタイプの音声象徴は、語彙全般を見渡した場合にある母音なり子音に共通の意味特徴が見られるという形のものであり、これはオノマトペ語彙だけに限らず一般語彙にも見られる。また、言語普遍的な面もある。このタイプの音声象徴については、子音に関する限り日韓両語で共通する部分が多い。

11) 日本語のオノマトペには反復形以外にもいくつかの特徴的なパターンがあり、それぞれが形態象徴的意味を持っている。韓国語のオノマトペには、反復形を除いて特に顕著な形態パターンは見られないけれども、音節末子音の持つ象徴的意味は日本語の形態象徴的意味と共通する部分が多い。

12) オノマトペの意味特徴に関しても日韓両語の間で大きな違いは見られない。ただ、日本語には鳥や虫の鳴き声を表わす擬音語が非常に豊富であるのに対して、韓国語には物の色や形や配置などが均等でなく不揃いであることを表わすオノマトペが際立って多い、というような部分的な違いは見られる。